

Update Information:

2026/10/05/ 9:16 PM

◆各話へのクイックリンク

設定資料を飛ばして、本編を読まれる方は、クイックリンクを使っ
ていただけます。

- [□第一話](#)
- [□第二話](#)
- [□第三話](#)
- [□第四話](#)
- [□第五話](#)
- [□第六話](#)
- [□第七話](#)
- [□第八話](#)
- [□第九話](#)

Copyright@2026 D's

「私が工業高校に進学した理由」
一学期

夢雄 美侶

Copyright©2026 D³S

タイトル

記号

全体あらすじ

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

□ 第〇幕 サブタイトル

○ 場所

補足の情景

▽ ト書き

工業高校に入学した、超変態女子高校生 夢前 美優の周りで起こる
ドタバタ学園コメディ

中学二年生の時、姉の部屋で偶然見つけた、大人への扉の本。
大人への世界に関心を持ち、立派は痴女に成長します。

圧倒的な男子生徒数の工業高校には、男子が好きな男子、男子生徒が好きな男性教師
がいたり、刺激がいっぱい 危険がいっぱい
変態、痴女、BL、TL ときどき、シリアス 何でもありの まさに、
エンターテイメント。

※本作は高校一年一学期 編となります

☆本作

- ・「私が工業高校に進学した理由 一学期」
- ・「私が工業高校に進学した理由 二学期」
- ・「私が工業高校に進学した理由 三学期」

Copyright@2026 D's

※全話を通しての設定で

登場人物

◎メインキャスト

※シリーズを通してのキャストです

夢前 美優（ゆめさき みう）（十五歳）

身長164センチ

本人は思っていないが、スタイはいい

高校一年生、（増本中学校出身）

成績は普通

ブラスバンド部に「入っており、中学では、

高校ではクラリネットを担当している

人前ではウヴな振りをしているが、内面は超エロエロ

ひとつ ひとよりエロが好き

ふたつ ふふふ とスケベ心

みつつ 見たくてたまらない

よつつ よろけて、わしづかみ

いつつ いかせてなんぼやねん

高谷 智美（たかたに とみ）（十五歳）

身長160センチ

高校一年生

野球部マネージャー

三人の中では背も高くおしやれ

みんなの前では経験済みの振りをしているが、実は経験無し

中学時代は、虐められていた

※智美の過去は二学期編で明かされる

中川 松子（なかがわ まつこ）（十五歳）

身長154センチ

高校一年生（辺富中学校出身）

吉賀に恋する乙女

成績優秀

大学へ進学するためにカメラ屋でバイトをしている

同じ中学校の出身に小島がいる

小村 健一（こむら けんいち）（十五歳）

高校一年生（増本中学校出身）

身長176センチ スタイルもいい

イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で

世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）（十五歳）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白

カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子

海外生活のため、露出など気にならない性格

小村のことが好きである

松村 純（まつむら じゅん）（十五歳）

高校一年生

身長161センチ 体重52キロ

普段は黒縁メガネをかけている

水泳部に所属している

根暗で温和しい性格

実は、服を脱ぐと、見事な筋肉質の肉体を持ち、ボクシング、空手、

などを会得し 喧嘩はかなり強い

※松村の過去は第三部で判明

（補足） 家族構成

■夢前家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅
美優、美穂の部屋が二階にある

父 (現時点・無名)

普通のサラリーマン40代

母 (現時点・無名)
コンピュータ関係の仕事をしており、ITに長けている

姉 美穂(みほ) 美優の二歳年上(十七歳)

秀才で成績は常にトップ

※中学までは、それほど成績はよくなく、中学のある出会いから
猛勉強し超難関国立大学に自宅から通っている

そのためか おしゃれに疎くすっぱんで、服もシンプル

小村家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅

父 浩太郎(こうたろう)(四十四歳)

ごくごく普通の会社でサラリーマンをしている

しかし、裏では絶大な人気を誇るアダルト小説を書いており
稼いでいる。家族にはまったく知られていない。

母 明日香（こむら あすか）（四十歳）
専業主婦

妹 明日美（こむら あすみ）健一の一つ下（二四歳）

吉賀家

代々カリブ海に浮かぶ小国の外交官をしている

祖父 吉賀 XXX（現時点・無名）
父 吉賀 XXX（現時点・無名）
母 吉賀 遥（はるか）

中川家

祖母（現時点・無名）
日本海の海岸近くに住む
実は大地主

小島家

郊外の住宅地に住んでいる
二階建ての木造建築
小島の部屋二階の和室
隣が姉（優子）の部屋

優子は、二年生で出演

○クラスメイト

2組の生徒は、3年間持ち上がりのため、変更はありません。

★主要人物

☆準主要人物

出席番号

1 足立 (あだち)

2 井口 (いぐち)

バレーボール部
喧嘩ばやい正確をしている

3 池田 (いけだ)

サッカー部
小島の仲間

4 石井 盆太 (いしい ぼんた)
通称 ボンソワール

☆

1
2

小島

智（こじま とも）

身長172センチ 普通体系だが、顔が大きいため

振り、しかも、怪獣映画に出てきそうな顔

山岳部

二次元萌えキャラ大好き

好きな色は ピンク

しかし。二次元キャラに飽き足らず、カワイイ男の子
吉賀、松村のことも狙っている

1
1

木高

（きだか）

1
0

桂川

（かつらがわ）

9

柿本

（かきもと）

8

尾方

（おがた）

7

太田

（おおた）

6

遠藤

（えんどう）

5

岩山

（いわやま）

二年生編では、姉（優子）がおり、美優の姉と同じ大学に通っている事が判明

★

13

小村

健一（こむら けんいち）

バスケットボール部

14

塩屋

（しおや）

小島の仲間

15

柴山

（しばやま）

16

白石

（しらいし）

17

高石

（たかいし）

☆

18

滝本

恵（たきもと めぐみ）

ラグビー部

元々、美優、小村と同じ中学出身

がっちりした体格で、高校ではラグビー部に所属

二部の文化祭で、年上のAV女性に好意を持ち、

クリスマスに関係を持ってしまう。

そしてAV女性が、小村の父親と知り合いであり、

滝本にはバレてしまう

1 9 谷田 (たにだ)

クラスではイケメンボーイで もてる容姿をしている
いつも中林と連んでいる

2 0 津世 (つせ)

演芸同好会

2 1 手柄 (てがら)

2 2 豊国 (とよくに)

2 3 中尾 (なかお)

バドミントン部

2 4 中谷 (なかたに)

2 5 中野 (なかの)

バスケットボール部
身長が高い

3 5	福山	俊雄	(ふくやまとしお)
3 4	福井	良樹(ふくい)	よしき
3 3	百部	(ひやくべ)	
3 2	鼻瀬	(はなせ)	
3 1	野村	(のむら)	
3 0	沼田	(ぬまた)	
2 9	新田	(にった)	
2 8	永江	(ながえ)	
2 7	中山	(なかやま)	
2 6	中林	(なかばやし)	

山岳部

★ 36 松村 純 (まつむら じゅん)

水泳部

★ 37 吉賀 達郎 (よしが たつお)

バスケットボール部

★ 38 高谷 智美 (たかたに ともみ)

野球部マネージャー

★ 39 中川 松子 (なかがわ まつこ)

★ 40 夢前 美優 (ゆめさき みう)

吹奏楽部 クラリネット担当

○教師

竹田 (たけだ) 50代

クラスの担任で、てっぺんハゲがあることから、入学早々から
ザビエルとあだ名を付けられる

見た目と違い、生徒思いの良い先生である

☆ 土呂 (とろ) 40代

保健体育担当

ゲイであり、男子生徒の股間を触るのが生きがい

落合（おちあい）男 五十代

工業化学科の教員

山田（やまだ）女 四十代

工業化学科の教員

■その他 （出数は少ないが、物語上 重要な役）

○一学期に登場

マヌカンの店長（名前は未定）推定四十代

吉賀行きつけのアパレルショップ（ディーゼル）の店長

実際は、ディーゼルの日本支社長も兼ねている

当然、男好きで、吉賀が連れてきた小村にちょっかいを出す

スリムで長身の男性

金髪で指には付け爪

○二学期に登場

川崎 (かわさき)

三年一組 デザイン科 三年では一番のイケメンと言われている
大学受験で、推薦入学をしたく、大倉のいいなりになっている

古屋 豪 (ふるや たけし) 推定三十代

※X接点の古屋と同一人物

小村のバイト先に客として登場
男色家である

須賀 小雪 (すが こゆき) 推定 三十代

美人、AV女優をしている

文化祭で滝本と出会い、付き合うようになる

白井 幸子 (しらい さちこ) ※二学期に出演

智美 中学時代のクラスメートで、智美を虐めていた

○三学期で登場

花北 大悟 (はなきた だいご) ※三学期に出演

露天商で、たこ焼きを焼いている

松村の父を尊敬している

浜田（はまだ）

高校二年生

身長170センチ 体重54キロ 色白で華奢な身体

中学時代は、陸上の長距離をやっていた

美優の一学年上 吹奏楽部 暫定部長

美優と同じでクラリネットを担当している

二宮（にのみや）通称 ニノ

高校二年生

吹奏楽部 トランペット担当

浜田に密かに恋をしている

浜野 智恵（はまの ちえ）

高校三年生

吹奏楽部の元部長を務める

清瀬（きよせ）

高校三年生 浜野と同じ吹奏楽部

背景

学校（主舞台）について

姫磨工業高等学校（ひめまろこうぎようこうとうがっこう）

美優達が通う高校

県立高校であり

一組・デザイン科

二組・工業化学科

三組・電気科

四組・機械科

五組・溶接科

六組・情報処理科

で構成される。

各科ごとに校舎がわかれており、敷地はかなり広い

シャワー室を備えた部活棟があり、二十五メートルの屋外プールを備える

クラブ活動

男子生徒が大半を占めているため、女子はマネージャーとなることが多い

・吹奏楽部

県内一の実力があり数々の大会で優勝している

・バスケットボール部

- ・ラグビー部
- ・サッカー部
- ・テニス部
- ・バドミントン部
- ・山岳部
- ・野球部
- ・陸上部
- ・水泳部
- ・極真空手部
- ・Eスポーツ部
- ・鉄道同好会
- ・クイズ同好会
- ・演芸同好会

○夢前家

若松町

○小村家

○吉賀の住むタワーマンション

新増山（しんますやま レジデンス）
五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

Copyright@2026 D's

目次

◆各話へのクイックリンク	1
「私が工業高校に進学した理由 一学期」	2
タイトル 「私が工業高校に進学した理由 一学期」	3
記号	3
全体あらすじ	3
シリーズ構成	4
全話共通設定 ※全話を通しての設定で	5
◎メインキャスト	5
(補足) 家族構成	7
○クラスメイト	10
○教師	15
■その他 (出数は少ないが、物語上 重要な役)	16
○一学期に登場	16
○二学期に登場	17
○三学期で登場	17
背景	19
学校(主舞台)について	19
クラブ活動	19
目次	21

第一話

サブタイトル「プロローグで紹介するのだ」

あらすじ

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 プロローグ

○（春の昼過ぎ）通学路

□ 第二幕 中学二年生的美優

○（二年前の春の夜）夢前家のリビング

○ 美優の部屋

○ 美穂（姉）の部屋

○ 一階のリビングのソファで腰掛けている姉

○ 美穂の部屋

○ 一階のリビング

美穂がソファに座っている

○ 美穂の部屋

○（深夜）美優の部屋

□ 第三幕 中学三年生になった美優

○（午前）中学校の運動場

○ 中学校の運動場 バスケットコートの脇

○（午後）夢前家 玄関

○（同）姉の部屋

← # 回想 # ← 父のパソコンでアダルトサイトを閲覧していたことが、

○ (数日前の夜) 夢前家	58
→# 現在に戻る #→	60
○ 漫画喫茶の個室ブース	60
□ 第四幕 小村との出会い	64
○ (中学生三年生の夏休みの昼) 中学校の運動場	64
○ (夕方) 学校の校庭	64
○ 運動場に設置されている手洗い場	65
○ 校門の前	68
○ 走り出す自転車	69
○ 小村、自転車を止める	70
○ キッチンカー横の簡易ベンチ	71
○ 自転車に乗っている二人	72
○ (夕方) 美優の家の前	78
○ 美優の部屋	79
□ 第五幕 工業高校を受験するきっかけ	81
○ (数日後の部活終了後) 道	81
○ (夜) 夢前家のリビング	83
第二話	86
サブタイトル「新しい学校生活が始まるのだ」	87
本話のあらすじ	87
登場人物 (本話のみ)	87
■ 教室のレイアウト	88

□ 第一幕 新しいクラスメイトたち	89
○ (入学式の翌日 朝) 一年二組の教室の中	89
○ 一年二組の教室 ホームルームの時間	92
○ (次の) 休憩時間	95
□ 第二幕 謎の美少年 ”吉賀”	97
○ (夕方) 一年二組の教室 ホームルーム中の教室	98
○ (その日の夕方) バスケット部 部室	102
○ (部活帰り) 学校の自転車置き場	103
○ (人気の無い) 公園の前 ※場所是不問わない。	104
□ 第三幕 吉賀の家	107
○ 吉賀の家のマンションの前	107
○ エレベーターの中	109
○ 吉賀家の玄関	110
○ 吉賀の部屋	111
○ 吉賀家のバスルームの脱衣場	114
○ 吉賀家のバスルーム	116
← ERROR MODE	125
→ ERROR MODE	129
□ 第四幕 翌日の放課後	132
○ (翌日の放課後) 教室 吉賀の席	132
○ (夕方 部活帰りの道) 人気の無い公園	132
第三話	136

サブタイトル「授業をがんばるのだ」	137
あらすじ	137
■工業化学科棟 一階のレイアウト	138
■第一実習室のレイアウト	139
□第一幕 はじめての実習時間	140
○（ある日の午前）実習室	140
□第二幕 エロエロ体育教師	147
○女子更衣室女子	147
○運動場	151
○（体育の次の時間）実習室	180
第四話	185
サブタイトル「小島くんは変態なのだ」	186
あらすじ	186
登場人物（本話のみ）	186
□第一幕 教室で松村が小島にXXX	187
○一年二組の教室	187
○（ある日）一年二組の教室 休憩時間	188
（#AIによるイメージ画像#）	189
（#AIによるイメージ画像#）	192
□第二幕 恋多き女、智美	201
○（朝）一年二組の教室	201
○教室から実習棟までの廊下	201

←# 回想 #← 昨日の放課後	203
○ (昨日の放課後) 運動場	203
→# 現在に戻る #→	205
○ 廊下	205
←# 回想 #← 昨日の野球部の部活動で	206
○ 運動場	206
→# 現在に戻る #→	209
□ 第三幕 小島の罾と松子の宝物	211
○ (午前中の休憩時間) 一年二組の教室 美優の席周辺	211
○ 一年二組の教室 保健の時間	213
○ (その日の夕方) 美優の家 美優の姉の部屋	249
第五話	251
サブタイトル 「松子の初恋を応援するのだ」	252
あらすじ	252
登場人物 (本話のみ)	252
□ 第一幕 松子と吉賀の共通点	253
○ (放課後) 一年二組の教室	253
○ 部活棟へ続く道	254
○ (夕方) 商店街のカメラ店	256
○ (翌日の学校) 一年二組の教室	261
□ 第二幕 松子 吉賀のマンションへ行く	264
○ 吉賀のマンションの入り口	264

○ 吉賀 玄関に出てくる	265
○ 吉賀家 リビングルーム	266
○ セントポーリアを置いてある部屋	269
○ (同) リビング	272
○ (同) キッチン	275
○ (同) リビング	277
(# AI によるイメージ画像 #)	278
(# AI によるイメージ画像 #)	280
○ 吉賀のマンシヨンの下	284

第六話

サブタイトル 「水泳の授業なのだ」	287
あらすじ	287
登場人物 (本話のみ)	287
□ 第一幕 小島と松村がプールでXXX	288
○ (放課後) 学校のプールサイド	288
(# AI によるイメージ画像 #)	296
第二幕 プールの時間	297
○ (夕方) 一年二組の教室	297
○ (翌日) 学校のプールの女子更衣室	301
○ 学校のプール プールサイド	302
(# AI によるイメージ画像 #)	304
○ プールの中	309

第七話..... 314

サブタイトル「みんなで試験勉強なのだ」..... 315

あらすじ..... 315

登場人物（本話のみ）..... 315

□ 第一幕 小村の憂鬱..... 316

○（放課後）体育館の中..... 316

○ 吉賀の家 吉賀の部屋..... 320

□ 第二幕 〽ハッピーな期末試験〽..... 335

○ 吉賀のマンションのエレベーターの中..... 335

○ 吉賀の家の前..... 336

○ 吉賀の部屋..... 339

○（夕方）吉賀のマンションの下で..... 350

○ 駅までの道のり..... 354

○ 駅の改札..... 355

○ 自転車に乗ってる美優と小村..... 356

第八話..... 357

サブタイトル「待ちに待った夏休みなのだ」..... 358

あらすじ..... 358

登場人物（本話のみ）..... 358

□ 第一幕 〽夏休み 前編〽..... 359

○（休み時間）一年二組教室..... 359

○（その日の帰宅後）美優の家 玄関	364
○（同）姉の部屋	364
○（夕食）夢前家	365
□第二幕 夏だぜ海だぜ！ 膿だぜ！	368
○電車の中	368
○松子のおばあちゃんの家	369
○（同）囲炉裏のある部屋	370
○（同）家の前	372

Copyright@2026 D³S



□ 第三幕（回想）海パンを買うぞ..... 377
 ← # 回想 # ← 小村と吉賀が海パンを買いにいった..... 377

○ 砂浜までの道のり..... 374

Copyright©2026 D's

○ (1週間前の日曜日) メンスファッションのショップの中	377
→ # 現在に戻る #→	389
○ 砂浜までの道のり	389
○ 砂浜	389
□ 第四幕 その夜の出来事	397
○ (夜) 古民家 小村、吉賀、松村の部屋	397
(# AI によるイメージ画像 #)	400
第九話	402
サブタイトル「ああ夏休みが終わっちゃうのだ」	403
本話について	403
あらすじ	403
登場人物 (本話のみ)	403
□ 第一幕 夏休み 後編	404
○ (朝) 松子の祖母の家	404
○ 海の上	407
○ 沖	409
(# AI によるイメージ画像 #)	410
▽ 吉賀 海に入り、松村の乗っているフロートを押している	410
← ERROR MODE →	416
○ 砂浜に置いたフロートの上	416
(# AI によるイメージ画像 #)	417
→ ERROR MODE →	420

（#AIによるイメージ画像#）	420
○美優、智美、松子 小村のいる 砂浜	421
○美優と小村がいるレジャーシート	427
○松子と吉賀のレジャーシート	431
□第二幕 最後の夜	442
○（夜） 松子の祖母の家の庭	442
○（次の日の朝）松子の祖母の家 次の日の朝	443
○帰りの電車の中	447
□第三幕 夏休みの部活の帰り道	449
○（夏休み部活の帰り）道	449
○（同）通学路	450
○キッチンカーの前	451
□第四幕 吉賀の帰省	459
○吉賀の実家	459
▽吉賀 大きな扉を開けて、リビングに入る	459
おわり	463

Copyright©2026 D³S

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第一話

夢雄
美侶

サブタイトル「プロローグで紹介するのだ」

あらずじ

美優が何故 工業高校への進学を決めたのか。中学二年生のころから遡り紹介しています。

中学二年生の美優が、偶然 姉の部屋で見つけた、エロ雑誌
はじめて見る 大人の世界にドキメキを感じます

そして中学三年生になり、小村健一と出会い、工業高校に進む決心をするのでした

登場人物（本話のみ）

・ 中学生の同級生

茜、桜子

(美優)

□ 第一幕 プロローグ

○ (春の昼過ぎ) 通学路

入学シーズンとなり、美優家族も高校の入学式に向かっている

▽ 美優、美優の母、美優の父が歩いている

▽ 女子高生 (夢前美優) が、高校に登校するシーン

私の名前は、夢前 美優 (ゆめさき みう) 十五歳

今日は、県立の工業高校の入学式

なんで女の子が工業高校なのかって？

それは・・・

中学で神童と呼ばれる秀才の姉を持つ者の悲劇だった。

ふたつ上の姉は国内有名私立女子高校の推薦入学を蹴散らし、
県で一番の公立高校にみごとトップでみごと合格。

そして現在、姉は高校三年生。

相変わらず、全国模試で2桁以内に入る成績

もつか、某有名国立大学に向け猛勉強中

そんな秀才の姉が、なぜ公立高校に通うのかは謎だった。

この謎は、やがて判るのだが
それは、さておき

私が、まだ中学二年生になったばかりの頃

Copyright@2026 D³S

□ 第二幕 中学二年生の美優

○（二年前の春の夜）夢前家のリビング

夢前家は、一般的な一戸建て住宅であり、

一階にリビング、ダイニング、父の部屋 父、母の寝室

二階は、美優と姉（美穂）の部屋となっている

▽美優、風呂上がり ソファーに座りスマートフォンをいじっている

▽美穂（姉）、風呂上がり タオルで髪を乾かしながらリビングにやってくる

美穂は、花柄のパジャマを着ている

▽美穂（姉）、美優をちらっと見る

▽美優、美穂をちらっと見る

（美優）

（相変わらず、可愛くねえパジャマを着てるなあ。

まあ、おしゃれ脳が1gも無い奴だからしょうがねえか）

▽美穂（姉）、美優の隣に座り、麦茶を飲む

▽美穂（姉）、美優の顔を見る

美穂（姉）

「美優さあ、あんた来年高校受験だよ。一体どこを受けるつもりなの？」

（美優）

（え？ なに？ 急に）

美優

「そんなまだまだ先のことなん考えてないよ」

美穂（姉）

「なに言ってるの！ あんた アホなんだから、今からでも遅いくらいよ。塾にでも行きなさいよ」

▽美優、姉のシャンプーの香りが気になる

（美優）

（ああまたメントール臭 漂わせてる。父さんのトニックシャンプーを使ったね。ちょっとは おしゃれに関心持ちなよ

美優

「部活終わって、塾なんて行ったら何時に帰れるんだよ。」

夜遅くなって カワイイ妹が、痴漢に襲われたら、どうすんの？」

美穂（姉）

「痴漢に同情するわね。近所の、おばさんたちが、なんて言ってるか知ってるの？」

美優

「何て」

美穂（姉）

「夢前さん家の妹の方、病院で取り違えたのかしらってね」

美優

「何それ？ いつの時代のドラマなの。暇なオバはん連中だね」

（美優）

（何年前のギャグなんだよお。相変わらず姉貴は 頭が昭和してんなあ）

美穂（姉）

「とりあえず、ちよっとは勉強しなさいよ。せめて、中の上くらいのところは行ってよね」

美優

「はいはい」

（美優）

（ああ、うるせえな。避難だ 避難だ。私は説教が大嫌いなんだよ）

▽美優、姉の説教から避難するため、立ち上がり部屋を出て行こうとする

▽美穂（姉）、振り向き美優に声をかける

美穂（姉）

「ちよっと、どこいくの」

美優

「宿題すんの」

美穂（姉）

美優

「まじめにするのよ」

「へいへい」

▽美優、リビングから出て行く

○美優の部屋

ベッド、勉強机、本箱 一般的な子供部屋である。

美穂の部屋も同じ構成となっている

▽美優、自分の部屋に入り、勉強机に座る

美優

「ああゝ宿題かあ、かったるいなあ。

しかし、今 下に降りると、ガリ勉強ダーのハート・ブレイク・タイフーンにやられてしまうし。明日の歴史の古田は性格悪いからな、

しょうがない、宿題をするか」

▽美優、カバンから筆箱を取り出し、筆箱のファスナーを開ける

美優

「おっと いけない、蛍光ペンを、どつかにおいてきちゃった。
学校の机かな？ いや？ 今日は、使った覚えがないけど」

美優

▽美優、あたりを見回す

「しょうがない、姉貴の借りちゃお。私って、なんて前向きな女なの」

○美穂（姉）の部屋

美優の部屋と廊下を挟んで反対側にある
部屋の明かりは消えているので暗い

▽美優、姉の部屋のドアを開けて入って行く

「ごめんなんしょ」

▽美優、ドアの横に電気のスイッチを押す

#部屋の明かりが点く#

▽美優、姉の部屋に入り、姉の机に向かう

▽美優、姉の机の上を見る

机の上には、教科書、参考書が散乱している

「汚えー。いくら勉強できるからって、これは無いよ

美優

美優

美優

姉貴の担任に見せてやりたいよ。
内申書に、勉強できるが、部屋と、腹は汚いってね書いてもらわねば」

▽美優、机の上に置いてあった、ペン立てから蛍光ペンを取り、
出て行くことと向きを代える

「やばい、やばい、ガリ勉トロンで汚染された区域から
すみやかに脱出だ」

▽美優、ふと姉のベッドに目がいく

ベッドの上に置いてある一冊の雑誌に目が行く
表紙には、爽やかなイケメンの写真

「お？ いい男。姉貴が好きなタレントかな？
姉貴ってば、男には興味が無い振りしていながら、
実は、結構、気にしてんのかな」

▽美優、雑誌を手に取り表紙を見る

「なにになに」

▽美優、雑誌の見出しを読む

美優

” 男の喜ばせ方 特集 ”

美優

「男の喜ばせ方って？ 何言ってるの
男も女も金だよ金。姉貴 無駄な雑誌を買ってな
こんなの読んでも時間の無駄無駄」

▽美優、取りあえず、ページをめくる

美優

「どっかに いい男の写真載ってないかな」

▽美優、雑誌の写真を見る

上半身裸のパンツだけの男性がうつ伏せで寝かされ、上に下着姿の女が
跨がり、女は男のパンツの下に手を入れている写真。

美優

「ええええええええ。なにこれ」

美優

「彼を仰向けに寝かせて、太ももからそっとトランクスの
中に手を入れて、モニヨモニヨモニヨ しましょう だって」

美優

「なに、なに、なに」

▽美優、さらにページをめくる

・・・男のパンツのドアップ写真

美優

「ええええ！　なんで、この人、パンツの前が膨らんでるの」

美優

「お、お、お、男って、こんなことになるんだ」

美優

「おお、こっちはマンガだ。

え？　ち・ち・ち・痴女？　ちじよって、なんだ？」

美優

「うわわわわ、握ってるよ」

美優

「シュツ、シュツ、シュツ”　って何をしてる音なんだ？」

美優

「うわわわわ　今、飛び散ったの何？」

美優

「わあ、舐めてる。信じられない」

(ナレーション)

父の薄給で買った、建売住宅の壁は薄かった。

二階からの美優の声で、一階にいる姉が気がついた。

○一階のリビングのソファで腰掛けている姉
二階から美優の声が聞こえてくる

▽美穂、二階を見上げる

美穂（姉）

「ちょっと、美優、私の部屋にいるの？ 何やってるの？」

○美穂の部屋

美優が興奮状態で雑誌を見ている

▽美優 姉の声で慌てる

美優

「な・な・な・なんでもないよ、蛍光ペン借りにきただけ」

美穂

「いいけど、十一（といち）だよ。ちゃんと返しておいてよね」

美優

「オッケー」

○一階のリビング

美穂がソファに座っている

美穂（姉）

「あれ？ 十一って言ったのに、やけに素直だな。」

それとも、アホ過ぎて かけ算も忘れたか？」

▽美穂、再び、テレビ鑑賞

○美穂の部屋

美優が、立ち尽くして雑誌を読んでいる

美優

「姉貴って、こんな すごい本読んでたんだ。大人だな」

▽美優、興奮が収まらない

○（深夜）美優の部屋

▽美優、ベッドの中にいる なかなか眠れない

美穂

「あああ、あの雑誌が気になって寝れないわ」

美優

「は！何？ この何とも言えない興奮」

美優

「いやだ、私って、そんなエッチじゃないのに」

（ナレーション）

（美優、中学2年生、思春期の始まりであった）

Copyright@2026 D³S

(ナレーション)

□ 第三幕 中学三年生になった美優

(あれから一年後の春)

○ (午前) 中学校の運動場

さらに、一年経ち 美優は中学三年生となっていた
今日は、学校行事の球技大会の日
試合が行われる場所に、気の合う女子同士が固まり、
男子の応援をしていた

▽ 生徒達 球技大会のため、運動場、体育館で競技を競っている

男子体操服は 半袖と濃紺の短パン

女子体操服は 半袖と臙脂色のブルマーである

○ 中学校の運動場 バスケットコート脇

バスケットコートの中では、男子による組対抗による試合をしている

▽ 美優、友達女子生徒二人(桜子と茜)がいる

「ねえ、美優って 気になる男子っている?」

桜子

美優

「うちのクラスで？」

桜子

「別に 同じクラスじゃなくてもいいけどさあ」

美優

「別に男子に興味ないしなあ」

桜子

「え？ そうなの？ それとも 自分がシャイなのをアピしてる？」

美優

「うーん。本当に、まだ、気にならないだって、部活が結構忙しいしさ、それに、結婚なんて まだまだ先でしょ」

▽茜 桜子、吹き出す

茜

「美優、なんでそんなに短路的なの。結婚なんて考えないわよ」

美優

「だって付き合うってことは、結婚するってことじゃないの？」

茜

「いつの時代のことを言ってるのよ。」

今時、付き合って、すぐ結婚ってことなんて、ないない。

そりゃ、好きになった人だからわからないけど、

今は、一緒にいるだけでいいの」

桜子

「ちよちよ茜、それが美優のいいところなんだから、それでいいのだ」

茜

「そうね。ほんと、美優はピュアね
そういう、桜子は誰か気になる男の子がいるの？」

桜子

「私？ 私は、前までは小村君がいいなあって思ったけど、
今は、滝本君ね。なんたって 男らしいしさ、守ってくれそうだもん」

茜

「滝本君かあ。顔はまあ上の下ってとこだけど確かに男らしいわ
筋肉質で、あの太い腕で、壁ドン されたら たまらないわね」

桜子

「で、茜は？」

茜

「私？私は、林田君かな。」

▽（インサート）イケメン男子 林がおしゃれして道を歩いている

茜

「この前、駅でちらっと見たんだけど、
すぐくおしやれなの。ほかの男子生徒と違って大人っぽくって
そこら辺の大人よりかっこいいわ」

桜子

「ねえ美優も、少しは男の子のこと考えてみてみたら」

美優

「ええ、まだいいよ」

▽美優 茜、桜子、男子バスケット試合を見ている

桜子

「しかし、うちの学校の体操服は、古くさいわね」

美優

「何で？」

桜子

「今時、女子がブルマなんて学校ないよ」

美優

「そうなの？」

茜

「そうよ」

美優

「そうかな？ 私は、動き易くていいと思うんだけど」

茜

「美優は、男子より先に まずは オシャレの勉強が必要よね」

茜

「ほら、男子だって めっちゃ短い短パンだよ。今時の学校なら、ハーパーン 膝上だよ」

美優

茜

「それが　なんで　ダメなの」
「ほら、あそこにいる（男子A）君見てみてみなよ。」

▽三人、（男子A）の方を見る

バスケットコート横で体育座りしている（男子A）を見る
体育座りで、短パンの裾から白いものが見えている

茜

「短パンの裾から、白のブリーフ見えてるし。
今時、白のブリーフを穿くのは　マザコンぐらいよ」

桜子

「ええ、（男子A）君てマザコンなの。秀才でちょっといいなあって
思ってたのに」

▽茜、バスケットの試合に出ている（男子B）を見る

茜

「（男子B）君なんか、体操ズボンの前がすごく膨らんでるの丸分
かりじゃん。キモイよね。何を興奮して膨らんでいるのやら」

美優

「興奮したら、前が膨らむの？」

茜

「えー　美優、それマジ？　で言ってる？」

美優

「うん」

桜子

「そっか、美優には、一度、保健体育の特別講義をしてあげなきゃね」

○（午後）夢前家 玄関

球技大会の為、昼過ぎには家に帰ってきた美優

▽美優、ドアを開けて玄関に入ってくる

美優

「ただいま」

▽シーンとしている

美優

「返事が無いな。よしよし」

▽美優、急いで、階段を駆け上がる

▽美優、自分の部屋で着替えて、一階に降りる

▽美優、お茶とテーブルの上の菓子を袋を掴み、再び階段を上がる
姉の部屋に入る

○（同）姉の部屋

▽美優、姉の部屋に入る

ベットのマットレスの隙間から雑誌を取り出す

美優

「あったあった、最新号。毎月の楽しみだね。
姉貴が、部活に励んでいるおかげで、今日も、隅々まで読んであげるよ」

美優

▽美優、姉のベッドに横になり、雑誌のページを開く

「しかし、あいつら、何が男らしいよ。なにがオシャレよ。
男の価値がわかってないわね。純情な振りをするのも大変だな」

美優

「男子の短パン。モッコリが変？ 何いつてるの、いいじゃない、いいじゃない。
目の保養だよ」

美優

「そんなことより、読むことの集中しなきゃな。
まずは、巻頭特集

なになに、彼のどんな仕草に興奮するかって？
そりゃ、金くれる時に決まってんだろ。
相変わらず、くだらない質問やってんな」

美優

▽美優、雑誌のページをめくる

「どれどれ、

”イクのを我慢している時の顔”

”イク寸前の顔”

”イク瞬間の顔”

”いった後の はにかんだ顔”

美優

「行く？ 遊園地か？ なんだかんだ言っても男は子供だよな
いや、待てよ 遊園地じゃないかもしれない。

なにか、大人の階段の先に、すばらしいものがあるのかも
後で漫画喫茶に調べに行っとくか。

この前なんて、ローションと どちらのコンビニを 間違えてたりしたからな。
どうりで、コンビニで、ヌルヌルって おかしいと思ったよ」

(一時間経過)

美優

▽美優、雑誌を読み終わる

▽美優、雑誌を閉じる

「さあ、読んだ読んだ。そうだ、さっきの“イク”ってどういう意味だ」

▽美優、時計を見る

美優

「夕飯までに時間はまだあるな

私は、好奇心を抑えることができない人間なのだ。
しょうがないから、今から調べに行くか」

▽美優、玄関で靴を履く

自転車に跨がり、隣町までこぎだす

▽美優、しばらく 自転車を走らせ

自転車を一旦止め、カバンから、サングラスと帽子、マスクをする

美優

「ふふふ。家のパソコンで調べると、パソコンオタクの
パパ上にばれるからな。私って、頭いい」

(ナレーション)

なぜ美優はスマートフォンで、調べないのか？

父

美穂

父

ITオタクの美優の父親は、夢前家のスマートフォンを管理しており、アダルトサイトに繋がらないのだ。もし、繋がったとしても、履歴を見られてしまうのでヤバイ検索は、一切できないのであった。ITオタクの血を引く美優は、漫画喫茶からのアクセスが一番足が付きにくいということを、本能で知っているのである

←# 回想 #← 父のパソコンでアダルトサイトを閲覧していたことが、
ばれそうになった時

○（数日前の夜）夢前家

美優、姉が、ソファでくつろいでる

▽父、やってくる

「おい、誰か父さんのパソコンを使ったか」

「今時パソコンなんか使わないわよ。なんでそんなこと聞くの」

「いや、ちょっと、アダルトサイトを検索した形跡があったんだ」

▽美優、ドキッとする

美穂

「もう、そんなの見るわけないじゃない」

▽父、美優の顔を見る

父

「美優じゃないよな」

美優

「わ、わ、私。そんなの見るわけないじゃない」

美穂

「そうよ。この子が、そんなもの見るわけないでしょ。
初潮だってまだなんだから」

父

「じゃ、誰なんだ？」

美穂

「ねえ、お父さん、最近お母さんとは、どうなの？　ね？　ね？」

父

「え？　そういえば・・・」

美穂

「じゃ、決まりね。お母さんだわ？　欲求不満なのよ」

父

「そっか。わかったよ」

美優

▽父、リビングから出て行く

→# 現在に戻る #→

「なんて事があったもんね。」

▽美優、変装し終わっている

○漫画喫茶の個室ブース

美優は漫画喫茶に到着し、個室ブースに入っている

▽美優、パソコンを操作

「検索、検索 ” いく ” ” 男 ” だと検索結果をクリック」

▽美優、パソコンを操作

「おつ、動画もあるじゃないか」

「これをクリック」

○男が射精している動画が再生される

美優

美優

美優

美優

▽美優、吹き出す

「これ、これが、男がいく　ってことだったのか。

美優

▽美優、興奮してうなり声

「うおおおおお」

美優

「他には」

美優

▽美優、さらに動画を再生

「うおおおおお」

店員

▽店員、美優の声に気づく

店員は、大学生男子のアルバイト　それなりにイケメンである
美優のブースに近づき　扉をノック

「お客様」

▽美優　店員の声は聞こえず、興奮し　うなり声

美優

「おおおおお」

店員

「お客様 どうされました」

▽美優、無視

店員

「お客様 失礼します」

▽店員、を開ける

店員

「お客様、大きな音を出されどうされ……」

▽店員、ソコンの画面 男×男 の 性行為動画 を見てしまう

0

(店員)

(なんだ、この少女は？変態か？注意していいのか？

そんなことをしたら、俺が、こいつらみたいになされてしまうのか？
だめだ、ここは、見て見ぬふりだ)

店員

「失礼しました、思う存分お楽しみください」

▽店員、優の場所から離れる

美優

(ナレーション)

▽美優、員がいたことなど気づかずパソコン画面をガン見

「なに、男のイク瞬間の顔。

ステキだわ。今までで最高の興奮だわ」

(美優 さらにバージョンアップ)

Copyright@2026 D&S

□ 第四幕 小村との出会い

○（中学生三年生の夏休みの昼） 中学校の運動場
夏季練習きっている生徒たち

▽美優 部活の練習に来ている

運動場の端で、トランペットの練習中

※美優はブラスバンド部に所属してトランペットを担当

「やっぱ、外で思いっきり吹けるのっていいわ」

▽美優、周りを見渡し、目をつぶる

目を瞑り、トランペットのマウスピースを咥えてみる

▽美優、マウスピースのヒンヤリとして固い感触を感じる

▽美優、マウスピースを口から離し眺める

「ちがう。男のアソコがこんなに固いわけないわ」

○（夕方） 学校の校庭

美優

美優

▽部活が終わった生徒らが帰宅しようとしている

○運動場に設置されている手洗い場

▽美優 運動場の水道でマウスピースを洗っている

トランペットは、手洗い場の狭い縁においてある

▽小村、部活帰りの小村が水を飲み、学生服姿でやってくる

「よ！ 夢前 練習お疲れ！」

「あ、小村君。お疲れ」

▽美優、うつむき加減でマウスピースを洗っている

「夢前も部活終わったのか」

「そうよ」

「夢前って、この角度でみると、かわいい顔してるよな」

「何言ってるの。そんなお世辞言っても無駄無駄」

小村

美優

小村

美優

小村

美優

小村

美優

美優

小村

小村

「そうかな？ 体育祭の行進の時、先頭でトランペット
吹きながら行進してるだろ。いさましい女だなと思っていただけだな」

「ちょっと それって、私が女らしくないとでも？」

▽顔を上げる美優

腕が水道の上に置いてあったトランペットに当たった。
トランペットが落下する

「あ」

「危ない！」

▽小村 体と手を伸ばし、落下しかけていたトランペットをキャッチ

#水道水が小村の股間にかかる#

「わ、冷てええ」

▽小村 トランペットを美優に渡す

小村

美優

小村

美優

小村

美優

小村

▽小村 濡れたズボンを見る

「あちゃゝ」

「ごめんなさい」

▽美優 ポケットからハンカチを取り出し、小村のズボンを拭きだす

「いいよ。いいよ。もう帰るところだったし。」

しかし、このままだど、気持ち悪いな。」

「本当にごめんなさい」

▽美優 悲しそうな顔をする

▽小村 美優の表情を見て なんとかしないと考える

「そうだ、部活のユニフォームに着替えればいいんだ。それで解決」

「本当に大丈夫」

「本当に、本当 大丈夫だって。そうだ、夢前も部活が終わったんだろ

美優

小村

美優

(美優)

小村

美優

「一緒に帰ろうぜ」

「え？」

「嫌か？」

「嫌じゃないけど」

(学生服を濡らしてしたから断れないじゃない)

「じゃ、着替えてくるから、校門の前で待ち合わせな」

▽小村 バスケ部の部室に走っていく

○校門の前

▽小村 自転車に跨がり美優を待つ

バスケット部のユニフォーム上下を着て、上にジャケットを羽織っている

▽美優 校門の所に来る

「ごめん、待ったでしょ」

小村

「俺も今来たところだから、後ろに乗りなよ」

美優

「二人乗りは禁止よ」

小村

「堅いこと言うなって」

▽美優、小村の自転車の後ろに座る

○走り出す自転車

小村

「家は、若松町の方だったよな。近くなったら案内してくれよ」

美優

「うん」

小村

「そういえば、こうやって夢前と二人で帰るのって初めてだよな」

美優

「そうね」

(美優)

(なんか、怪しい雰囲気じゃん)

小村

「同じクラスになって半年になるのにな」

美優

「普通 男女ってそんなもんじゃない？」

小村

「そっか。俺は、もっと 男女と関係なく話してみたいけどな」

美優

「私は、ちよつと男子と話すの恥ずかしいわ」

○小村、自転車を止める

美優

「どうしたの？」

小村

「なんか腹 減ってない？」

美優

「べつに大丈夫だけど」

小村

「俺、あそこのクレープ一度食べて見たかったんだよね
でも、男ひとりだと買いにくくてさ」

▽小村、キッチンカーのクレープ屋を指す

(美優)

(おおお。金銭 要求してきたぞお。どうしよう)

(数分後)

○キッチンカー横の簡易ベンチ

▽小村、ベンチに座ってる

▽美優、クレープを持って小村にクレープを渡す

「はい。チョコレートクレープ。お金はいいわ。トランペットの修理代からみたら全然安いわ」

「サンキュー。やっぱり練習の後に甘いものはいいなあ」

「うん、ホットするわ」

「それって、洒落かい？」

「は？」

「だって、温かいクレープ食べて、ホットするんだろ？」

「いや、あのお、ぜんぜん、洒落じゃないから」

美優
小村
美優
小村
美優
小村
美優

小村

「そうか？ 俺なら、座布団、持っていくぜ」

美優

「座布団持っていくなら、やっぱ、洒落になってないってことでしょ」

(美優)

(小村くんって、こんなに面白い人だったんだ。
クラスでは友達が多い見ただけと目立たないし、
温和しいイメージしかなかったのに)

○自転車に乗っている二人

小村

「なあ夢前って、付き合ってる奴 いないの？」

美優

「なんで？ そんな事聞くの？」

小村

「別に。なんもないけど。夢前って、結構かわいいし、
付き合っている彼氏が いても不思議じゃないからな。
それに、ブラバンの後輩からも人気あるだろ」

美優

「いないわよ。後輩だって単にカワイイ、弟と妹よ」

小村

「そっか」

美優

「そうよ。小村君こそ、どうなの？ 結構イケメンじゃない」

小村

「俺がイケメン」

美優

「そうよ。クラスの女の子の中に、小村くんがカッコイイって言う子だっているんだよ」

小村

「もしかして夢前もそう思ってくれてたりして」

美優

「そうね。クラスの中ではね」

小村

「なんだ？ その限定した範囲は」

○横断歩道 赤信号になっている

▽小村、赤信号に気づき、急ブレーキをかける

美優

「キャッ」

▽美優、はずみで手が一旦はなれ、美優の手は小村の股間の上に移動

小村

「ごめん、大丈夫 話に夢中で赤信氣が付かなかった」

美優

「大丈夫よ。でも ちゃんと前を向いて運転してよね」

小村

「ごめん、ごめん、気をつけるよ」

○再び走る自転車

小村

「じゃ、レッツゴー」

○小村の股間をおさえている美優の両手

美優は、異様な手の感触に気づく

(美優)

(え、ちよっと、ちよっと、この感触はなに？もしかして、男の人あれ)

▽小村、下を向き、美優の手が、自分の股間を掴んでいるのに気づく

(美優)

(や、やばい、どうしよう。小村君、気がついているのかな
でも、今、手をどけると、バレそうだし、ここは知らん顔しておくのが
得策だわ)

▽小村、股間の方を見る

意識すればするほど、硬く大きくなっていく

(小村)

(やべえ。でかくなってる)

▽美優 小村の股間が硬くなっていることに気づく

(美優)

(やだ、さつきより固くなってる)

(美優)

(ああ、これが小村君のなのね。もう少し 触っていたいわ)

▽小村、再び 自転車、ブレーキをかけ止まる。

(美優)

「キャ」

▽美優 どさくさに紛れ 小村のバスパンの上から陰茎を握る美優

(美優)

(わ、太くなってる)

▽小村 自分の股間を掴んでいる美優の手を見る

小村

「夢前さん、ちょっと言いにくい事なんだけど、俺の大事なところに手が当たってるようなんだ」

美優

「え、え、え」

▽美優、慌てた振りをして、手を小村の股間から話し、荷台を持ち直す

(美優)

(ち、ばれたか)

美優

「え？ ご、ごめんなさい。自転車のサドル、そうサドルだと思ってたの」

(美優)

(なんてね)

小村

「いや、ごめん。悪いのは俺の運転が下手くそだから、夢前さんが悪いんじゃないよ。変なものに さわらせてしまって ごめんね」

美優

「え？ 変なものって？」

小村

「えっと、男の大事なところ」

美優

「ち、ちつとも変じゃないわよ。本当にごめんなさい。

先が丸くて固いから てっきり自転車のサドルだと勘違いした私が悪いの」

小村

「先が丸くて、固い？」

(美優)

美優

「ええ、サドルよサドル」

小村

「ぞっか、実はさっき、ズボンが濡れた時、中のパンツも濡れてしまつて、バスパンの下は、何も穿いてないんだ」

(美優)

(ノーパンなのか。どうりで、ダイレクトに感触が伝わってきたよ)

小村

「でも、誤解しないでほしいんだ
バスパンと大事なところが、自転車漕いでいると擦れてしまつて固くなつてただけだから。あ、俺、何言つてんだ」

美優

「なんの事かわかんないけど、濡らしてしまったのは私のせいだし。固くなつたって、どういうことなの」

小村

「男つてさ、エッチなことを考えると、固くなるんだつてでも、俺、夢前さんと ちつとも そんなこと考えてないから」

美優

「へえ、はじめて知つたわ。大丈夫。小村君は真面目なことを知ってるもん」

美優

小村

美優

小村

美優

○（夕方）美優の家の前

▽美優、小村の自転車から下りる

「送ってくれてありがとう」

「俺も楽しかったよ。自転車に女の子を乗せるなんて初めてだよ
これからも、部活の帰り時間が合えば、一緒に帰ってくれるかい？」

「ええ、いいわよ。私も一人で帰るのが寂しいし」

「じゃ、俺、帰るね。クレープ ゴチ！」

「うん。また明日学校でね」

▽美優、小村を見送る

▽美優、小村の姿が見えなくなり家に入る

○夢前家 玄関

美優

母

美優

美優

▽美優、玄関のドアを開けて家に入る

「ただいま」

▽母、玄関に美優を迎えにくる

「お帰り、美優。着替えたらずにご飯食べにいらっしやい」

「はい」

▽美優、急いで、自室への階段を駆け上がった。

部屋に入り、部屋のドアを閉めた。

○美優の部屋

▽美優、手の平をみつめる

「あの感触・・・

柔らかいものが、だんだん大きく堅く。イヤらしいわ。とつても。でも、なんて、神秘的なの。

しかも小村君、とつても純情フフフ。

パンツが擦れてたなんて。焦っていいわけしるなんて、カワイイわ。男前だし、小村君って、どんな顔してイクのかしら？わたし、絶対、小村君をこの手でいかせてみる。そうよ！　これが、私に与えられた使命なのよ」

Copyright@2026

□第五幕 工業高校を受験するきつかけ

○（数日後の部活終了後）道

あれ以降、小村と美優は、下校時間が合えば、一緒に帰るようになっていた

▽小村、自転車を押して歩いている

▽美優、小村の横を歩いている

「夢前さんは、志望校は決めた？」

「私？ 私は、真ん中あたりの普通科かな」

（実は下から数えて二番目の学校だけど）

「やっぱり女の子は普通科だよね」

「小村君は」

「俺は、姫磨（ひめまろ）工業高校に決めてるんだ」

小村

美優

（美優）

小村

美優

小村

美優

「姫磨工業高校？ってどこ」

小村

「結構近場なんだけどなあ。やっぱ工業高校ってマイナーなんだな」

美優

「男子校ってイメージだから、全然マークしてなかったわ」

小村

「デザイン科だったら女子の方が多いんだけど」

美優

「そうなの？」

(美優)

(美術 “2” の私には関係ないわな)

小村

「その中の、工業化学科に行くんだ」

美優

「科学？ って、星とか？ 生き物とかの？」

小村

「ははは、そうじゃないよ。化け学の化学だよ。

今って、安全な食べ物ってないだろ。肥満薬で太らされた肉や殺虫剤が掛かった野菜。そんなの食べてるんだぜ。

だから、俺は、万能な農薬や肥料を開発して、安全な食材で世界中の餓えを無くすのさ」

美優

「すごい。将来の事も考えてるんだ」

小村

「うん。人間、生きていくのに食べなくちゃならないからね」

美優

「がんばってね」

○（夜）夢前家のリビング

美優 ソファでくつろいでいる

▽父、リビングに来て、美優の近くにくる

父

「美優、母さんから聞いたぞ、進学先は工業高校にするんだって」

美優

「そうしたいんだけど お母さんも、お姉ちゃんも反対し困ってるの」

父

「そうか！ でも大丈夫、父さんは賛成だ」

美優

「え？ 本当！ お母さんは、女の子が男ばかりいる学校に行くのは反対だって言うのよ。」

父

「何を言ってる。今の社会、女だって手に職をつけるべきだ。」

特に、美優のような器量の無い場合は、結婚できる可能性が宝くじで

一等当てるより難しいだろう。
そんな時、手に職をもっている、一人で生きていけるぞ」

美優

「そうよ。お父さん、わかってるじゃない」

(美優)

(アホ親父め。玉の輿に乗っても、絶対面倒みてやんねえぞ)

美優

「お姉ちゃんは、男子校に行って、襲われたらどうするんだって」

父

「お姉ちゃんに言っただけよ。心配無用と」

(美優)

(お前の葬式の時、鼻に線香さしてやる)

父

「だいたい、お姉ちゃんも お母さんは、心配しすぎだよ」

美優

「そうよ。そうよ。私だって、もう十七才よ」

父

「痴漢だって襲う相手を選ぶぞ。

そうだ！ 外灯をもっと増やそう。明るくなれば、痴漢だって、間違えなくて済むはずだ」

(美優)

(墓石に 呪 って描いてやる・・・我慢我慢、ここは父を味方におかねば)

父 美優

「ありがとう、お父さん」

「母さん達の説得は、ワシに任しておけ」

Copyright@2026 D's

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第二話

夢雄
美侶

サブタイトル「新しい学校生活がはじまるのだ」

本話のあらすじ

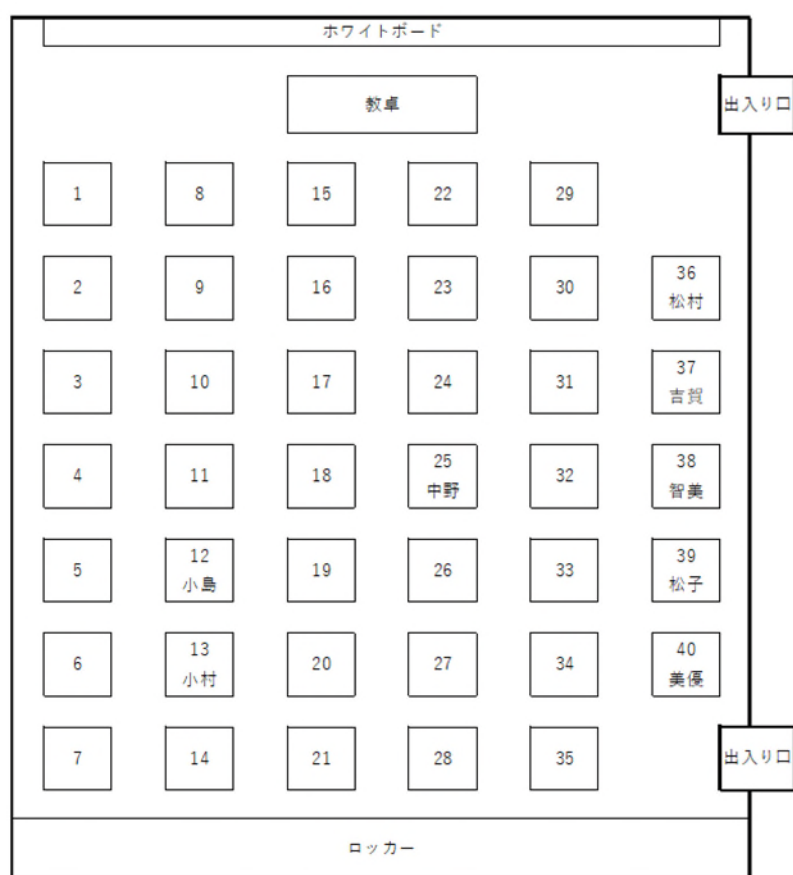
工業高校での学校生活が始まります

まずは、帰国子女で超金持ちの吉賀の生活がわかり、吉賀は小村に好意をもっていることが判ります。

登場人物（本話のみ）

（特になし）

■教室のレイアウト



廊下

(ナレーション)

□ 第一幕 新しいクラスメイトたち

○ 姫磨工業高校の入学式の風景

そして春、美優は 小村のイク顔をみるために猛勉強し、
見事、小村と同じ志望校に合格したのであった。
めでたし、めでたし。

○ (入学式の翌日 朝) 一年二組の教室の中

▽ 美優、こんな廊下を歩いている

▽ 美優、教室の扉を開けて入る

○ 一年二組の教室 智美が後ろを向いて、智美と会話している

座席は出席番号順に窓側から割り振られている

女子は、男子の次にくるため、男子の最後 吉賀の次が

智美 (高谷)、松子 (中川)、美優 (夢前) となる、

▽ 松子、美優に向かって手招きをする

松子

智美

美優

松子

智美

美優

智美

美優

智美

松子

「きた、きた」

「こっち、こっち」

▽美優、いそいで、松子、智美の場所（自分の席）に行く

「おはよう」

「おはよう」

「昨日ぶり」

「うんうん。昨日は、緊張して話できなかったもんね。えっと、高谷さん」

「智美でいいわよ」

「じゃ、私は、美優で」

「よろしくね。美優。じゃ、中川さんは なんて呼べばいいかしら」

「わたし。じゃ、私も 松子 でいいわ」

美優

「松子 って」

松子

「やっぱり変よね。昔から この名前でからかわれて嫌なのよ」

智美

「そうかしら？松って、日本の代表って感じでいいじゃん」

美優

「そうよ、そうよ。それに、芸能人にも居そうじゃない」

松子

「ふふ ありがとう、じゃ、松子って呼んで」

美優

「おっけー松子。ね、みんなは、どこから来てるの」

私は、増本（ますもと） 中学から来たの」

松子

「私は、辺富（へんとみ） 中学からよ」

松子 背は低く、可愛い系。いかにも勉強できますのような感じ

智美

「私、湖日（こにち） 中学よ」よろしくね」

智美は、背は高く、スラッとしたでプロポーションの美人系の女子

▽美優 松子、智美を見る

（美優）

（こいつ、処女でないな）

(智美・松子)

松子

(ナレーション)

▽松子 智美、美優を見る

(色気ない子ね)

「よろしくね」

県立工業高校の工業化学科 生徒四〇名のうち
女子は三人だけであった。

これから卒業までの三年間、この四〇名と過ごすことになる。

(数分後)

〇一年二組の教室 ホームルームの時間

▽担任(竹田)、教壇で話をしている

少し、頭のとっぺんが薄いので、早速

“ザビエル”とあだ名が付けられてしまった。

「吉賀君、ちょっと前にきてくれるかな」

竹田

吉賀

「はい」

▽吉賀 席を立ち 教壇の方に向かう

吉賀達郎（よしが たつお）髪は茶髪、色白の小顔
身長は160センチ 体重48キロで 華奢体つき

▽智美 後ろを向き、松子に話しかける

智美

「吉賀君 何かしら」

松子

「さあ」

竹田

「この吉賀君だが、実は帰国子女で、つい先日 日本に帰国したばかりなんだ。
お父さんの仕事でずっと海外で暮らしていて、まだ日本に
慣れてないそうだから、みんなで助けてあげてほしい」

男子A

「え、帰国子女てなんだ」

男子B

「どこの国から来たの」

○教室 騒がしくなる

竹田

「静にしろ。そんなことは、あとで、直接本人に聞いてくれ。じゃ、吉賀 何かみんなに一言あれば」

吉賀

「吉賀達郎（よしがたつお）です。海外といっても、父も母も日本人ですので日本語での話はできますが、たまに分からない言葉もありますみなさん教えてください」

男子D

「おっけーおっけー」

▽吉賀、席に戻る

▽智美、吉賀に声をかける

智美

「ねえねえ、どこの国から来たの？」

▽吉賀、後ろを向く

吉賀

「カリブ海の小国からだよ」

智美

「すごいカリブ海かあ、行ってみたいわ」

吉賀

「うん、海は世界一綺麗なところだからね」

竹田

智美

▽竹田、しゃっべている智美と吉賀に注意

「こらこら、ホームルームだぞ」

「すいません」

○（次の）休憩時間

▽生徒A、数人が吉賀のところに来て、いろいろ質問をしている

生徒A

「ねえ、英語ペラペラなの」

吉賀

「普通に話せるかな」

生徒A

「すげえ」

▽美優 智美 松子、美優の場所に集まり会話している

松子

「すごい、帰国子女だって」

智美

「しかも 美形だし」

Copyright@2026 DS

松子

松子

美優

(美優)

「両親とも日本人って言ってたけど、きっと美男美女なのね」

「ねえ美優はどう思う」

「え、私？わたしは、どっちでもいいわ」

▽松子 智美 顔を見合わせる

▽美優、少し離れた席に座っている 小村を見ている

松子と智美はの話題は、吉賀一色

(小村君、私たち、これから三年間一緒なのね。

卒業までに、絶対、小村君を私の手で、いかせてあげるわね)

□第二幕 謎の美少年 ” 吉賀”

吉賀がカツアゲされたということで、竹田から誰かと一緒に帰るようにそこで、小村と一緒に帰ることになるのだが

○（翌日の朝） 一年二組の教室

▽美優 松子 智美、美優の周りに集まり、しゃべっている

美優が、最後尾となるため、後ろが広く 基本、三人は美優の周りが、
智美は、美優と松子の間に来て会話することとなる

「ねえ。他に同じ中学校の子っているの？ 美優は？」

「私は、ここから近いからなのか、2人いるわよ」

「誰？ 誰？」

「滝本君と、小村君」

「どっちも、イケメンね。うらやましいわ」

「そっ？ で、智美たちは」

智美

美優

智美

美優

智美

美優

智美

松子

美優

智美

松子

竹田

「私の中学からは私一人だけなの」

「私も。って言いたい所だけど、一人いるわ。しかも超ブサメン」

▽松子、小島の方を見る

▽美優 智美、小島の方を見る

「それって最悪う。悪夢が3年間つづくのね」

「視力、だだ下がりよ」

「言えてる」

○（夕方）一年二組の教室 ホームルーム中の教室

▽竹田、教壇に立ち、連絡事項を話している

「昨日、吉賀がカツアゲにあった。幸い何も取られずに済んだが、相手は、どこかの高校生だと思われる。おまえらも十分注意して、危ないと思ったら走って逃げるか、どこかの店に飛び込んで

助けを呼ぶんだぞ」

井口

「逃げるなんて、情けないよな。やっちまえよ」

竹田

「おい！ 井口、ケンカになって退学にでもなったらどうするんだ」

井口

「でも、カツアゲだろ。正当防衛だつて」

竹田

「とにかく、ケンカはだめだ。吉賀がまた同じ目に遭うかもしれないな。誰か吉賀と同じ方向の奴はいないか？」

女子の陣営では・・・

松子

「吉賀君、カツアゲにあったんだ」

智美

「無理もないわね。あの見た目じゃ、鴨がネギしよってるって
いうよりも、カモが松阪牛しよってるようなもんよね」

美優

「言ってるゝ」

竹田

「おい、誰か吉賀と方向が一緒の奴はいないのか？」

再び、竹田がクラスメイトに呼びかける

小村

「あの、俺」

▽小村 手を上げる

▽竹田 小村の気づく

竹田

「どうした 小村」

小村

「同じ方向なんだけど、俺、部活があるんで、帰りが遅いけど、いいのかなあ？」

竹田

「そうか、部活があるよな。吉賀は、何か部活に入ったのか」

吉賀

「まだですけど、じゃ、僕が小村君と同じ、クラブに入ればいいんですね」

竹田

「そうだな、それで解決だ……」

ん？ 小村が何部か聞いてからの方がいいんじゃないか？」

小村

「俺、バスケだけど、吉賀くん大丈夫？」

吉賀

「僕、バスケ大好きです」

小島

「いくら好きでも、あの身長だとレギュラーは無理じゃね」

(美優)

(身長より、チン長が、必要なのよ)

小村

「じゃあさ、早速、今日行ってみるか」

吉賀

「うん」

美優

「あゝあゝ、ショック！」

松子

「どうしたの美優」

美優

「私も、バスケ部のマネージャーになる！」

松子

「何言ってるの、あんたは昨日、クラリネットするんだって
吹奏楽部に入部届を出してたじゃない」

智美

「ね、ね、もしかして、美優って小村君のこと」

▽美優、慌てる

美優

智美

美優

「ない、ない、ないって」

「その慌てよう……ますます怪しい。だいたい、二人とも同じ中学でしょ」

「だから、何にも無いって」

○（その日の夕方）バスケット部 部室

▽小村、バスケのユニフォームから制服へ着替えている

▽吉賀、ユニフォームがないから、自前のＴシャツに、先輩がおいていった
バスパンを穿いている

「いきなり、今日から出なくてよかったのに」

「いいんだ。家に帰っても暇だから」

「丁度、去年卒業したユニフォームがあつてよかったよ」

「うん。ユニフォーム買ったら、これは返すようにするよ」

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

「しかし、吉賀くんて、バスケのセンスあるよ」

吉賀

「そう？」

小村

「だって、初めての割に、人を避けるの上手いし、ジャンプだって高いじゃないか」

吉賀

「まあ、身長が低い分、体が軽いからね」

小村

「二人で頑張っっていこうな」

○（部活帰り）学校の自転車置き場

小村

「吉賀君は、どうやって通学してるの」

吉賀

「僕は、歩きで来てるんだ。学校から半径2キロ以内は、自転車通学禁止なんだって」

小村

「そんな校則は守らなくていいよ」

吉賀

「校則は 守るためにあるんだよ」

小村

「固いこというなよ。じゃ、後ろに乗りなよ」

吉賀

「二人乗りも禁止だよ」

小村

「そう言うなって」

吉賀

「じゃ」

▽吉賀、小村の自転車の後ろにのる

▽小村、自転車をこぎ出す

（数分後）

○（人気の無い）公園の前 ※場所は問わない。

▽吉賀 小村、小村の漕ぐ自転車に二人乗中

▽少年A、突然、小村の漕ぐ、自転車の前に立ちはだかる

少年A

「おっと、危ない」

小村

▽小村、慌てて自転車を急ブレーキをかけ停める
「危ないじゃないか」

少年 A

「ごめん、ごめん」

▽少年 A、後ろに座っている吉賀の顔を見る

少年 A

「お！ 昨日の奴じゃん。わざわざ金を持ってきてくれたのか？」

小村

「お前らか。俺の友達にちよっかい出したの。いい加減にしろよ」

少年 A

「あん？ 今日は仲間連れてきたのかよ。
それとも、スポンサーさん かい？」

小村

「吉賀行くぞ！」

▽小村、思いっきり自転車を漕ぐ

少年 A

「おい、まてよ」

▽小村、転車で猛ダッシュし、道を滑走させる

小村

「どうだ、バスケットで鍛えた足を見ろってんだ」

Copyright@2026 D'S

□ 第三幕 吉賀の家

(数分後)

○ 吉賀の家のマンションの前

吉賀

「ここだよ」

▽ 小村、転車を停め、マンションを見上げる

小村

「吉賀の家って、ここなの」

吉賀

「うん。そうだよ」

小村

「すげーところに住んでるんだな」

吉賀

「そうでもないけどね」

小村

「はあ。しかし、全速力で漕いだから疲れたよ。吉賀君、大丈夫か？」

吉賀

「うん僕は、乗せてもらってるから大丈夫。小村君の方は」

小村

「ああ。普段から鍛えているから。と言いたいけど、さすがに二人乗りはきついな」

吉賀

「ごめん、小村君」

小村

「いいよ、いいよ」

吉賀

「そっだ、僕の家で休んでってよ」

小村

「もう、遅いし 帰るよ」

吉賀

「そっか、もう、遅いよね。ごめんね。僕、今、独りで住んでいるから
つい、引き留めてしまって」

▽吉賀、しそうな顔をする

(小村)

(吉賀 日本に来たばかりでさみしんだな)

小村

「オッケー、少し、休ませてもらうよ」

吉賀

「うん」

○エレベーターの中

▽吉賀 小村、エレベーターに乗る

▽吉賀、カードを取り出し、エレベーターのスキヤナーにタッチ

○エレベーターが動き出す

「え？ 何？」

「僕の家の方に行くには、このカードキーが必要なんだ」

「さうって言うけど、それって、すごくない？」

「そうかな？ 結構不便だよ。他の人が乗ってたら、家に入れないもん」

「なんだ そりゃ」

○エレベーターが止まる。

小村
吉賀
小村

▽吉賀、エレベーターの階数ボタンをランダムに数個押す

○エレベーターの扉が開く

目の前には、両開きのドアが現れる

○吉賀家の玄関

▽吉賀、ドアの横にある、指紋認証機に指をタッチする

「カッチ」（鍵の開く音）

▽吉賀、ドアノブに軽くタッチ

ドアが開く

▽小村、玄関の広さに圧倒される

「なんて広い玄関なんだ」

「二十人くらいの人来的时候あるからね」

「に、二十人。俺の家だと入りきらない人数だ」

吉賀

「客室も二室あるから、いつでも泊めてあげるよ」

小村

「泊まりはしないけど、すげえ家だな」

▽吉賀 小村、靴の脱ぐ

吉賀

「今日は、誰もいないから、気にしないで」

小村

「誰もいないって、親は」

吉賀

「両方とも海外に出張中だよ」

小村

「海外に出張中って、すごいよな」

吉賀

「そんなことはいいから、まあ入って入って」

○吉賀の部屋

四十畳くらいの部屋で、机、ソファ、ベットが置いてある。

吉賀

「ここが僕の部屋。どうぞ」

小村

「これが部屋？ 俺の家より広いよ」

吉賀

「そんなことないよ」

小村

「まじだって」

吉賀

「でもさ、学校から帰って、一人でこんな家にいたら、どう？
話し相手 いないしさ」

小村

「そっか、俺だったら耐えられないかもな。というか、
一人ってどういうこと？」

吉賀

「両親とも外交官だから、殆ど、海外出張で日本にいないんだよ。
たまに帰ってきてても、すぐに、またどこかに行ってしまう」

小村

「じゃ、飯の支度は？」

吉賀

「平日の午前中にお手伝いさんが来て、洗濯、掃除して、ご飯を作って
帰ってくれるんだ」

小村

「ほんと、すごいな。驚いてばかりだよ」

吉賀

「さあ。座って、座って」

小村

「こんな、いいソファーに座ると、汚れるよ」

▽吉賀、ズボンを脱ぎ、カッターシャツのボタンを外し出す

小村

「どうしたの」

吉賀

「部活で汗をかいたから着替えようと思って」

▽吉賀、黒のボクサーブリーフだけの姿になる

吉賀

「あ、そっか。小村君も汗を流しにきたんだよね。すっかり忘れてた
シャワー浴びようか」

小村

「俺は、やっぱり いいよ」

吉賀

「遠慮しなくていいよ。僕は、汗臭いのいやなんだ」

▽小村、自分の体臭を匂ってみる

吉賀

「ごめん。小村君のこと言っただんじやないから」

小村

「いや、確かに臭うよな。シャワー借りていいかい」

吉賀

「もちろん じゃ、シャワールームに案内するよ」

▽吉賀、部屋を出る

▽小村、着いていく

○吉賀家のバスルームの脱衣場

▽吉賀、脱衣場の引き出しを開ける

▽吉賀、村に手提げカバンを渡す

「はい、小村君 タオルと着替え」

「タオルだけでいいよ」

吉賀

「せっかくシャワー浴びて、汗流すんだよ。

お手伝いさんだって、洗濯もの無いと退屈するでしょ」

小村

「いいのか」

吉賀

「いいよ。どうせ来客用のやつだから」

小村

「じゃ」

▽小村、提げを受け取り、中からタオルを取り出す

▽小村、次に黒のボクサーパンツを取り出す

小村

「おれ、ボクサーパンツってはじめて」

吉賀

「そうなの？じゃ、トランクス派かな」

小村

「そう」

▽小村、脱衣場で服を脱ぎ始める

▽吉賀、ボクサーブリーフを脱ぐ

▽小村、吉賀の尻を見てしまう

▽小村、目をそらす

▽小村、トランクスを脱ぐ

▽小村、タオルで前を隠している

▽吉賀、バスルームの扉を開ける

○吉賀家のバスルーム

入ると直ぐ シャワーブースが並んでいる

「これがフロ？ やっぱ、フロだけでも、俺の家並みじゃん」

「さすがに、それは無いでしょ」

「絶対、あるって」

「まあ。それは後で。汗を流そう」

▽吉賀、蛇口をひねり、シャワーを浴び出す

小村

▽小村、吉賀のを見て 自分もシャワーを浴び出す

▽シャワー浴びている二人

▽小村、タオルに石けんを付けて体を洗いだす



(#A Iによるイメージ画像#)

「汗を掻いたあとの、シャワーは最高だよな。
で。シャワーの後は、キュッつと」

吉賀

「小村君って、飲むの？」

小村

「なんて、冗談だよ。ジュースでもあれば最高だな」

吉賀

「残念、本気にしちゃった。一緒にキュツと！ したかったのに」

小村

「え？」

吉賀

「冗談だって」

▽吉賀、シャワーを止める

吉賀

「小村君、背中を洗ってあげるよ？」

小村

「え？ いいよ」

吉賀

「いいから遠慮しないで」

▽吉賀、手にもっているタオルで、小村の背中を洗い出す

小村

「人に洗ってもらうって、気持ちいいよな」

吉賀

「わかる、わかる。美容院でシャンプーしてもらった時は至福だよな」

小村

「吉賀 美容院に行ってるんだ」

吉賀

「昔からそうだよ」

小村

「美容院で、女の人が行くところじゃないのか」

吉賀

「何言ってるの。おしゃれ男子は美容院だよ。小村君も行ってみたら」

小村

「いや、遠慮しておくよ、高そうだし」

吉賀

「高いかどうかは わからないけど、リラックスできるんだけどな」

小村

「いや、俺はストレスになりそうだ」

▽吉賀、小村の背中を洗っていた手を止める

吉賀

「はい、じゃ、次はこっち向いて」

小村

「え」

吉賀

「いいから、こっち向いて」

小村

「さすがに前に向くのは」

吉賀

「いいから」

▽小村、手で股間を隠し、吉賀の方に向く

吉賀

「手をどけないと洗えないよ」

小村

「マジではずかしいんだけど」

吉賀

「男同士だよ。気にしない、気にしない」

▽小村、手をどける

▽吉賀、小村の股間を見る

吉賀

「立派じゃない」

小村

「こんなところに立派ってあんのか」

Copyright©2026 D's

▽吉賀、小村の胸のあたりからタオルでこする

吉賀

「小村君、かっこいいよね」

小村

「そんなこと言われると照れるだろ」

▽吉賀、しゃがむ

吉賀

「まだ、皮がついてる」

小村

「皮って」

▽吉賀、小村の陰茎の皮をひっぱる

小村

「ちょっと、ちょっと、痛いよ」

吉賀

「ごめんごめん。これが皮」

▽吉賀、立ち上がり、自分の陰茎を見せる

吉賀

「ほら、僕はもう剥けてるんだ」

小村

「ほんとだ。中身が出る」

吉賀

「中身って、面白い言い方だね」

小村

「何で言えばいいんだよ」

吉賀

「ここは、亀の頭って書いて、亀頭って言うんだよ」

小村

「亀頭か。確かにそう見えるよ」

小村

「で、なんで亀頭が出てるといいの」

吉賀

「うーん。一般的に剥けてる方が、いいことになってるの」

小村

「そっか、吉賀も知らないんじゃないか」

吉賀

「日本人は、二十歳くらいまでは剥けてない人が多いっていうからね」

小村

「俺さ、たまに大きくなった時に、亀頭とやらが出てきて、そしたら、痛いんだよね」

吉賀

「たぶん、慣れてないから擦れていたんだよ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

「慣れか。別に痛い思いするなら、このままでもいいかな」

「いや、やっぱり剥けてる方がいいよ。ちよっと練習してみよっか」

「練習って」

「いいから まかせて」

▽吉賀、小村の陰茎を手へのせ、やさしく擦りだす

「ちよっと、ちよっとまった」

「大きくしないと、剥けないでしょ」

「いやでも」

「大丈夫、痛くしないから」

▽吉賀、小村の陰茎をさすっている

「やべ、大きくなってきたよ」

吉賀

「うんうん。小村君の大きいね。もう少しで、出てきそうだ」

吉賀

「あ、出てきた」

小村

「ちょっと痛いかも」

吉賀

「そっか。小村君の場合、皮が小さいんだね。それで締め付けられるから痛いんじゃないかな」

小村

「そうなのか」

吉賀

「何度かしていると、皮が伸びて、痛くなくなるよ」

小村

「そんなもんなのか」

吉賀

「じゃ、優しく洗ってあげるね」

小村

「吉賀が触つてると、ぜんぜん元にもどらないよ」

吉賀

「そっか」

♥ ← E R O M O D E ♥ ←

「じゃ、どうしたら、元に戻るか、教えてあげる」

「そんなこと 知ってるのか。授業中に急に大きくなって、困るときがあるんだ 教えてくれよ」

「じゃ」

▽吉賀、小村の陰茎を握し、ゆっくりと扱きだす

「なに 何するんの」

「いいから 小さくする方法を知りたいんでしょ」

▽吉賀、小村の陰茎を激しく扱きだす

「あう」

▽小村、膝ががくつく

「感じてきてるね」

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

▽吉賀、立ち上がる

▽吉賀、小村の背後に回る

背後から、両手を腰から回し、小村の陰茎を握る

「え、なに」

「僕に任せて」

▽吉賀、小村の陰茎を真っ直ぐに扱きだす

「あ、やめて、やめて」

「あ、ああ。うっ」

「もう少し我慢したら、気持ちよくなるよ」

▽吉賀 もう片方の手を 小村の胸にあて 指先を乳首へ

爪で、小村の乳首の先をなぞる

「あ、だめ」

吉賀

「乳首も 立ってきたね」

▽吉賀、背後から表側に回る

▽吉賀、小村の前に立ち小村の乳首の周りを舐めはじめ

「ちょっと、ちょっと」

小村

吉賀

「しっ」

▽小村、上を向く

▽吉賀、自分の人差し指を小村の口に入れ、小村の舌の上をさする

小村は、話せなくなる

▽小村、足がガクガクし、吉賀の手の動きに合わせて、腰を振り出す

「あう」

小村

▽吉賀、小村の口から指を出し、指で小村の乳首をいじりだす

小村

「あ、やばい、小便が出る」

吉賀

「このまま出していいよ」

小村

「いや、マジでやばい、トイレに」

▽吉賀、小村の陰茎を激しく扱う

小村

「あ、もう、だめ 間に合わない」

▽小村、大きく足ががたつく

(シャワー室の壁に、小村の精液が飛び散る)

▽小村、息が荒い

(数秒間)

小村

「だめ、も、漏れる」

▽小村、射精する

シャワールームの壁に精液張り付く

小村

「漏らしちゃったじゃないか」

▽吉賀、小村の勃起した陰茎をゆっくりと扱く

小村

「こういう時って、こんなネバネバした小便が出るんだよな」

吉賀

「これは、小便じゃないんだけどね」

小村

「そうなんだ」

▽吉賀 小村の 萎んだ陰茎を手で持つ

吉賀

「ほら、しぼんできたよ」

▽小村 下を向いて自分の陰茎を見る

小村

「でも俺、小便漏らすなんて、できないよ」

♥→ E R O M O D E ♥→

▽吉賀 自分のシャワーブースに戻る

▽シャワーから出る二人

○吉賀家の脱衣場

吉賀と、小村がタオルで身体を拭いている

「どう、すっきりした」

「シャワー浴びて、すっきりしたよ」

（すっきりしたのは、そこじゃないんだけどね）

「僕も」

▽小村 ボクサーブリーフを穿く

▽吉賀 小村を見る

「サイズは どう」

「ちょうど いいよ」

吉賀

小村

（吉賀）

吉賀

吉賀

小村

吉賀

小村

「よかった。小村君のパンツは、洗濯が終わったら、学校に持って行ってあげるね」

「ありがとう」

Copyright@2026 D'S

□ 第四幕 翌日の放課後

○（翌日の放課後）教室 吉賀の席

▽小村、吉賀の席にやってくる。

「吉賀ごめん、今日は俺、用事があつて部活を休むんだ」

「そうなの？残念だな」

「ごめん、一人で帰れるかい？」

「大丈夫だよ。まさか、昨日の今日だし」

「そうだよな。じゃ、そういうわけで、部長にも言っておいて」

「了解」

▽小村、急いで教室を出る

○（夕方 部活帰りの道）人気の無い公園

▽吉賀、道を歩いている

▽少年A、吉賀を見つけ、吉賀の前に立ちはだかる

「おいおい、また会ったな。俺ら、よっぽど縁があるよな」

少年A
吉賀
「また、貴様らか。ひっこいね」

少年A
「おおっ、今日は、えらい強気だな。昨日の白馬の王子様はどうした？一人で大丈夫か？」

吉賀
「いい加減に消えろよ。僕は君らみたいに暇じゃないんだ」

少年B
「暇じゃないなら さっさ出す物出して、いきな」

吉賀
「あいにく、捨てる金は有っても、お前らに やる金はないね」

少年A
「痛い目に遭わないとわかんないようだな」

▽少年A、吉賀に殴りかかる、

▽吉賀、手のひらで相手の拳を掴み、ぐっと握りしめる

少年
A

「いてゝ」

▽吉賀、少年Aの手をひねり出す。

少年
A

「離せ、離せ、こいつ」

少年
B

「こいつ、ふざけやがって」

▽少年B、吉賀になぐりかかる

▽吉賀、足で少年Bの腹にけりを入れる

▽少年B、転ける

少年
B

「う、う、う」

▽吉賀、少年Aを引き寄せる

吉賀

「これ以上、僕を怒らせるな」

▽吉賀、少年Aを体ごと突き放す

Copyright©2026 D's

吉賀

▽少年A 転んでいた少年Bの上に転ぶ手をつきはなす

「次、会った時は、容赦しない」

▽吉賀 去っていく

Copyright@2026 D'S

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第三話

夢雄
美侶

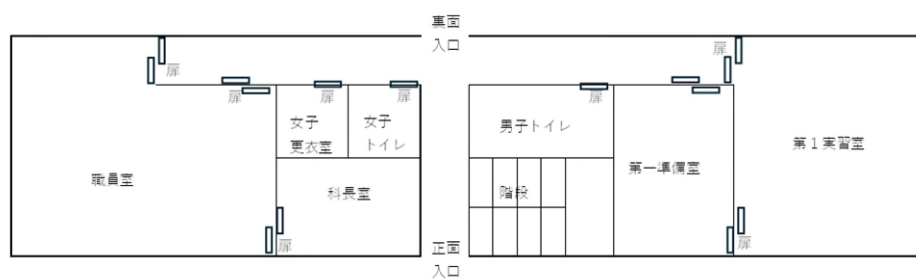
サブタイトル「授業をがんばるのだ」

あらずじ

県立姫磨工業高校の教師の中で、超インパクトのある 土呂 が登場
土呂は、イケメン男子高校生が大好物。そんな土呂は、美少年の吉賀に
さっそく狙いを定めます

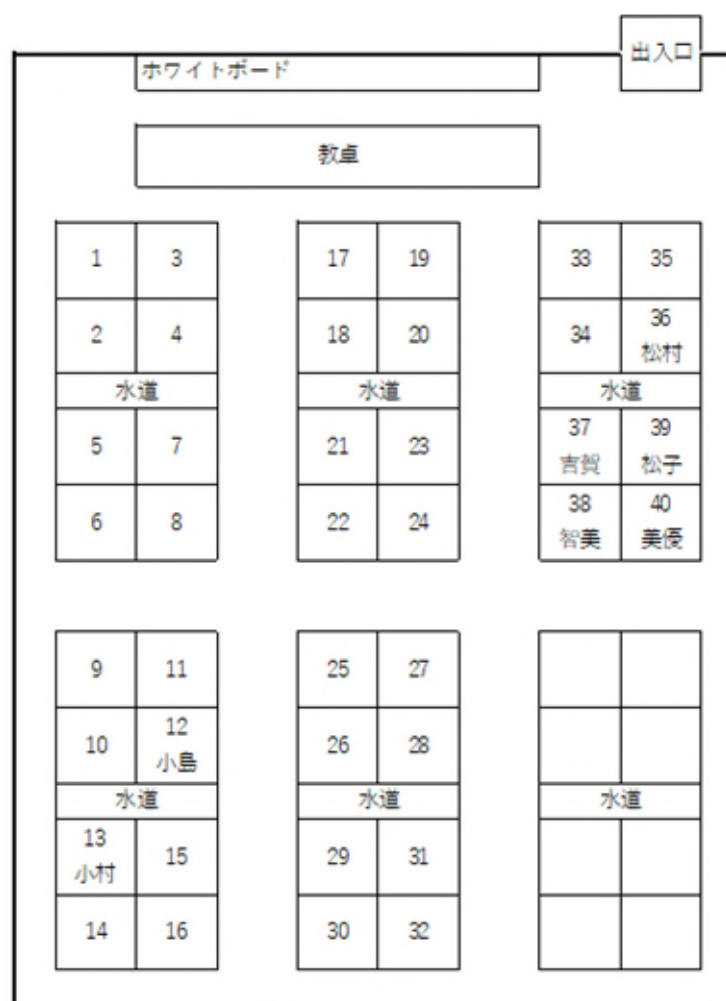
Copyright@2026 D's

■工業化学科棟 一階のレイアウト



Copyright©2026 D³S

■第一実習室のレイアウト



□ 第一幕 はじめての実習時間

工業高校のカリキュラムは普通科高校と違い、授業の半数は専門教科になっている。

そのうち、いくつかは実習を伴うことがあり、実習の時は四人で一つのグループに分かれて行う。

グループの分け方は出席簿順となり、このクラスでは男子最後の吉賀は必然的に女子三人のグループに入ることとなる

○（ある日の午前）実習室

まだ休憩時間なので、実習室には全員入っていない

▽美優 智美 松子 吉賀、一グループなり、左側前方のテーブルに座っている

▽男子A、実習室入ってすぐの吉賀のグループに近づき、

椅子に座っている吉賀に話しかける

「いいなあ吉賀は」

「何が」

吉賀

男子A

男子A

「実習時間、女子と一緒にじゃん」

吉賀

「そうかな？別にいいとは思ってもないけどね」

男子A

「代わってやりたいよ」

▽美優、吉賀に話かける

美優

「ちょっと、吉賀くん、今なんて？こんな美人達と会話できて、うれしいと思わないのかしら」

吉賀

「美人かどうかはおいておいて、面白いとは思うけどね」

美優

「面白いって、私達芸人じゃないわよ。ねえ智美」

智美

「そうよね」

吉賀

「ごめん、ごめん」

男子A

「相変わらず夢前はおもしろいな。じゃ、あとでな」

吉賀

「うん」

▽男子A、去って行く

▽小村、実習室に入ってきて、やはり吉賀の席にくる

小村

「吉賀の席　ここなんだ」

吉賀

「出席番号順のようだよ。ホワイトボード見てみて」

▽小村、ホワイトボードを見る

ホワイトボードにテーブルのレイアウトに、出席番号が振られている絵が書かれてある

小村

「ラッキー。俺は、後ろだ」

吉賀

「残念だな。離れちゃうね」

▽美優　小村と吉賀の会話に割って入る

美優

「ちょっと、小村君　聞いてくれる。吉賀君たら、ひどいの。女子に囲まれて、幸せでしよって聞いたたら、違うんだって」

吉賀

「違うよ。夢前さんが、美人でしょって聞くから」

小村

「なんだ、吉賀。もしかして、夢前にいじめられてるのか。こいつが何かしたら、俺が摂関してやるから」

美優

「ちよつと小村君、何言うのよ。私は何もしないわよ。されるのは、私の方。いいから、早く、席に戻って」

小村

「はいはい」

(始業のチャイムが鳴る)

小村

「じゃ、吉賀 また後で」

吉賀

「うん」

▽小村、自分の席の方へ移動

松子

「実習って、なんだかワクワクしない」

美優

「うんうん。講義だと睡くなるから、助かるわ」

落合

▽教師（山田（女）　落合（男）、実習室に入ってくる

「えっと、実習を担当する私が落合で、こちらが山田先生だ。よろしく」

程なく、授業が始まった。

初めての実習は、器具の洗い方だった。

実習卓の横に添え付けられている流しで、試験管やスポイトを洗っていた。

▽美優、試験管を洗っている　試験管を見つめて

（美優）

（こんな太さじゃ満足しないわね・・・

いかん　いかん、神聖な授業時間になんてこと考えているんだ）

▽松子、吉賀が向かい合わせに、試験管を洗っている

「ねえねえ、吉賀君は、どこに住んでいるの？」

吉賀

「新增山だよ」

松子

「新增山って、再開発地区で、今、タワマンがいっぱい建つてるところでしょ」

吉賀

「そうだよ。一応、僕もそのタワマンの一つに住んでいるんだ」

松子

「すごい、吉賀君ちっってお金持ちなのね」

吉賀

「そんなことないよ」

松子

「いいなあ、一度でいいから高い場所から街の景色を見てみたいわ」

美優

「でも松子、タワマンって言っても、部屋が何階にあるかだよ」

松子

「ねえ吉賀くん家は、何階なの」

吉賀

「一応、最上階の50階かな」

松子

「え、最上階。すごい。ね、美優 すごいじゃない」

美優

「うんうん。うちにこんな金持ちがいたのが、すごいよ」

松子

「ねえ今度、遊びに行ってもいい？」

吉賀

「いいよ」

智美

松子

智美

松子

智美

「ちょっと松子、さっきから何言ってるの。女の子が男の子の家に行くなんて」

「え、そうなの。私、高所から見る景色が見たいだけなんだけど」

「そうじゃなくって。男子の家に女子が一人で行くってのは」

「行くってのは何」

「まあ、いいわ」

Copyright@2026 D's

□第二幕 エロエロ体育教師

★ ☆ ★ 参考 ★ ☆ ★

これから出てくるランニングパンツですが、

”asics XT1524”の白色です。

★ ☆ ★ 参考 ★ ☆ ★

そして今日は、高校生になったの初めての保健体育の授業

○女子更衣室女子

女子三人は体操服に着替えていた。

ちなみに男子は、教室で着替えを行う

女子の体操服は夏は半袖と7分丈 冬は長袖 長ズボンのジャージ

男子は、冬は 長袖 長ズボンのジャージだが、

夏は、白のランニングシャツとランニングパンツである。

「智美の胸が大きいのは知ってるけど、体操服だと一段と目立つわね」

「ふふふ、そりゃ、毎日、彼氏に揉んでもらってるもん」

松子

智美

松子

「えーそれって、問題発言！」

智美

「冗談よ、冗談。松子だって、そこそこじゃん」

▽美優、自分の胸をみる

(美優)

(女は、胸ではない。テクニクだ)

智美

「ねえねえ、知ってる？ 体育教師の土呂（とろ）って
ゲイらしいわよ」

松子

「え？ まじ？ キモッ！」

美優

「えっと ゲイってつまり、男の人が男の人を好きってこと？」

智美

「そうそう、それも、よりによって、若い男の子」

松子

「ええ、最悪じゃん」

美優

「それって、マジでやばいんじゃないの？」

智美

「それに、うちの男子の体操服って見たことある？」

美優

「どんなのだっけ？」

智美

「白のランニングシャツに白のランニングパンツよ」

美優

「え？ ランニングシャツ、ランニングパンツ？ってどんなの？」

智美

「テレビで 箱根駅伝って見たことある？正月にやってるやつ。その選手が着ているやつよ」

美優

「ああ、それだったら、学校でみたことあるわ。陸上部のユニフォームね」

智美

「そうね。ちなみに うちの陸上部のユニフォームは紫よ」

美優

「でも、なんで、ランニングシャツとランニングパンツじゃダメなの？」

智美

「美優、今日、ちゃんと男子を見ておきなよ」

美優

「うん、わかった」

智美

「で、それを体操服に指定したのが、土呂ってわけ」

松子

「わあやダ」

美優

「でもさ、そんな奴が、よく体育教師やってられるわね」

智美

「何言ってるの。だから学校も安心できるんじゃない」

美優

「へっ？　なんで？」

智美

「女好きのエロ教師が、女子生徒をやらしい目つきで見てたらどうなる？」

松子

「そりゃ、クレームの嵐だわね」

智美

「でも、男好きの男教師が、露出の高い男子生徒を舐め回すように見ていたら？」

美優

「そりゃ、目の保養よね」

松子

「え？」

美優

「あ、違う違う」

松子

「なるほど。私たちは安心してわけね」

「そういうこと」

○運動場

工業高校の運動場は、比較的広い

▽男子生徒らは、朝礼台の付近で、しゃべり混んでいる。

▽美優 智美 松子、運動場に出て、男子生徒を見る

(#A1によるイメージ画像#)



▽美優、ランニングパンツの股間部分が、もっこりしている姿を見る

(美優)

(わっ。何、ここはパラダイスなの？ヘブンなの？)

智美

「どう？うちの体操服。結構、目立つでしょ」

美優

「ええ、確かに、短いけど 動きやすそうじゃん」

松子

「そこを 言う」

○チャイムが鳴る

▽美優 智美 松子、男子の居る方に近づく

(美優)

(もっこりがよく見えて、至福じゃ)

▽土呂、運動場にやってくる

大柄で小太り、とても体育の教師とは思えないが、

昔は、バレーボールで全国大会までいき、姫磨工業高校のバレー部も
全国大会 ベストエイトにまでのし上げた人物である

土呂は、細長い木の枝のようなものをもっている

▽土呂、生徒の前にたつ

土呂

「おーい、背の高い順から2列で並べ」

▽生徒、身長を見比べながら並ぶ

男子の中で、一番背が低いのは吉賀である。

次に女子の中で背が一番高いのが美優なので、必然的に吉賀の後ろ美優がに並ぶことになる

美優、智美、松子 の順となる

▽美優、吉賀の後ろに並ぶ

吉賀の横は、智美が並んでいる

▽美優 前にいる吉賀の後ろ姿を見る

色白で、華奢な体、体毛も殆どない、見事な身体である

(美優)

(吉賀って、よく見ると、小尻で、結構、スタイルいいじゃん)

土呂

「これから保健体育を受け持つ土呂(とろ)だ。卒業までよろしくな」

▽美優 土呂をまじまじと見る

(美優)

(なにあれ、土呂っていうより、某アニメのキャラじゃん)

土呂

「じゃ、まずは、ラジオ体操をするから ちょっと、広がれ」

▽生徒たち 間隔を広げる

土呂

「はじめ」

▽生徒たち なにもしない

▽土呂 もっている木の枝で、地面を叩く

土呂

「おら、かけ声してやらんか」

▽生徒たち ラジオ体操をはじめまる

生徒

「いち・に・さん・し、いち・に・さん・し」

▽土呂 生徒の間を 歩き回る

土呂

「おらあ、もっと 声だせえ！」

生徒

「いち・に・さん・し いち・に・さん・し」

生徒

「いち・に・さん・し いち・に・さん・し」

土呂は 50 cm くらいの長さの竹のような棒を持っている。
それを振り回しながら、ラジオ体操している生徒の間を通り抜けていった。
一人の生徒の前で止まった。

▽土呂 一人の生徒に、棒を使いランニングパンツにスソを捲る

カラフルなパンツの柄が見える

「ん？ なんだこれは？」

生徒 A

「ボクサーパンツですけど」

土呂

「そんなものは分かってる。誰が、パンツを穿いていいと言った？
体操を止め！」

▽生徒たち ラジオ体操を中断

土呂

「おい、お前ら、ランニングパンツの下に、何も穿くなど言っただろ。
日直、昨日の連絡で伝えたのか？」

生徒B

「はい、伝えました」

土呂

「だったらなんで、ランニングパンツの下にさらにパンツを穿いているんだ？」

生徒C

「こんなの ペラペラで 恥ずいじゃん」

生徒D

「だいたい、こんな短いの、しゃがんだら中が見えるだろ」

土呂

「うるさい、そのためのインナーが、付いてるだろ
いいから、急いで、穿いている奴は今すぐ脱げ」

生徒E

「マジかよ」

生徒F

「女子もいるんですよ」

土呂

「いいか、ランニングパンツの下に他のパンツを穿くことは禁止だ
これから お前達は激しい運動をするんだぞ。擦れて股ズレを起こすと
どうなるか。大事なところが傷付くんぞぞ。
このパンツには、そういったことを考えて、最初から
インナーが付いているんだ」

生徒G

「先生、説明は もう わかったから今日は、勘弁してよ」

土呂

「うるさい。脱げと言ったら脱げ」

▽土呂、竹の棒で地面を思いっきり叩く

▽数人の生徒達 しかたなく、パンツを脱ぐために運動場の端に移動

土呂

「早くしろ！」

松子

「サイテーー こんなところで脱がすなんて」

智美

「本当よね、土呂のやつ。脱いでいる男子のあそこ、めっちゃ見てるわよ」

美優

「サイアク」

(美優)

(ああ、私も 近くでみたいだよ)

▽智美、横にいる吉賀に話しかける

吉賀はランパンの下に何も穿いていないので、脱ぎに行っていない

智美

「吉賀君は、大丈夫だったの？」

吉賀

「うん。昨日、体育委員が穿かないようにと言ってたし、ランニングパンツにインナーパンツが付いてる理由は、先生の言う通りだと思うよ」

▽美優、木陰でパンツを脱ごうとする小村を見る

(美優)

(あ、小村君も、穿いていたのね。見たい。とっても見たい。そこに行ってみてみたい)

(数分後)

▽戻ってくる男子生徒

土呂

「ラジオ体操はもういいだろう
次は、柔軟体操をするぞ。前後でペアになれ」

▽吉賀 後ろを向き美優を見る

吉賀

「夢前さん、僕でいいかな」

美優

「ええ、全然大丈夫よ」

土呂

▽土呂 吉賀、美優のそばを通る

「吉賀、女子と組めるなんて、幸せ者だな」

土呂

▽土呂 前に立つ

「背中合わせになり、お互いに背負いつくするぞ」

二の背中同士をくっつけて、頭の上で両手を繋いだ状態で、
ひっぱり互いの背筋を伸ばす運動

吉賀

▽吉賀 美優 背中を合わせ手を握る

「夢前さん、いくよ」

美優

「どうぞ」

▽吉賀 美優を背負う

▽美優 吉賀を背負う

(美優)

(軽うゝ こいつ 何食べてるんだ)

土呂

「次は、横になり、お互いを引つ張り合え」

横に並び、両手を繋いで引つ張りあう運動

(美優)

▽美優 吉賀の手を握る

(指長つ しかも、手の甲がめっちゃ綺麗。手タレやれよ)

土呂

「よし、次はちよつと難しいぞ ブリッジだ。
まずは前列のやつ。後ろの奴は横で、背中を支えてやれ」

美優

「じゃ、私が支えるほうね」

吉賀

「夢前さん、僕 ブリッジなら、独りで出来るから」

美優

「そう、じゃ、邪魔しないで見ているわね」

▽美優 吉賀の横に立っている

▽吉賀 地面に寝転ぶ

▽美優 吉賀の股間の膨らみを見る

(美優)

(美優)

(めっちゃ もっこりしてる。よく見ると、カリも判るわ)

▽吉賀 腕と脚の間を狭め腰を徐々に持ち上げていく

(わ!、すごい もっこり・・顔に似合わず、大きいんだから
どうしよう、目をそらすべきか? いや? これは体育の授業よ。
見ていない方が怪しまれるわ)

(#AIによるイメージ画像#)



美優

(美優)

吉賀

土呂

土呂

土呂

「吉賀君で、すごい。体が柔らかいのね」

(あそこも柔らかそうだけど・・・)

「まあね」

「よし、そのまま、耐えてろよ」

▽土呂 生徒の間を通り抜ける

▽滝本 ブリッジをしている

「お、滝本 いい足してんな。ここも立派そうだし」

▽土呂 滝本のランニングパンツを、木の枝ので撫でる

▽土呂 同じ様に、中尾のランニングパンツの上を木の枝で撫でる

「お、中尾は、男前だけど、ここは小さそうだな

まあ、通常より勃起時の方が大事だから どれ、手伝ってやるか」

中尾

▽土呂 中尾のランニングパンツの上から陰茎を揉む
「ちょ、先生なにするんですか？」

土呂

「小さい男は モテないぞ。ここも鍛えておかないとな」

▽土呂 中尾の陰茎を揉み続ける

土呂

「ほら、大きくなってきたじゃないか。良い感じだ」

中尾

「先生、止めてください。これ以上されると・・・」

土呂

「なんだ？ これ以上だと？ いっちゃうってか？ それ、それ」

中尾

「ああ」

▽中尾 体勢が乱れ背中から崩れる

土呂

「なんだ、もうだめなのか」

▽土呂 中尾から離れる

生徒

「ダメだあ」

生徒

「もうだめ、限界」

土呂

▽土呂 吉賀の前にくる

「お、吉賀は がんばってるな。女の子の前だからって無理するなよ」

吉賀

「ぜんぜん 余裕です」

土呂

「そうか、そうか 元氣か」

「そっか、じゃ、ここも元氣が確認してみよっか」

▽土呂 吉賀のランニングパンツの膨らんだ部分を

指でつまんで擦り出す

吉賀

「先生、止めてください」

土呂

「余裕なら、これくらいでも耐えなきゃな」

吉賀

「お願いですから 先生、止めてください」

土呂

▽土呂 吉賀の陰茎部分を指で挟んでさすっている

「そんなこと言って 固くなってきてるぞ。
本当は、気持ちいいんじゃないのか？」

(美優)

▽吉賀 ランニングパンツは、テントを張っている

(すごい。ランニングパンツを突き上げてる。なんて、エロイの。
こんなに間近で見れるなんて。土呂、あんたサイコーの教師だよ。)

土呂

「こんなに固くしやがって、なんかエロイこと考えてそうだな
そうだ、せっかくだから保健の授業もさせてもらうか
吉賀は、そのままの状態でいろよ」

吉賀

「何をするんですか。止めてください」

土呂

「大事な授業だから黙っておけ」

▽土呂 更に早い速度でさする

▽吉賀 体が震え出す

土呂

「おい、夢前、背中をささえてやれ。ちよつと男子、吉賀の体をささえてやれ」

生徒A

「はい」

(美優)

▽生徒達 吉賀の周りに集まり、何人かが吉賀の体をささえる

(まるで、同性愛ビデオじゃん)

吉賀

「ちよつと、止めてください」

生徒

「吉賀、大事な授業って言ってるじゃん」

土呂

「そうだぞ 吉賀、これは、真面目な授業だぞ」

▽土呂 手を離す

吉賀のランニングパンツは、硬くなったペニスによって
パツンパツンにテントを張っている状態

一同

「おおーっ」

(美優)

(すごい、あんなに柔らかそうなものが、こんなに大きく

土呂

固くなるなんて。勃起する過程を見るのってサイコーだわ」

「よし、みんな見てみる。男の場合、脳が興奮状態になると、ここにある海綿体に、血液が流れ込み固くなる。これが、勃起だ筋肉が入ってるわけじゃないからな」

(美優)

▽土呂 吉賀のランニングパンツの上から陰茎を握り、亀頭をクッキリとさせる

(やめて、私の目の脂肪は、パンパンよ)

土呂

「吉賀は、もう剥けているんだな。カリも随分でかいじゃないか」

生徒

「え、カリってなんですか？」

土呂

「カリを知らないのか？」

土呂

▽土呂 吉賀のランニングパンツに包まれた陰茎の区切りの部分、指でなぞる

「この傘のような部分をカリって言っただぞ」

(美優)

(本当 立派なカリだわ)

土呂

「どうだ、わかったか」

生徒

「おお、すげえ」

▽土呂 カリの先を指先で、何度も撫でる

吉賀

「先生 そろそろ いいですか」

土呂

「なんだ、さっきより、さらに固くなってきたんじゃないか。」

▽土呂 ランニングパンツの上から吉賀の陰茎を扱きだす。

吉賀

「や、やめてください」

▽吉賀 体が崩れそうになる

土呂

「しっかり、抑えてろ」

▽男子達 吉賀の体をがっちりとささえる

吉賀

「先生、や、やめてください」

吉賀

▽吉賀 体が震え、腰が振動している

「あう」

▽吉賀 ランニングパンツの先にシミが浮き出る

(美優)

(いやあん、シミが・シミで透けてきてるから、割れ目までわかるわ。止めてって言いながらも、吉賀君、気持ちいいのね)

土呂

「ほほお、我慢汁が出てるじゃないか。みんな ここを見てしろ」

▽土呂 カリの部分をギュッと掴み、少し濡れている箇所を指差す

土呂

「セックスの時、男が外に出すから大丈夫と言っても信じるなよ。こうして、少しずつだが精液が出ているんだ。非常に危険だからな。ゴムは必ずつけるよ」

土呂

「よし、今日はここまでとするか」

小島

「先生 どうせなら、吉賀をいかせてやってよ。吉賀だって、消化不良じゃかわいそうだよ」

(美優)

(いいぞ、小島！ 不細工なくせに、いいこと言うな。私も消化不良よ)

生徒

「ここまでやったら、イクとこまでいくしかないだろ」

生徒

「男なら、見せてやれよ」

生徒

「吉賀だって、いまのままだと中途半端で可哀想だろ。
抜いてやれよ先生」

土呂

「どうする、吉賀？みんなが言ってるぞ 出してスッキリするか？」

生徒

「イケ〜イケ

土呂

「どうだ。先生、みんなの頼みだから、しょうがないけど
特別に してやるぞ」

吉賀

「さすがに、それは」

土呂

「言葉では嫌がってるが、ここは正直だぞ」

▽土呂 吉賀の陰茎をランニングパンツの上から激しく扱く

吉賀

「あ、あう」

土呂

▽吉賀 足がガクガク、腰を突き上げる」

「ほら、出してくれって、言ってるじゃないか。

よし、みんな 吉賀に協力してやれ」

生徒

「おう…

▽吉賀付近にいた生徒が、吉賀の周りをがっちり抑える

最初から吉賀の腰を持つてる美優は特等席をキープ

吉賀

「本当にやめてください」

土呂

「少しの我慢だ」

▽土呂 吉賀の陰茎をランニングパンツの上からしっかりと握り、上へと扱きだす

(美優)

(わ、リア充だわ)

土呂

「夢前 しっかり見てろよ。男ってどんなやつかを。

吉賀も、男よりも、女に見られてる方が、興奮するだろ」

(美優)

(言われなくても、こんな間近で見れるチャンス、まばたきさえも、するかよ)

▽土呂 吉賀のランニングパンツの裾から手をつ込み

▽土呂 吉賀の睾丸を軽く揉む

土呂 「顔に似合わず、ジャングルだな」

▽土呂 さらに手を置くに入れ、吉賀の陰茎を掴む

土呂 「カッチカッチじゃないか」

▽土呂 吉賀の陰茎を扱きだす

ランニングパンツの中の手が激しく動いている

吉賀 「あう、あ、あ、やばい」

生徒A 「吉賀 はやく いけよ」

生徒B 「おせえよ」

土呂

▽吉賀 腰を上下に振っている

「どうだ、吉賀、気持ちいいか？」

▽土呂 手の動きをさらに早く

ランニングパンツが、激しく揺れる

(美優)

(吉賀君の表情いいわあ。苦しいの？ それとも気持ちいいの？)

(松子)

(吉賀君 頑張って、あああなんて、愛くるしい顔してるの)

土呂

「どうだ、気持ちいいか」

▽吉賀 ランニングパンツ先からシミが広がる

(美優)

(吉賀君、我慢汁がすごいわ)

土呂

「どうだ、まだか？ 早くだして、すつきりしろよ」

生徒C

(美優)

吉賀

「吉賀、我慢せずに、ぶっ放せよ」

(いや、ぶっ放せって、ヤラしすぎるわ)

「ううっ イク」

▽吉賀 腰が大きくえ上に動く

ランニングパンツに粘液質の精液が染み出てくる

「いった」

生徒C

精度D

「吉賀が、いったぞ」

▽土呂 ランニングパンツの裾から手を出す

土呂

「ゆっくりと 下ろしてやれ」

▽吉賀を支えていた生徒 ゆっくりと吉賀を地面に寝かせる

▽吉賀 両腕を組み目の上に

▽土呂 吉賀の横に座る

ランニングパンツの上から陰茎を握とゆっくりを尿道に残っている
精液を搾りだす

土呂

「さすが若いな。大量だな吉賀も満足したことだし、今日の授業はおしまい
解散」

▽土呂 手についた吉賀の精液を 吉賀のランニングシャツで吹くとさっっていく

▽生徒ら 教師室に戻り出す

▽美優 まだ、吉賀の横にたって、吉賀を見ている

(美優)

(精液で透けて、亀頭は綺麗なピンク色だ。でも、竿は
胴体はちよつと黒いかな？ 陰毛が剛毛なもの、判っちゃうよ。
つうゝ か、こんなに近くで、生で見たの初めてだよ。

土呂、あんたのことは嫌いだけど、感謝するよ・・・)

▽松子 吉賀の横にしゃがみこむ

松子

「吉賀君 大丈夫」

吉賀

「うん。大丈夫」

智美

「ほんと、ひどいことする教師ね」

松子

「じゃ、いくね」

吉賀

「うん。ありがとう」

▽智美、松子 その場を離れようとする

智美

「ちょっと美優、いくわよ」

松子

「美優 着替えに行こう」

美優

「ごめん。何が起ったか、今、頭がパニックってるの」

(美優)

(なんてね)

智美

「はやく、吉賀君をいつまでもみてるなんて、可哀相よ」

松子

「はやく、はやく」

美優

(美優)

智美

「ええ」

(わーん もっとしっかり見ていたかったよ)

▽美優、智美、松子 そこから離れる

「とりあえず、着替えに戻りましょ」

三人は、更衣室へと戻って行った。

○(同)運動場

吉賀が大の字で寝ている

小村

「吉賀、大丈夫か？」

▽小村 吉賀に近づきかがむ

(#AIによるイメージ画像#)



吉賀

「うん。大丈夫」

小村

「みんなの前で、小便漏らさせるなんて酷いよな」

吉賀

「小便って」

小村

「小便をみんなの前でさせるなんて、なんて先生だ」

▽吉賀 上半身を起こす

吉賀

「小村君は、そう思ってるの」

小村

「そうじゃないのか」

吉賀

「えっと、いや 何でもない」

小村

「次の授業があるから 部活棟でシャワーを浴びてから行こうぜ」

▽小村 吉賀は、部室棟にあるシャワールームへ向かう

○（体育の次の時間）実習室

▽女子は着替えが終わり　実習室で座って　しゃべりながら　始業のチャイムを待っている

智美

「しかし、土呂って奴はひどいわね」

松子

「そうよね。男の子にあんなことさせるなんて。信じられない。親に訴えられたらどうするつもりかしら」

智美

「その辺も　ちゃんと考えてるから、ずるいのよ」

松子

「なんで？」

智美

「吉賀君にした行為は、未成年に対するセクハラよ。でも、そうしたのは、同級生が、しろしろと言ってたわ。それに、保健の授業の一環ということも付け加えている」

松子

「それにしても、やり過ぎじゃないの？」

智美

「最初に、イカせるように言ったのは、土呂じゃなくて小島よ。それにつられて、大勢の男子も言っている。」

松子

智美

松子

(美優)

松子

美優

松子

美優

智美

美優

その承認は、私たち40名がいるんですもの」

「そっか。ちゃんと計算されているのね」

「それにしても、吉賀君 最高によかったわ」

「もう、智美って、自分は知ってるからって、ねえ美優」

(吉賀のイク瞬間の顔 よかったわ。小村君のイク時の顔ってどんなのかしら)

「ね、美優、美優ったら」

「何？」

「何考えことしてるの？」

「さっきの事が まったく整理できてないのよ」

「え、男子が射精させられたの わかんないの」

「射精って」

松子

「美優、射精って知らないの？それくらい、私だって知ってるよ」

美優

「松子 知ってるの」

松子

「そんなの、今の世の中 ネット見れば いくらでも情報あるわよ」

美優

「ネットで見るって、お笑いだけじゃないの？」

智美

「ほんと美優って、男子にあまり興味ないのね」

美優

「別に、そんなことないけど」

▽着替え終わった男子生徒 実習室に入ってくる

（少し遅れて）

▽古賀 小村 実習室に入ってくる

小村

「間に合った」

▽古賀 自分の席に着く

吉賀

「シャワー浴びてたら、ギリギリになったよ」

松子

「ねえ吉賀君、私たちは、ぜんぜん気にしてないからね」

吉賀

「僕は大丈夫だよ。男子も気にしてないだろうけど、

女子には 変なところ見せて、悪いことしたよ。

特に、夢前さんは、間近で見たからショックじゃなかった」

智美

「大丈夫。美優は吉賀君に何が起こったかも知らないんだから」

吉賀

「本当」

▽吉賀 美優の顔を見る

美優

「え、何、何のこと」

智美

「私たちも気にしてないわよ」

吉賀

「気を使ってくれてありがとう」

松子

「本当に気にしないでね」

智美

「あの、こんな事言うけど、変態って思わないでね。吉賀君のって、とっても大きいわよ」

松子

「なに、言い出すの 智美」

智美

「ほんとうよ。だから、全然、恥ずかしくないわ。少なくとも、私は、吉賀君の、ファンだから」

松子

「それだったら、私だって、吉賀君のファンよ」

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第四話

夢雄
美侶

サブタイトル 「小島くんは変態なのだ」

あらすじ

美優が女子生徒の変態の代表なら、男子生徒の変態の代表は？

そう、小島君しかいません。

そんな小島君のちよっとした変態劇と、美優の親友 智美に起こった出来事とは

登場人物（本話のみ）

特になし

(ナレーション)

□ 第一幕教室で松村が小島にXXX

○ 一年二組の教室

さて、クラスメートの小島くん

小島君は、顔がでかい！ しかも、厳つい顔！
でも・・・

▽ 小島 自席で窓から外を眺めている

▽ 生徒A 小島に近づき、小島の萌えキャラの下敷きを持ち上げる

小島 「おい、触るなよ」

生徒A 「なんだよ、この下敷きは？」

小島 「返せよ。モモちゃんが汚れるだろ」

生徒A 「何が、モモちゃんだよ」

小島 「いいから、返せよ」

生徒A

小島

(ナレーション)

▽小島 生徒Aから下敷きを奪い返す

「小島は、ロリコンだからなあ」

「ほっとけよ」

▽小島 下敷きをハンカチで拭く

こんな具合で、カワイイ女の子の二次元キャラが大好きです。でも、山岳部に入っていて、以外と男らしい一面もあります。

○(ある日) 一年二組の教室 休憩時間

次の時間が体育の為、男子は着替えをしている
美優、智美、松子は、更衣室へ行ったためいない

小村

(#A Iによるイメージ画像#)

▽小村 体操服に着替えが終わり、まだ着替えもしていない吉賀を見る

「吉賀、先に行ってるぞ」

▽吉賀 まだ机に座って、ノートをまとめている



吉賀

「うん、僕も 直ぐ行くよ」

▽吉賀 ノートを閉じ片付けをはじめ

▽松村 着替えの為、ズボンを脱いで、ランパン姿になったところ
上は、まだカッターシャツを着ている

▽小島 松村の所にくる

小島

「おい、松村、この前、吉賀が土呂にやられてる時、起ってただろ」

▽松村 無視

小島

「おまえ、本当は ホモじゃないのか？」

▽松村 無視

小島

「なんか返事しろよ」

松村

「別に。そんな訳ないだろ」

塩川

▽塩川 小島のそばにやってくる

「小島、何してんだ」

小島

「こいつが ホモかどうか聞いてたんだ」

塩川

▽塩川 ランパンを前に着き出し、陰茎部分を握り、松村に見せる

「ほら、どうだ？ 興奮したか」

小島

▽松村 無視してカッターシャツのボタンを外している

「カッチーン。俺ムカついてきた。こいつがホモか確認しようぜ」

塩川

「お、いいね。よっしゃ、池田、手伝ってくれ」

池田

▽池田 松村のそばにくる

「なんや」

塩川

「お、池田も手伝ってくれ。こいつ、ホモかどうか確認しようぜ。おさえてくれ」

池田

「オッケー」

▽池田 松村の後ろに回り、松村の後ろから羽交い締めにする

松村

「やめてよ」

小島

「いやだね」

池田

「おとなしく、してろよ」

(#AIによるイメージ画像#)



小島

▽小島 松村の前にしゃがみ、ランニングパンツの上から松村の股間を揉み出す
「おお、こいつ、起って無くてもでかいぜ」

小島

▽小島 松村の股間を揉み出す

松村

「まじで、デカイな」

「やめてったら」

小島

「お前がホモじゃないことが証明されたら止めてやるよ」

小島

▽小島 松村の股間を揉んでいる

「なかなか たたないな」

池田

「おいおい、小島、揉むのが下手なんじゃないか」

松村

「もうやめてよ」

▽吉賀 松村の後ろの席で、体操服（ランシャツ、ランパン）に着替え
終わって、運動場へ行くとして

吉賀

▽吉賀 小島が松村の股間を揉んでいるところみる

「ねえ、小島くん、松村君が止めてって言ってるよ」

▽小島 吉賀の顔を見る

小島

「うるさいな。黙ってる。いや、ちよつとまでよ」

▽小島 塩川の方を向く

小島

「塩川 ちよつと代われ」

塩川

▽塩川 松村の前にしゃがみ松村の股間を揉み出す

「お、でけえ」

▽小島 吉賀の後ろに回り、後ろから腕を廻し吉賀のランパンの上に手を置く

小島

「悪い悪い、松村 おかずを忘れてたわ」

▽小島 吉賀のランパンの上から股間揉み出す

吉賀

「ちょっと、ちょっと何するの？止めてよ」

小島

「松村が、おかずが無いから 起たないってよ」

吉賀

「ちょっと、ちょっと待ってよ、意味分らないよ」

小島

「いいから、温和しくろ」

小島

▽小島 吉賀のランパンの上から吉賀の陰茎を握り前に突き出す

「ほら、お前の好きな、吉賀だぞ」

塩川

▽塩川 松村の股間を揉み出す

「お、固くなってきたぜ」

松村

「違っって」

小島

▽小島 吉賀のランパンの上から陰茎を激しく扱くだす

「こっちもだぜ。こいつらホモカップルだぜ」

▽小島 吉賀のを抜く時に、自身の腰も動き、吉賀の背中に小島の股間部分が当たってしまう

▽吉賀 後ろにいる小島の固くなった股間が、背中に感じる

「ちがうよ。それなら、小島君だって、固くなってるじゃないか」

「なに」

「僕の背中に固い物があたってるよ」

「小島も、そうだったのか」

「おい、小島も興奮してるのか」

「こりゃ、サンピーじゃないか」

「アホなこというな。まじで、頭きた。こいつら いかせてしまおうぜ」

▽小島 吉賀のランニングパンツの中に手をいれて陰茎をつかみ

前後に扱きだす

吉賀

「あ、だめ、出ちゃう」

小島

「直に握ると、大きさがよくわかるな」

塩川

「お、ほな、こいつも いかせてしまおうぜ」

▽塩川 松村のランパンの裾から手を入れ、陰茎を直に握り、扱きだす

松村

「やめて、やめて」

吉賀

「だめだって、本当に出ちゃうから」

松村

「お願い、やめて」

▽小村、中野 一年二組の教室に戻ってくる

小村

「おーい 吉賀 なにやってんだ」

▽小村 吉賀の姿を見る

小村

中野

小島

小島

小村

小村

吉賀

▽小村 中野 急いで吉賀の方にくる

「おい！小島、何してるんだ」

「塩川、池田」

「ち、邪魔が入ったか」

▽小島 吉賀のランニングパンツから手を出す

▽塩川 松村のランニングパンツから手を出し立ち上がる

「松村、または今度 続きをしような。小村 覚えておけよ」

「文句あるなら、いつでも言えよ」

▽小島、池田、塩川 一年二組の教室から出る

「おいおい 吉賀 何やってるんだよ」

「ごめん、急に小島君に捕まって」

▽吉賀 ランニングパンツの位置を直している松村を見る

「松村くん、大丈夫だった」

「うん。大丈夫。吉賀君 ごめんね」

「僕は、平気だよ」

「しかし、あいつら。何を考えているのか」

「僕にも隙があったんだよ」

「次は、ちゃんと抵抗しろよ。それでも無理だったら、俺を呼べよ」

「ありがとう。小村くん、優しいね」

「松村も、そうだぞ。俺でよければ助けてやるから」

「うん。わかった」

「さあ、運動場へ行こうぜ」

吉賀 松村 吉賀 中野 吉賀 小村 吉賀 小村 松村 中野

▽小村 吉賀 松村 中野 運動場へ向かう

Copyright@2026 D³S

(ナレーション)

□ 第二幕 恋多き女、智美

高谷智美（たかたに とみみ） 県立工業高校 工業化学科 一年生
身長160センチ 結構美人

高校一年生にして、既に男性経験がありなのか？
それは まだ 謎である。

○（朝）一年二組の教室

▽美優、松子、智美が、一番後ろの美優の席の周りで話をしている

「今日は、一時間目から実習だよ。実習棟へ移動しなくちゃ」

「うん。すぐ支度するから待つて」

○教室から実習棟までの廊下

▽三人が廊下を歩きながら

「もう、最悪だよ」

智美

智美

松子

美優

「何があったの」

松子

「智美、朝から機嫌悪そうだったもんね」

智美

「え、わかる？」

松子

「うんうん。分かるよ」

▽美優 智美の顔を見る

(美優)

(確かに、智美にしては、化粧が雑だな)

智美

「聞いてくれる。昨日の部活でね」

松子

「うんうん、聞く聞く」

美優

「でも、憧れの藤原先輩がいるからって楽しいって言ってたじゃん」

智美

「いや。その あいつが サイターだよ」

松子

「えー気になる。何があったの？」

智美

「昨日、野球部で新人歓迎会と称したものがあったのよ」

←# 回想 #← 昨日の放課後

○（昨日の放課後）運動場

野球部の練習時は 冬用の体操服か、長袖、長ズボンのジャージである
春からは、暑いため、基本Ｔシャツとジャージである

▽部活動をしている生徒たち

▽野球部が練習をしている それを見ている 智美ら女子マネージャ

キャプテン

「よし、みんな集合」

▽野球部員 キャプテンのところに集まる

キャプテン

「一年生 一列目、二年生はその後ろに並べ」

▽一年生、二年生の野球部員は 横二列にならぶ

キャプテン

「これから恒例の一年生の歓迎会と、三年生の送別するゲームをする」

一年生A

「ゲームってなんだ？」

▽一年生 同時は、顔を見合わせている

二年生は 何が起るのか知ってるので単に並んでいる

キャプテン

「よし、これからゲームの説明をするぞ

今から二年生が一年生をしこる。そして、早く射精させたらそのチームは勝ちだ
射精できなかったり、遅かったチームにはこれから1年間部活終了後の
片付けをしてもらう。わかったな」

一年生B

「えええ、そんな」

▽藤原の前にいる一年生が、後ろを向く

一年生C

「射精ってなんですか？」

藤原

「なに、お前、せんずりしたこと無いの？」

一年生C

「なんですか」

藤原

「やべえ。へんなの選んだよ」

キャプテン

「よし、初め」

▽二年生 前列の一年生のジャージの上から股間を揉み出した

▽一年生 足がくねくね

▽藤原 一年生のをジャージの上から揉んでいる

一年生C

「あ、や、やめてください」

藤原

「はやく、いけよ」

▽二年生 一年生の股間を揉んでいる

→# 現在に戻る #→

○廊下

▽美優、智美、松子 実習棟へつづく廊下を歩きながらしゃべっている

(美優)

(工業高校に来て よかった)

松子

「なにそれ」

智美

「三年生が部活最後にする儀式らしいわよ。最低ね」

松子

「マネージャーは何してるの」

智美

「後ろから見ているし、ジャージの上からだから大丈夫なんだけどね」

(美優)

(ええ、せっかくなら、正面でみなくちゃ)

松子

「それで……藤原先輩が負けてしまったの？」

智美

「まだ 負けた方がよかったわ」

←# 回想 #← 昨日の野球部の部活動で

○運動場

一年生A

「も、もうだめ」

一年生B

「い、いきます」

▽一年生 続々と、射精していく

▽藤原 他の果てていく一年生を見て慌てだす

「やべえ。もう、殆ど残ってないよ。早く、いけよ」

▽藤原 一年生のジャージに手を突っ込み、直に陰茎を扱きだす

「い、痛いです」

「しょうがない」

▽藤原 一年生のジャージを中のパンツごと下にさげる。

一年生の陰茎が、飛び出す

智美らは後ろから見ているので、一年生の尻を見ている

「何するんですか」

「いいから、おとなしくしてろ」

▽藤原 一年生の陰茎を咥え、頭を前後に動かした

藤原

一年生

藤原

一年生

藤原

三年生

▽三年生 それを見て、笑い出す

「おい、藤原。すげえよ」

▽藤原 手を一年生のシャツの中に入れ、乳首を刺激する

▽一年生 足が震え出す

一年生

「あう 藤原先輩、なんか出そうです」

一年生

「うつ」

▽一年生 腰が前後に大きく動く

▽藤原 顔を離すが、

顔に、一年生の精液がかかる

藤原

「汚ねえな」

一年生

「すいません」

三年生A

「わはは、藤原、最悪だなあ」

Copyright@2026 D's

三年生B

「やったな。一年生」

▽藤原 洗い場に走っていく

→# 現在に戻る #→

▽美優、智美、松子 しゃべっている

「え、アレを口に入れたの。汚い。信じられない」

（フ〇ラだね、フ〇ラ。大人なら誰でも やってるよ）

松子

「しかも、顔にかかったんでしょ。気持ち悪いわ」

（美優）

（それは、顔射っていうの）

松子

「ねえ美優。気持ち悪いわよね」

美優

「え？ うん。ちょっと私、まだ意味分かってないんだけど」

松子

「バイ菌だらけで病気になっちゃうわ」

「取りあえず、もう、あいつは嫌だ」

Copyright@2026 D's

□ 第三幕 小島の罨と松子の宝物

○（午前中の休憩時間）一年二組の教室 美優の席周辺

▽ 美優、松子、智美 しゃべっている

「二人は いいわよね」

「何が？」

「だって、吉賀君と話すきっかけがあるんだもん」

「なにになに？ 松子、吉賀君のことが気になるの？」

▽ 松子 照れくさそうに

「そんなんじゃないけど」

「本当かな。なんだか 怪しいぞ」

「で、なんで、私と智美がいいの」

松子
智美
美優
松子
智美
美優

松子

「だって、智美は、席が後ろだから、しょっちゅう話してるし、美優なんか体育の時間は、ペアになるでしょ」

美優

「何言ってるのよ。あれはあれで、大変なのよ。」

あの短すぎる短パンのせいで、はみ出しそうなのを見ないか、いつもドキドキなんだから」

(美優)

(ほんととは、それが楽しみなんだけどね)

松子

「私だって、見てみたいわ」

智美

「見てみたいって・・・松子」

松子

「あ、今のは冗談よ。私だけ、何もないのよね」

智美

「でも、実習の時間は、一緒じゃ無い」

松子

「まあ。そうなんだけどね」

美優

「じゃ、今度の体育、代わってあげよっか」

松子

「ありがとう。でも、先生がうるさいから 無理だわ」

○始業チャイムになる

智美

「さあ授業、授業 次は保健か」

美優

「保健の授業かあ。眠たくなるよね」

松子

「そうね。授業だと とても眠いわ」

美優

「ほんと、ほんと」

智美

「松子はわかるけど、美優が眠たいってなんなの」

美優

「眠いものは眠いのよ」

(美優)

(体育の授業たど、男子のもっこりで、目がギンギンなんだけどな)

○一年二組の教室 保健の時間

▽土呂 教室に入ってくる

中野

「起立・礼」

土呂

「さて、今日の授業は非常に大切な話をするからな。ちゃんと聞いておけよ。」

▽美優、松子、智美 小声で

智美

「大切な話ってなんなんだろうね」

美優

「わかんないよ」

松子

「生理とかかしら。でもそれって 中学校でやってるもんね」

土呂

「高校生になって、そろそろ いいかな？なんて思ってる頃だろうと思ってる奴が多いと思うからな」

井口

「そろそろ良いかな？って何がですか」

土呂

「まあ 井口 慌てるな」

土呂

「まずは、みんなに簡単な質問だ。正直に答えて欲しい。ちよつと 顔を伏せて目を瞑れ。絶対 目を開けて誰が手を上げたか見るなよ」

(美優)

土呂

土呂

土呂

土呂

(美優)

土呂

土呂

▽生徒机の上に腕を置き、顔を埋める

(やった 少し寝れる。ラッキー)

「今から、質問することに そうと思ったら手をあげればいいからな」

「では、まず」

「性行為をしたことある奴」

▽誰も手を上げない

「よし、いないな」

(え？ほんと？智美なんか、真っ黒だよ絶対)

「じゃ、オナニーを毎日している奴は」

▽何人が手を上げる

「よしよし、元気な証拠だ。恥ずかしいことじゃないからな」

(美優)

(誰だよ。猿みたいな奴。しかし、真面目に手を上げてる奴
いるんだなあ)

土呂

「じゃ、2日に1回？」

土呂

「3日に1回」

(美優)

(しょうがないな、いつもお世話になっている土呂だから、挙げてやるか)

土呂

▽美優 手を上げる

「お！ 夢前、3日1回か、すごいぞ！」

▽教室 笑い声

(美優)

(アホか！ 名前を言うなって)

▽松子 顔を伏せながら、後ろの美優の方を向く

松子

「ちょっと美優、女の子は手を上げなくていいのよ」

土呂

「4日に1回」

土呂

「5日に1回」

土呂

「一週間」

土呂

「よし、目を開けていいぞ」

▽生徒 顔を上げる

土呂

「おい、あげていない奴がいるぞ。」

小村と、松村、お前ら、どうしてあげないんだ？」

美優

（え、小村君・・・どうして）

小村

「えっと、オナニーって、何ですか？」

土呂

「小村、おまえ、オナニーって知らないのか？」

小村

「はい。」

土呂

「射精しないのか」

小村

「しゃ、しゃせいって 絵を描くことですか」

生徒A

「おいおい、小村 マジかよ」

生徒B

「小村、いくつなんだよ」

小村

「まじで、わかんないんだけど」

(美優)

(えええ、小村君 純情 カワイイ)

土呂

「最初の授業で、吉賀がみんなの前で、出してくれただろう。あれが射精だ」

(小村)

(聞いたことあったけど、あれが射精って言うのか)

土呂

「しかし、小村、それは かなりの問題だぞ。

おい、休憩時間に 誰か説明してやってくれ

そして小村は、どうしてなんだ。まさか、お前もオナニーを知らないのか」

松村

「いえ、知ってますけど」

土呂

「じゃ、何故 しないんだ」

小島

「松村、正直に言えよ。吉賀のオナニー想像してやってますって」

▽一部の生徒 笑い声

松村

「別に、する必要を感じていませんので」

土呂

「いや、健全な男子高校生なら出さないといけないだろ」

松村

「そうだと思いますけど」

土呂

「じゃ、オナニーをして、いっぱい出すのがいいんじゃないか」

松村

「だから、僕は、必要性を感じていませんと言ってますけど」

土呂

「まあ、人それぞれってことだから これ以上は言わないが、まだ経験者がいないというのは幸いだった。今日は大切な話をするぞ。」

土呂

▽土呂 紙袋から、小さな四角いナイロンパッケージに包装されたもの（コンドーム）を取り出し生徒に見せる

「これが、なんだかわかるか？」

(美優)

(コンドーさんじゃん)

土呂

「ちょっと、前列の者 後ろに回していつてくれ」

▽土呂 前列の生徒に箱を渡し、箱から一つずつ取り順番にまわしていく

土呂

「これ なんだか分かるか。 おい、谷田」

谷田

「コンドームでしょ」

土呂

「そうだ。コンドーム。使い方は知ってるか？」

谷田

「さあ？ 俺知らないっすよ。だいたい、そんなことしないしさ」

(美優)

(知らないんじゃないくて、お前は、付けずにやるタイプだからだよ)

土呂

「そうか、先生の感は外れたかな。教科書 15ページを開いて」

▽生徒 教科書を開く

イラストで、陰茎にコンドームの装着方法が解説してある

(美優)

(わ！保体の教科書にこんなイヤらしい絵が載ってるの。

知らなかった。帰ったら じっくりみなくちゃ」

土呂

「ここに装着方法が載っている。男子は、今日配ったやつで、試しておくといい。」

おい、女子達は関係ないと思うなよ

最近は、付けたがらない男子が多いので、女子から積極的に、付けてあげることも、必要になってきてるからな」

智美

「そんなこと言っても、付けたこともないのに困ります」

(美優)

(いやいや、あなた様なら、ベテランの領域に達してるでしょ)

智美

「ね、松子。わかんないわよね」

、松子

「そうよね。付けたことも無いもの、失敗してて妊娠したら、先生の教え方が、悪いってことになるわね」

土呂

「おいおい、そこまで大袈裟に、言うなよ。」

じゃ、俺にどうしろと言うんだ」

智美

「じゃ、教科書の写真じゃなく実際に着けるところ見せてください」

土呂

「高谷、今、なんて言った？ 着けるとこを見せろだと？」

智美

「そうです。男子が進んで着けてくれない場合、女子が着けてあげないといけないんですよね」

土呂

「うーん 高谷の言いたいことはわかった。けど みんなの前で、男の大事なところをさらすわけにはいかんからな。それに女子だって、見たくないだろ」

智美

「別に、かまいませんけど。ねえ松子、美優」

松子

「授業だからしかたないかな」

美優

「私はちよつと無理かも。目を瞑ってるわ」

(美優)

(なんてね。目の至福か、睡眠か どっちになっても勝ち組ね)

土呂

「そっか。どうだ。男子 ちよつとだけ 協力してくれないか？」

生徒A

「先生、どういうこと」

土呂

「実験に協力してってことだ」

生徒B

「つまり、ここでパンツを脱いで、勃起させろと」

土呂

「そういうことだ」

生徒C

「はあ、アホか。教師がそんなこと生徒にさせるのか」

生徒D

「ええええ、着けさせろだって」

生徒E

「そんなの無理無理」

▽土呂 教卓を激しく叩く

生徒 静になる

土呂

「おい、これは真面目な授業だぞ。恥ずかしいとか関係ない」

生徒E

「着けるのは女子ですか」

土呂

「そんなの無理だろ。俺が代表で着けてやる」

生徒F

「じゃ、やっぱり嫌だ。せめて女子がつけてくれるなら、考えてもいいな」

土呂

「本当だな。女子 どうする？高谷」

高谷

「私ですか？」

谷田

「だいたい、高谷は付け方くらい知ってるだろお」

▽智美 声のする方を睨む

智美

「はあ。何ですって」

谷田

「冗談だよ、冗談」

土呂

「おい、おい。これじゃ、授業にならないじゃないか」

小島

「先生、俺 小村君がいいと思います。」

「ついでに、オナニーと射精も教えてあげてください」

生徒G

「小島、ナイスアイデア」

生徒H

「そうだ、そうだ。オナニーの気持ちよさを教えてあげてくださいよ」

土呂

「小村、指名がでたぞ。どうする」

小村

「みんなに、俺の大切な部分を見せるなんて嫌です」

土呂

「この前、吉賀はみんなの前で吉賀は射精までしてくれたんだぞ。お前も少しはクラスに協力してみないか？」

生徒Ⅰ

「小村 オナニー気持ちいいぞ」

小村

「絶対嫌です」

▽小村 かたくなに拒否

土呂

「これじゃ、授業にならないじゃないか。他に立候補はいないか
言い出しっぺの小島はどうだ」

小島

「おれ、毎日してるから、いいです」

(美優)

(小島は無理 拷問にしかないじゃん)

土呂

「うーん せっかく大切な授業なんだけどな」

▽吉賀 そろりと手を上げる

吉賀

「あのお先生、僕ならいいですよ」

土呂

「なに？吉賀 いいのか？」

吉賀

「はい。一度、みんなの前で見られているし、射精もしたとこ見られているのでそれに、僕の国では、見られて恥ずかしという習慣がなかったですから」

土呂

「そうか、さすが、帰国子女は違うな」

生徒J

「ヒューヒュー さすが 吉賀」

(土呂)

(よっしゃー)

土呂

「じゃ、吉賀 前に来てくれるか」

▽吉賀 立ち上がる

土呂

「あ、ズボンは そこで脱いできてくれ」

吉賀

「はい」

土呂

▽吉賀　ズボンを脱ぎ、上半身は、カッターシャツ、
下半身は体操服のランニングパンツ姿になる

「カッターシャツもじゃまだな」

▽吉賀　カッターシャツのボタンを外し脱ぐ

カッターシャツの下は何も着ていないので、上半身は裸

▽吉賀　教壇の方へ向かう

▽土呂　教壇をポンと叩く

「みんなが見えるように、この上に上がってくれ」

吉賀

「はい」

▽吉賀　教卓の上にあがる。

教卓の上は、寝転べるほどの長さはなく、
上半身は、肘で机を押さえ反起こし状態、
脚は膝から下が垂れ下がっている

土呂

「それじゃ、着ける前に大きくしなくちな」

(#AIによるイメージ画像#)



土呂 智美
土呂 智美

(#A Iによるイメージ画像#)



「ちょっと待って」

「高谷、どうした」

「さっき、男子から女子がするならと条件がありました」

「だから」

智美

「女子の誰かがするんですよ」

土呂

「さすがに、それはまずいだろ」

吉賀

「僕は、構いませんけど」

土呂

「吉賀がよくても、俺は」

智美

「最初、女子もつけられなくては困るって言っていましたよね」

土呂

「そうだけど。学校でそんなことさせれると思うか」

智美

「神聖な保健の授業です」

土呂

「もう、わかった。じゃ、高谷 やってみろ」

智美

「え、私ですか。私は、付け方知ってるんで、私はいいです」

土呂

「高谷は 先生をおちよくってるのか」

▽智美 松子の方を見る

智美

「ねえ松子 お願いしてもいい」

松子

「え？ 私？」

智美

「そう松子おねがい」

松子

「無理、無理」

智美

「大丈夫。松子ならできるわ」

松子

「男の人の触ったことないのよ」

智美

「したことないから、するんじゃない。それに、あんな、おっさんに着けられる吉賀くんの気持ちも考えてあげて」

▽松子 少し考える

松子

「わかった 私 やってみる」

土呂

「おっさん呼ばわりか。どうした。するのか、しないのか」

松子

「します。私、します」

土呂

「よし、中川やってみろ」

(土呂)

(チエツ)

▽松子 教壇の方に行き、吉賀の前に立つ

松子

「吉賀くん、ごめんね」

吉賀

「ううん。中川さんで、よかった」

松子

「がんばってみるね」

吉賀

「うん」

松子

「どうしたらいいのかしら」

吉賀

「まずは、大きくする必要があるんだけど、パンツの上から、揉んでくれる」

▽松子 吉賀の腰の前に移動

吉賀

「こんな感じで」

吉賀

▽吉賀 自分の陰茎を ランニングパンツの上から揉み出す

「わかった、やってみて」

松子

「うん」

松子

▽松子 ランニングパンツの上に手をやり陰茎をつまんでみる

「キャッツ」

土呂

▽松子 慌てて手を離す

「こら、中川 ダメじゃ無いか」

松子

「すいません」

吉賀

「大丈夫、怖くないって」

松子

「うん」

Copyright©2026 D's

(松子)

▽松子 吉賀のランニングパンツの上の膨らんだところをに手を当てる



(#A I によるイメージ画像#)

(柔らかくて 温かい)

吉賀

「さっき、僕がやったように、優しく揉んでみて」

松子

「こっ」

▽松子 吉賀のランニングパンツの上から、膨らんだ指先で揉みだす

(松子)

(なに、この感触 とても気持ちいいわ)

吉賀

「そうそう。良い感じ」

吉賀

「もう少し強く 揉んでみて」

▽松子 言われるとおり強めに揉み出す

(松子)

(さっきより、なんか大きく、固くなってきたわ。なんて神秘できななの)

吉賀

「じゃ、今度は、棒の部分にそって、さすってみて」

▽松子 言われるがまま 吉賀の陰茎をさする

▽吉賀 上を向いたりしている

(松子)

吉賀

土呂

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

▽吉賀 陰茎がさらに固くなり、ランニングパンツがテントを張る

(すごい、なんて大きくなるのかしら大きく)

「とってもいい感じ」

「よしよし、大きくなったな。そろそろ着けてみよっか」

「じゃ、中川さん、そろそろ着けてくれる」

「どうすればいい」

「このままじゃ、着けれないから、パンツから出してもらわないとね」

「出すって。怖いわ」

「大丈夫。怖くないよ。じゃ、僕が出してあげる」

▽吉賀 片手で自分のランニングパンツの裾に手を入れようとする

「大丈夫、やってみる」

吉賀

松子

▽吉賀 手を離し後ろに回す

「じゃ、お願い」

「うん」

▽松子 吉賀のランニングパンツの裾から中に手を入れるが、指先が陰毛に触れて、慌てて取り出す



(#A I によるイメージ画像#)

吉賀

「どうかした」

松子

「ちょっと、毛が、何でもないわ」

（松子）

（大丈夫、私ならできるわ）

▽松子 吉賀のランニングパンツに手をつっこみ、吉賀の陰茎を握る

（松子）

（これが、アレなのね。熱いわ）

▽松子 吉賀の陰茎をランニングパンツの裾から引っ張りだす

▽松子 初めて見る勃起した男の陰茎に驚く

生徒A

「おお、すげえ」

生徒B

「吉賀、デカイなあ」

生徒C

「めっちゃ剥けてるやん」

（美優）

（なんて、デカイの。洋物動画でも見たことないわ。私が知る限り、最大級よ）

松子

「キヤッ」

吉賀

「ごめん」

松子

「いえ、こちらこそごめんさない」

土呂

「吉賀、立派な、亀を持ってるな。おまえらはちゃんと剥けてるか」

▽土呂 吉賀の陰茎握り、左右に振る

土呂

「もう少し、堅さが欲しいな」

▽土呂 吉賀の陰茎を握り、扱きだす

吉賀

「あ、あう」

土呂

「こりや失敬、あやうく、射精させちまうところだった」

(美優)

(えええ、生で射精するの見たかったよ)

土呂

「じゃ、中川、続きだ」

吉賀

「じゃ、着けてみようか。まずは、ナイロンを破らないとね」

松子

「うん」

（松子）

（はじめて お父さん以外の あそこを見て、しかも触るなんて）

▽松子 コンドームの封を開けて、中身を取り出す

吉賀

「先に被せて、巻きを解きながら下げて 全体を被せるんだよ」

▽松子 吉賀の亀頭をつまむ

（松子）

（なんて、先がおおきいの）

▽松子 吉賀の陰茎にコンドームを被せていく

松子

「結構、力いるのね。」

土呂

「吉賀はデカイから、特大サイズを用意しとかないと あかんかったな」

▽松子 吉賀の陰茎にコンドームを被し終わる

松子

「できた。できました」

土呂

「よし、中川、合格だ」

(美優)

(一体なにに合格なんだよ)

土呂

「見たか。今のように、簡単に着けれるから、めんどくさがって、着けないって事のないように。」

吉賀の場合は、でかいから ちよつと、苦労したようだが」

生徒

「先生、外すところは」

土呂

「外すのは引っ張るだけだろ」

生徒

「でも、中にザーメンが入ってるんだろ。ひっぱたら飛び散るじゃん」

土呂

「そんなもの、自分で考えろ」

生徒

「いいのかな、教師がそんなことで」

土呂

「じゃ、どうすりゃいいんだ」

生徒

土呂

(土呂)

生徒

生徒

土呂

吉賀

土呂

「吉賀をいかせて、それを取ってよ」

「お前は、バカか。そんなことできるか」

(お、いいね。このまま、吉賀をいかせてやりますか)

「なんでだよ。教師だろ。教えてよ」

「そうだそうだ。それに吉賀だって、消化不良だよ」

「吉賀、そうなのか」

「そんなことは ないですけど」

「そっか、やってくれるか」

▽土呂 吉賀のコンドームを着いた陰茎を握り扱きだす

吉賀

土呂

吉賀

土呂

(#A Iによるイメージ画像#)



「せ、先生。それも、中川さんにやつてもらいたいです」

「なに、俺じゃ不満か」

「そんな訳では ないですけど。せつかなので」

▽土呂 しぶしぶ吉賀の陰茎から手を離す

「中川 やってみる。吉賀からたっぷり搾り取ってやれ」

松子

「私ですか。はい。やります」

吉賀

「ごめんね。気持ち悪いことさせて」

松子

「ううん。気持ち悪くなんかないわ」

土呂

「吉賀は気持ちよくなっているよな」

吉賀

「さっき先生がやってたように」

松子

「うん」

吉賀

▽松子 吉賀の陰茎を握り、扱きだす

「あ、あ、あ、いい、いいよ 中川さん」

▽吉賀 顔をゆがめながら、腰が上下に動く

▽松子 吉賀の顔を見続ける

(松子)

(これが、気持ちいいって顔なのね。なんて、素敵なのかしら)

▽松子 扱き続けている

▽吉賀 何度も腰を動かしている

▽チャイムが鳴る

土呂 「お、時間になった。急がないとな。しょうがない、俺も手を貸してやるか」

▽土呂 上半身裸の、吉賀の乳首を舌で舐め回す

(土呂)
(役得、役得)

生徒 「先生、反則だよ」

土呂 「こうでもしなきゃ、早くいかないだろ」

▽土呂 乳首を舌で舐め、もう片方の手で乳首を刺激する

吉賀 「あ、やば、やば、いく」

▽吉賀 腰の振りが大きくなり、両足に力がある

吉賀

「いく、いく、いく」

吉賀

「うつつ」

▽吉賀の腰と足の動きが止まり、腹筋が大きく動く

▽松子 手の中の陰茎の中を 何かが流れている感触が伝わる

▽吉賀のコンドームの先に白い液体が溜まる

生徒A

「吉賀が いったぞ」

吉賀

「はあはあ。ありがとう」

松子

「え」

土呂

「授業時間は終わってるんだぞ。早く外してくれ」

吉賀

「下向きにそっと引っ張って、抜けたら上をくくるんだよ」

松子

「うん。わかった」

土呂

▽松子 吉賀のコンドームを下向きにひっぱり取ると、口の部分を結んだ

「ようし、今日の授業は終わり。次は水泳だからな。
この前のプリント読んで、準備しておけよ」

▽土呂 教室から出ていく

▽吉賀 起き上がり陰茎をランニングパンツの中にしまう

「中川さん、ごめんね。嫌だったでしょ」

「ううん。ぜんぜん大丈夫。それよりも吉賀君こそ大丈夫」

「僕は平気だよ」

「えっと、保体の授業だから、何も気にしないでね」

「うん。ありがとう」

「いいな。吉賀。女子にしてもらえんだったら、俺が立候補すればよかった」

生徒A

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

生徒B

「いやいや、俺だよ」

吉賀

「ね、大丈夫でしょ」

吉賀

▽吉賀 松子が持っている使用済みコンドームを指さし

「それ、僕が、捨てておくよ」

松子

「いいの。私が捨てておくわ」

吉賀

「捨てるって、どこに」

松子

「いいの、いいの」

▽松子 自席にもどっていく

(松子)

(私が初めて射精させた記念。大事にとっておくの)

▽生徒C、生徒D、生徒E 夢前の所を通り際

生徒C

「夢前、きゅうりか ナスか？」

生徒D

「お前、3日に1回って凄いよな。よっぽど、男に飢えているんだな」

生徒E

「使った後は、食べるのか？」

▽美優 睨みながら

美優

「はあ、バカじゃないの。そんなこと、するわけないでしょ。
あんたらだって、ティッシュ乾かして再利用しているんですよ」

智美

「ちよつと、美優く、無視 無視」

美優

「ごめん」

○（その日の夕方） 美優の家 美優の姉の部屋

▽美優 姉の部屋で、雑誌を広げてみている

美優

「失礼な奴らね何が、キュウリ？ ナス？
私がそんな安物使うわけないでしょ」

▽美優 コンセントにプラグを差す

美優

美優

▽美優 バイブをスカートの中に突っ込みパンティの上に充てる

「あああ・・・小村君・・・」

「やっぱり、電動が最高よ」

Copyright@2026 D'S

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第五話

夢雄
美侶

サブタイトル 「松子の初恋を応援するのだ」

あらすじ

吉賀のことが気になってしかたない松子
しかし、なかなか接近できずにいると 偶然にも趣味が一致
ついに、松子は吉賀の家に招待されます。

登場人物（本話のみ）

特になし

美優 智美 美優 松子 美優 智美 松子 美優

□ 第一幕 松子と吉賀の共通点

○（放課後）一年二組の教室

▽放課後、女子三人でしゃべっている

「やっと 授業終わり、部活だ 部活だ」

「椅子に座っていると 疲れるのよね」

「ババ臭いこと言わないでよ。ね、松子」

「学校の椅子が悪いのよね。座り心地がよければ、疲れないわよ」

「相変わらず、目の付け所が違うわね」

「さて、部活行くわよ」

「じゃ、行きますか。じゃ、松子 また明日ね…」

「うん。私も バイト頑張ってくるわ」

智美

「バイバイ。また、メールするね」

▽美優 智美 教室から出る

▽松子 カバンに荷物を詰め終わる

松子

「じゃ、私はバイト頑張ってきますわ」

○部活棟へ続く道

▽美優、智美 話しながら歩いている

智美

「松子、すごいわね。大学に行くお金を貯めるのに バイトしてるなんて」

美優

「そうよね。私は、高校を卒業した時のことまで考えていないわ」

智美

「あら？ そうなの。私は、私立の大学に行くつもりよ。」

もちろん、親にお金を出してもらうけどね。美優も一緒に行かない？」

美優

「私立の大学か。確かに国公立に行くのは、私の頭では難しいわよね。かといって、そんなお金があるのかしら」

智美

「大丈夫よ。親ならきつと出してくれるって。それに奨学金だってあるのよ」

美穂

「そうね。ちよつと考えてみるわ
ところで、最近 野球部のマネージャーってどう」

智美

「うん、まあまあ、いつもと変わらずってとこね。
美優のように、楽器が演奏できるのって うらやましいわ」

美優

「絶対音感は、私の唯一の取り柄かもね。
でも、私は、智美みたいに、美人だったら、それだけで、いいわ」

智美

「まったあまたあ。美人は、それなりに苦労するのよ。なんてね」

美優

「言うわね」

○部活棟 野球部の部室の前

智美と美優は、野球部の部室前で別れる

智美

「じゃ、私は、ここ」

美優

「うん、また明日」

「バイバイ」

▽智美 野球部の部室に入っていく

○（夕方）商店街のカメラ店

松子は、大学に行く資金を貯めるために、小さなカメラ店で

プリントの受付のアルバイトをしている

個人経営のカメラ店なので、普段は松子一人が店番をし、

松子で対応できない場合は、奥にいる店主を呼ぶことになっている

▽松子 カウンターに立っている

客が来ないの暇そうにしている

「今日も暇ね。お客なんて来やしないわ。

だいたい今時、カメラで撮った写真を、プリントなんてする人いないわよ。
したとしても、ネットで注文しちゃうわよね」

○カメラ店の自動ドアが開く。

▽吉賀 カメラ店に入ってくる

「いらっしやいませ」

▽松子 客（吉賀）の顔を見る

「あれ？ 中川さん」

「吉賀君、どうしたの？」

▽吉賀 松子の前のカウンターに行く

「この前、デジタルカメラのプリントを頼んでたの取りに来たんだ。これ控え」

▽吉賀 松子に注文の控えを渡す

「あら、そうなの。知らなかった」

▽松子 控えを受取り、番号を見る

「その時は、男に人に対応してもらったからかな」

「じゃ、店長ね。私がバイト休みだったんだわ」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

吉賀

「そうかも」

松子

「少々お待ちください」

▽松子 カウンターの後ろから袋を探し出す

▽松子 しばらくして 吉賀の前に戻ってくる

松子

「では、中身の確認をお願いします」

▽吉賀 袋から写真を取り出す

パラパラと見出す

▽松子 なんの写真か気になり吉賀の写真を覗き込む

花の写真ばかりだ

松子

「あら？ セントポーリアね」

吉賀

「セントポーリアを知ってるの？」

松子

「私、セントポーリアが好きで家でたくさん育てているの」

吉賀

「そうなの。僕のお母さんが好きなんだけど、いつも海外に行っているの、代わりに僕が世話しているんだ」

松子

「そうなの。優しいのね」

吉賀

▽吉賀 写真の束から一枚選ぶ

葉が茶色くなっていて、花もしおれ気味

「この写真みてくれる。この鉢何だけど枯れそうなんだ。どうしてかわかる？」

松子

「ちょっと見せて」

松子

▽松子 吉賀の写真を受けとる

「これは特に日光に弱い種類だわ。

この場所だと、日が強すぎるわね。葉の先が茶色くなってるもの。

セントポーリアはもともと熱帯雨林に咲く花で、

大木の日陰で咲くの。だから直射日光は当ててはダメなのよ。

それと水在花の上からやってないかしら？

セントポーリアは湿度が高いのを好むの。

それは根からの吸収が悪いからなの。

だから水は少量をこまめにあげる必要があるわ」

吉賀

「凄い、セントポーリア博士みたいだ。そうだ、中川さんが迷惑でなければ、僕に、育て方を教えてくれない？ お母さんが帰国したら驚かせてやりたいんだ」

松子

「いいわよ。じゃ、明日学校で」

吉賀

「学校かぁ。どうせだったら僕の家ではどう？ 実際にセントポーリアを見てアドバイスをして欲しいんだ」

松子

「私が吉賀君の家に？」

吉賀

「ごめん、女の子を突然、家に呼ぶなんて変だよね。じゃ学校でいいよ」

松子

「いいわよ。吉賀君の家で」

吉賀

「ほんと。じゃ、次の土曜日にどう」

松子

「いいわよ」

吉賀

「よかった。じゃ、僕の家場所は、メールするね」

松子

「うん」

○（翌日の学校）一年二組の教室

▽美優、松子、智美が会話している

松子はいつもより笑顔

智美

「松子　なんか嬉しそうね。何かあったの？」

松子

「え？　そう？　いつも通りよ」

美優

「ええ、違うよ」

智美

「何か、いいこと　あったんでしょ。白状しないさい」

松子

「あのね、今度の土曜日に　吉賀君の家に行く事になったの」

智美

「え、本当」

松子

「本当」

美優

「なんで　そうなったの」

智美

「いきなりの展開じゃない。どうしたの」

松子

「私と吉賀君の共通点が見つかったのよ」

美優

「共通点って何？」

吉賀

「私の好きな花と、吉賀君のお母さんが好きな花が同じだったの」

美優

「それが、なんで？」

松子

「お母さんが海外で留守の間、花の育て方を私に教えて欲しいですって」

美優

「松子って、以外と女の子らしいもんね」

智美

「以外ってのは、余計だけどね」

松子

「男の人の家に行くなんて、幼稚園の誕生日会以来だわ」

美優

「男の人の家に行くなんて、なんかやばくない？」

智美

「大丈夫、松子のことだし、相手も吉賀君だから万が一の」

松子

智美

松子

智美

(美優)

ようなことはないと思うけど」

「万が一って？」

「万が一って万が一よ」

「うゝん、でも吉賀君ならいいかな？　なんて」

「松子ったらゝ」

(ちくしょー松子に処女喪失を越されてしまうとは、美優不覚)

Copyright©2026 D's

□第二幕 松子 吉賀のマンションへ行く

○吉賀のマンションの入り口

▽松子 広いエントランスに挙動不審な様子

▽管理人室から、管理人が松子をジロシロ見ている

▽松子 インターフォンを見つけて、吉賀に聞いた部屋番号を押す

(吉賀)

「はい」

松子

「中川です」

吉賀

「いらつしゃい。じゃ、エレベーターに乗ったら、50階のボタンを押して、止まったらもう一回50階のボタンを押してくれる」

松子

「うん」

▽エレベーターに乗る 松子

松子

言われた通り 50階のボタンを押す

○エレベーターが動き出し 50階で停止

「もう一階押すのね」

○エレベーターの中のインターフォンから、吉賀の声がする

「ちょっとまって、今開けるから」

吉賀

○エレベーターのドアが開く

○エレベータを下りる 松子

○目の前に 大きな扉があり、ドアが開く

○吉賀 玄関に出てくる

吉賀は、Tシャツにジーンズを穿いている

吉賀

「いらっしゃい」

松子

「おじゃまします」

吉賀

松子

吉賀

(松子)

吉賀

「エレベーター面倒くさかったでしょ」

「そうね。でも、変な人がこないようにしてるんだから、しょうがないわよ」

「そうだね。まあ上がって、汚いところだけど」

▽松子 玄関に入る

玄関の広さに圧倒される

(これがマンションの中？まるでホテルのロビーじゃん。

世の中に こんな家があったなんて、リアル花輪君って実在するんだな)

○吉賀家 リビングルーム

中央に大きなソファー ソファーの前には大きなテレビが置いてある

▽吉賀 ソファーに目をやる

「ちょっと、そこに座ってて」

▽松子 ソファーに腰掛ける

松子

「失礼します」

吉賀

「誰もいないから、遠慮しないで」

松子

「こんな立派なソファに座れないわよ」

吉賀

「中川さん、面白いね。ちよっとお茶入れてくるね。ミルクティでいい？」

松子

「おかまいなく。あ、これ、クッキーを焼いてきたの。どうぞ」

吉賀

▽松子 クッキーの入った紙袋を 吉賀に渡す

「ありがとう、じゃ、これも一緒に食べよう」

▽吉賀 しばらくして、お盆に ティーカップと さつき松子が渡したクッキーを

皿にのせて持ってくる

▽お茶とクッキーを食べる二人

吉賀

「このクッキーおいしいね」

松子

「よかった。ミルクティもおいしいわよ」

吉賀

「そういえば、中川さん、今日は、バイト休みだったの？」

松子

「ええ、今日は別の子が入るの。吉賀君こそ、部活は？」

(松子)

(本当は、私なんだけど、せっかく吉賀君の家に招待されたのにこんなチャンスを逃せないわ)

吉賀

「僕は、用事があるって、さぼっちゃった」

松子

「ええ、小村君が怒るわよ」

吉賀

「大丈夫、ケンちゃんは、そんなことで怒らないって」

松子

「それでも部活をさぼっちゃダメよ」

吉賀

「中川さんって、結構まじめなんだね」

松子

「そうよ。多分クラスの三人の女子の中では一番まじめよ」

吉賀

「うん、それは確かだ」

▽松子 ティーカップを皿に置く
お茶の時間が終わる

松子 「早速だけど、セントポリーアはどこにあるのかしら」

吉賀 「そうだね。さっそく見てもらおうかな」

▽吉賀 立ち上がる

吉賀 「こっちだよ。ついてきて」

▽二人は、リビングから出て、別の部屋に移動する

▽吉賀 扉を開ける

○セントポリーアを置いてある部屋

そこは、二十畳はあろうかという部屋で、奥はガラス張りの屋根と壁になっていた。

松子 「すごい。なにこの部屋」

吉賀 「ここは最上階だから、日光を沢山取り込めるように

こんな作りになっているんだ。

この前、中川さんがセントポーリアは日光がダメって言ったから、ブラインドは下ろしてるんだけどね」

「そうね。でも、今度は暗すぎるかもしれないわね」

「結構、わがままな花なんだな」

「わがままか。確かにそうね。でも、子供だってわがままの方が
カワイイって言うから、そういうところがセントポーリアの魅力なのよ」

「そっか」

「直射日光じゃなくて、反射で当たるようにすればいいわ」

「反射で？どうやって」

「簡単よ。少し置き場所を工夫すればいいの。ちょっと奥に動かすとか
ほら、この観葉植物で影になるように置いてもいいのよ」

「中川さんて頭いいんだね」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

「なんたって、セントポーリア博士だから」

▽吉賀と松子は、セントポーリアの鉢を次々と移動させていった

▽吉賀 セントポーリアに水をやろうとする

松子

「吉賀君ダメよ」

▽松子は、ジョを持っている吉賀の手の上から握る

「こうやって、根元の少し離れた場所から、少しずつあげるの」

吉賀

「わかった」

松子

「あ、ごめんなさい」

▽松子 手をどける

○二人は、セントポーリアに水をやり続けている

（数分後）

吉賀

「ありがとう、なんとか終わったね」

松子

「こんなに沢山のセントポリア見たのは初めてよ。とっても綺麗ね」

吉賀

「そうだね」

松子

「でも、こんなに沢山だと、世話するのも大変ね」

吉賀

「おかげで、ちょっと汗かいたからシャワー浴びてきていい」

松子

「どうぞ」

吉賀

「じゃ、僕はシャワー浴びてくるから、さっきの部屋で待ってて」

松子

「私、もう少し、ここで、セントポリアを見てから戻るわ」

吉賀

「うん。好きなだけ見てて」

▽吉賀は、シャワールームへ行く

○（同）リビング

（松子）

▽松子 ソファーに座って、スマートフォンで撮影したセントポーリアの花を見ていた。

中には、吉賀が写っている画像もある

（吉賀君って、かっこいいな）

▽松子 スマートフォンを胸にあてる

（数分経過）

▽吉賀 上半身裸で、バスタオルを羽織り、下は体操服のランパンで戻ってくる

「おまたせ。さっぱりした」

「全然、さっき撮ったセントポーリアの写真を見てたら、すぐだったわ」

「セントポーリア、好きなんだね」

「そうね。花の中では一番好きかも」

▽吉賀 松子の横に座る

松子

吉賀

松子

吉賀

(松子)

▽松子 横を見ると、吉賀の胸とピンクに透き通った乳首が見える

(綺麗なピンク)

▽松子 見とれてしまう

「中川さん、どうかした」

「え、あ、吉賀くん、服は、着ないの」

「シャワー浴びて、まだ暑いんだ。ごめん、女の子の前だもんね。直ぐに服を着るよ」。

松子 「大丈夫よ、そのままで。私は、そろそろ帰る時間だし」

▽吉賀 壁の時計を見る
十七時を指している

「そっか、もうそんな時間なんだ。じゃ、僕も晩ご飯の準備でもするかな」

松子 「え？ 晩ご飯の準備って」

吉賀 「うん。今日はお手伝いさんが休みなんで、僕が作るの」

松子

「何を？」

吉賀

「うゝん？ 冷凍食品か、インスタントラーメン かな」

松子

「それって作るって言わないわよ」

吉賀

「でも、鍋を使ったりするんだよ。美味しいから好きなんだけどな」

松子

「だめよ。高校生って成長期なのよ。ちよつと冷蔵庫の中を見せてもらっていいかしら」

吉賀

「どうぞ。キッチンには、あそこだから見てみて」

○（同）キッチン

大勢の客人をもてなすため、キッチンも広く、食器棚が並んでいる

▽松子と吉賀がキッチンに入る

松子

「すごい キッチンね」

吉賀

「大勢でパーティするときは、料理人が何人も入るからね」

▽松子 冷蔵庫を見つける

「冷蔵庫 開けてもいい」

「うん」

▽松子 冷蔵庫を開ける

今は客人が来ないので、冷蔵庫の大きさに対して、少なめ

「冷蔵庫の大きさの割に中は少ないのね」

「お手伝いさんが僕の1週間分の食料を買っただけだからね」

▽松子 冷蔵庫の中を見ながら考えている

「よし、じゃ、今日は、私が作るわ」

「いいの?」

「いいわよ。こんな豪華なキッチンで一度料理作って見たかったし」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

「でも帰らないと、親が心配するんじゃない？」

「大丈夫 親にはメールしておくわ」

「じゃ、お願いしちゃおうかな」

「吉賀君は料理が出来るまでテレビでも見てて」

「うん」

▽吉賀 キッチンから出て行く

▽松子 料理に取り掛かる

▽吉賀 リビングのソファでテレビを見始める

○（同）リビング

吉賀がソファで寝ている

▽松子 料理ができたのでリビングの吉賀の様子を見にくる

「吉賀君、料理出来たわよ。運ぶの手伝って」

▽吉賀 返事がない

▽松子 返事がないので、ソファアのところへ行き、吉賀を覗いて見る

▽吉賀 ソファアに横になり、腹の上にバスタオルを掛けて寝ている

(#A1によるイメージ画像#)



松子

松子

「あら、寝ちゃったのね」

「吉賀君 起きて」

▽松子 吉賀の体を少し揺する

▽吉賀 揺すられた勢いで、横向きから仰向けになり、バスタオルが
床に落ちてしまう

吉賀は、ランニングパンツだけの姿で寝ている状態

Copyright©2026 D's

松子

(#A Iによるイメージ画像#)



▽松子 吉賀のランニングパンツ一枚の姿を見る

「もうしょうがないわね。せつかくの料理が冷めてしまうわ」

▽松子 吉賀のランニングパンツが立派なテントを張っているのに気づく

（松子）

（男の子って、寝ている時も大きくなるのね）

（松子）

（もう一回、さわってみたいわ）

（松子）

（もう一度だけ、ちょっとぐらいなら大丈夫）

▽松子 テントの先を指先で触る

”ピクツ、ピクツ”

（松子）

（動いた）

（松子）

（もう一度）

▽松子 もう一回、テントの先を
今度は指先で撫でてみる

▽吉賀 テントが大きく揺れ動く

（松子）

（面白い）

（松子）

（もう一回だけ）

(松子)

▽松子 ちょっと強めに触る

(固い)

▽松子 亀頭と陰茎の分かれ目をさわる

(松子)

(この前は緊張していてわからなかったけど、男の子って、こんな形をしてるのね)

(松子)

(もう少しだけ)

▽松子 吉賀のランニングパンツの上に頬を付ける

(松子)

(あったかい。頬に吉賀くんの大切なものの熱が伝わってくるわ)

▽松子 目を瞑る

(松子)

(ずっと、このままでいたい)

(数時間後)

吉賀

「中川さん、起きて」

▽松子 吉賀の股間の上に頭を置いた状態で目を覚ます

▽松子 顔を上げる

「ごめんなさい」

「こっちこそ寝てしまつてごめん。もう、二十一時だよ」

「え、そんな時間。どうしよう」

「僕が寝てしまったのが原因だから、中川さんのせいじゃないよ」

「いいえ、私がちゃんと吉賀くんを起こしていれば」

「そんなことより、早く帰る準備をしなきゃ」

「そうね。あ、そうだ、晩御飯作つたんだわ」

▽松子、吉賀キッチンに行く

「沢山作ってくれたんだ。ありがとう」

吉賀

松子

吉賀

「

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

松子

「でも、冷めちゃってるわね」

吉賀

「温めれば大丈夫」

松子

「そうね。じゃ、私は、帰るわ」

吉賀

「ちよつとまって、今から、タクシー呼ぶから」

▽吉賀 タクシー会社に電話をする

○吉賀のマンションの下

▽二人が下に降りると タクシーが待っていた

「おかず、こんなに持って帰っていいのかしら？」

松子

「僕は一人分あれば足りるから」

吉賀

「明日が日曜日で助かったわ」

松子

「運転手さん、これで、この子と言う場所まで 乗せて行つて

吉賀

あげて」

▽吉賀 タクシーの運転手に、タクシーチケットを渡す

▽松子に乗せたタクシーが走り出す

Copyright@2026 D's

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第六話

夢雄
美侶

サブタイトル 「水泳の授業なのだ」

あらすじ

工業高校の水泳の時間

とつても自由で、真夏のパラダイス

男子生徒の水着姿を堂々と見る美優は、別の意味でパラダイス

登場人物（本話のみ）

特になし

□ 第一幕 小島と松村がプールでXXX

○（放課後）学校のプールサイド

▽松村 プールサイドで、部活の準備をしている

上はTシャツ 下は競泳用水着姿

▽小島 近寄ってくる

「よ！ 松村。おまえ水泳部だったんだよな」

「そうだけど 何か用」

「もうすぐ、水泳の授業はじまるだろ。どんなプールか
ちよつと見ておこうと思って
そしたら、おまえの顔が見えたから 来てみたのさ」

「そっ」

「まあ、学校のプールってどこも一緒だよな」

「そっだね」

松村

小島

松村

小島

松村

小島

小島

「なんか、冷たいな」

松村

「プールの水は まだ 冷たいよね」

小島

「いや、お前がだよ」

松村

「用が終わったら、出ていってよ」

小島

「ちっとは仲良く話をしようぜ」

▽小島 松村の体付きを見る

「Ｔシャツを着ているが、肩幅があり胸板もしっかりとしていることが判る

小島

「おまえ、案外いい体してんな」

松村

「そんなこと思った事ないよ」

小島

「腹筋割れてる野か？ちよつと、シャツめくって見せてくれよ」

松村

「いやだよ」

小島

「けちだな」

松村

「男の体なんか見ても、面白くないだろ」

小島

「ふーん」

▽松村 バケツをもって機械室の方に向かう

▽小島 ついていく

松村

「なんで、着いてくるの」

▽小島 機械室の方を見て指を差す

「俺、機械とかに興味があつてさ、だから工業高校に来たんだよね
ちよつと見せてくれよ」

小島

松村

「そついうことなら。でも 見てもつまらないけど」

小島

「いいよ、いいよ」

▽松村 機械室の扉を開けて中にはいる

▽小島 松村の後ろから入る

▽松村 手にもっていたバケツをか床に置いたのに しゃがむ

▽小島 そのタイミングで松村に後ろから抱きつく

「なに？やめて」

「この前の続きをしようぜ」

▽小島 松村の背後から股間を揉み出す

「何するの？やめて」

「俺が、直々にオナニー教えてやるよ」

「止めてたら」

▽小島 松村の股間を揉みまくってる

「ほら、だんだん、固くなってきてるじゃないか」

小島

松村

小島

松村

小島

松村

松村

「お願い、やめて」

▽小島 片方の手 松村のＴシャツの下から捲り上げる

松村の腹を撫でる

小島

「おまえ、めっちゃいい体してるやないか」

松村

「お願いだから、やめて」

小島

「黙ってるって。気持ち良くしてやるんだから」

▽小島 松村を壁に押しつけ、体を正面に向ける

▽小島 競泳水着の上から 松村の陰茎を扱きだす

小島

「ギンギンじゃないか」

小島

「ほら、気持ちいいんだろ」

(松村)

(うっうっうっ)

小島

松村

小島

松村

小島

▽小島 Tシャツを捲り上げ脱がし、Tシャツは機械室の床に落とす

松村は筋肉室で 肩幅もあり、胸筋、腹筋 完璧に仕上がっている

「すげー なんちゅう体や」

「お願い、やめて」

▽小島 松村の胸の揉み出す

「ムヒョー おっぱい おっぱい」

▽小島 松村の乳首を舐める

「あっ あう」

「おれさあ、可愛いロリキャラよりも、お前みたいな可愛い男の子が 苦しそうにしている顔を見るのがなんとも言えないんだよね。しかも、この体 儲けもんだな」

▽小島 松村の競泳水着の上から陰茎にそって、激しく扱く

▽松村 目をつぶり、顔をしかめている

小島

「ほら、その表情。いいよなあ」

小島

「どうだ、気持ちいいだろ」

松村

「い、いや、やめて」

▽小島 松村の股間を見る

競泳水着が大きくなった陰茎のせいでパンパンに腫れ上がり、
亀頭の先が見えている

小島

「何いつてるんだ、競パンから、先がはみ出で見えてるじゃないか」

小島

「そろそろ フィニッシュだな」

▽小島 さらに手を早める

▽松村 腰が前後に動く

小島

「ヤラシイ腰つきだな」

松村

「あつ、あう、あん」

Copyright © 2026 D's

小島

「気持ちいいんだろ。ほら、もっと、声をだせよ」

松村

「あん、あつ、あう」

松村

「い、いく」

松村

（うつつ）

松村

▽松村 体をびくつかせる

「はあ、はあ はあ」

小島

「たまんないね」

小島

「ちゃんとシャワーで綺麗にしてからプールに入れよ」

▽小島 機械室から出ていく



(#AIによるイメージ画像#)

第二幕 プールの時間

○（夕方）一年二組の教室

中間試験が終わる頃には、ある程度 気の合った者同士がくつつきグループが形成されてきている

女子3人組は変わらないが、男子にはいろいろな動きがあるようだ。小村は、同じバスケット部に所属している中野を中心に、成績もそこそこで教師にとって授業の、やりやすいグループだ。

美優と同じ中学出身の滝本は、クラスのリーダー的なグループいるそして、小島を中心として、ちょっと変わった者同士が集まったグループなどなど

▽美優、智美、松子は、話をしている

「やっと試験終わった〜」

「ほんと、毎日 寝不足で肌に悪いわ」

「あれ？智美は、ぜんぜん疲れていないようにみえるけど」

美優

智美

美美

智美

「ちょっと、それどういう意味。
私がちっとも勉強しない奴って思ってるんですよ」

美優

「ふふふ想像にまかせる」

智美

「そういう美優はどうなの」

美優

「私は、いつも通りよ。松子だってそうでしょ」

智美

「美優、松子と一緒にしちゃだめよ。松子がかawaiiそうじゃない」

松子

「そんなこと無いわよ。私も結構疲れているんだけどな」

美優

「見えてないところで努力するのが松子だもんね」

智美

「そついえば、明日から体育は水泳が始まるわよ。二人は水着どんなの買ったの」

美優

「え？ 学校で販売してくれるんじゃないの」

▽智美、松子 顔を合わせる

智美

美優

美優

美優

智美

「何言ってるの？ 美優、この前の連絡の見た」

「見たつもりだけど」

「ちょっとまって」

▽美優 スマートフォンで、連絡を見る

「水泳があるってしか書いてないよ」

▽智美 自身のスマートフォンを見せる

「ほら、これよ」

校内での水泳の授業について

各自、水着を用意すること

男子

分丈より短い無地の海水パンツ、または、無地の競泳用、
操服の短パンでも可

女子

キニ、セパレーツ禁止

パレオなど水泳に邪魔なものは付いてないもの

「え、こんな連絡あったの」

「私、それ見て、バイトの帰りに買ってきたんだから」

「うちの学校は 水着に決まりがないのよ。自由に選んでいいのよ」

「じゃ、学校で水着の販売しないの」

「そうよ。スクール水着なんて、ださくて嫌だったからちようどよかったわ」

「でもさ、おかげで、買うときにすごく悩んだわよ。変なの選んでしまうと
男子に何言われるか」

美優

松子

智美

美優

智美

松子

智美

「そうよね。しかも 派手なのはダメだから、センスが問われるわね」

美優

「松子もなの。うらぎりものお。買いに行くなら誘ってよお」

松子

「まさか、美優、買ってないの？」

美優

「うん。どうしよう。取りあえず、今日は、試験直後ってことで、部活はぶっちしてお店に行ってみるわ」

○（翌日）学校のプールの女子更衣室

結局、水着を買いに行けなかった美優は、去年、

中学で使っていた紺のスクール水着を着用することにした。

▽美優、松子、智美 更衣室で着替えをしている

高谷と松子は、色鮮やかな小さめのフリルの付いた水着

美優は、昨年 中学で使っていた紺のスクール水着であった

美優

「水着買えなかったよお」

智美

「美優、すごいよ。私だったら、生理ってことにして休んじゃうよ」

美優

(美優)

松子

「ダメよ。私ってズルは嫌いなもの知ってるでしょ」

(本当は、教室で待ってるなんて嫌よ。せっかく男子のもっこりを生で見れるのに)

「でも、あんがい新鮮でいいわよ」

(数分後)

○学校のプール プールサイド

男子は、既にプールサイドで、並んでいる

▽美優、松子、智美 バスタオルを羽織、プールサイドへ出る

▽智美 バスタオルを外し、ベンチに置く

▽男子 どよめき

▽松子 バスタオルをベンチに置く

▽男子 どよめき

男子 A

男子 B

松子

美優

(美優)

▽美優 バスタオルを外す

▽男子 最大のどよめき

「夢前、なんだ、お前」

「おいおい、せっかく いいもの見せておいてなんだよ」

「美優、気にしない、気にしない」

「大丈夫よ」

(あいつら 覚えてろよ)

▽美優 男子の方を見る

しかし、水着を新調しなかったのは美優だけでは無いようだ。

男子のほぼ全員がのランパンだったのだ。

(美優)



(#A Iによるイメージ画像#)

(なんだ、ここは貧乏人の集まりか？ 水着買えないのか？)

→

自分の事は棚に上げている美優

▽始業チャイムが鳴る

土呂

▽土呂 プールサイドに現れる

美優の方を見る

「お、夢前、いいじゃないかその水着！」

(美優)

(お前に言われてもなあゝ)

土呂

「今日は、松村は教室で見学か。じゃ、準備運動をするぞ。2列に並べ」

(美優)

(シヨタの松村は見なくていいからどうでもいいよ)

(小島)

(あいつ、休みやがったな)

▽生徒 2列に並ぶ

▽美優 吉賀の後ろにならぶ

吉賀の色白の背中をみる

(美優)

(こんな色白で、漂白剤でも飲んでるんじゃないのか)

土呂

「ラジオ体操はじめ」

(美優)

▽美優 小村の方をチラ見

(ああ、小村くん 乳首がとってもピンクでかわいいわ)

▽ラジオ体操が終わる

「よし、じゃ、次は 腹筋をするぞ。後列は、前列奴の足を押さえてやれ」

「えええなんで、水泳で腹筋だよ」

「うるさい。運動だったら何でもいいんだ」

▽前列の生徒 プールサイドに寝転び後列生徒は、前列の生徒の足首を持った

「吉賀君、いいかしら」

「うん いいよ」

▽美優 吉賀の足首を持つ

(相変わず、毛の生えてない足だな。永久脱毛してんのか?)

(美優)

吉賀

美優

土呂

生徒

土呂

土呂

「腹筋はじめ」

▽吉賀 腹筋をする

▽美優 吉賀の股間に目が釘付け

(美優)

(吉賀君 あいかわらず大きいわねいいね)

▽土呂 突然、腹筋をしている生徒に向かって、ホースで水をまきだす

男子

「冷たあ」

土呂

「どうだ、暑いから、冷たい水の差し入れだ。それっ」

#男子の穿いている ランニングパンツが水に濡れて、肌に張り付き
うっすらを透けてみえる

(美優)

(吉賀君のパンツが濡れて、アソコに張り付いたからクッキリ見えるわ)

土呂

「おい、男子、女子を前にして、勃起するなよ」

男子A

「よけい縮こまるわ」

○姫磨工業高校 プール

一年二組の生徒が、自由にすごしている

(ナレーション)

工業高校の水泳の時間、それは真夏のパラダイス。準備体操さえ終われば、あとは自由時間競争やタイムを測ることなどしない。

ビート板を持ち、浮きながら会話をしている者
プールサイドで日焼けをしている者

教師の土呂は、屋根付きの場所で、昼寝の時間だ

▽生徒 プールの中で、自由に遊んでいる

▽美優、松子、智美 プールサイド、話をしている

「私たち早く入ろうよ」

「うんうん。暑いから早く」

美優

松子

▽美優、松子、智美 プールに入水

○プールの中

▽美優 智美、松子 プールの中で話をする

「気持ちいいわね」

「ほんと、生き返るわ」

「美優、どうかした」

「え、なんでもない。ちょっと考え事よ」

「さつきから 小村くんの方ばかり見てるけど。さては気になるのかな」

「そんなんじゃないわよ。どこで水着買うか考え手たの」

（やべー見透かされてるよ）

「工業高校の水泳の授業って最高ね」

智美

松子

智美

美優

智美

美優

（美優）

松子

智美

「うんうん。でも、水泳の後ってメイクし直さないといけないし、ちよっと面倒なところもあるのよね」

(美優)

(もっと近くで、小村君の見てみたいな・・・あ、居た)

▽小村、吉賀、中野らグループ 校舎の影になる場所でビート板をもち、

浮いている

(美優)

(どうやって、あっちへ行こうかしら?)

松子

「ねえ。ちよっと、あっちの方 日陰だから、あっちに行きましょうよ」

▽智美 松子の言う方を見ると、吉賀がいる

智美

「松子ったら、吉賀君のそばに行きたいだけでしょ」

松子

「そんなんじゃないわよ」

美優

「しょうがないな、松子の恋いに協力しますか」

松子

「もう、美優たら」

(美優)

(松子 積極的だな、おかげで 小村君のそばに行けるからラッキー)

▽美優、松子、智美 小村、吉賀グループの近くへ移動

▽吉賀 美優達が近くに来ていることに気づく

吉賀

「小村君、ちょっとビート板貸して」

小村

「何すんの？」

吉賀

「ねね、こんなの出来る」

▽吉賀 ビート板2枚使い、頭に1枚、もう1枚を尻に敷き 水の上に寝転ぶ

尻の下のでビート板が腰を持ち上げ、ランパンのもっこりが強調される

小村

「そんなの簡単じゃん。貸して」

▽小村 同じ事をやろうとしたが、さすがに身長があり、

そこそこ体重もあるのか失敗ばかり

▽吉賀 尻にビート板を敷いているので、股間部分が強調され、

もっこりが はっきりと見えている

○少しはなれた場所

松子

「ねね。吉賀君のもっこりが見えてるわ。恥ずかしくないのかしら」

(美優)

(おいおい よく言うよ、それが見たくて、近くに來たんだろ)

吉賀

「小村君は、ビート板2枚重ねて使った方がいいよ」

▽小村 吉賀の言う通り、ビート板を2枚目重ねて浮かし、

見事 尻に敷ことができた。

そうして、小村のモッコリが目立つようになった

美優

「いやん。小村君のもっこりが、見えるう」

松子

「もう、美優ったら、私の真似しないでよお」

智美

「二人とも、バレバレよ。もう色気付いてきてしょうがない二人ね」

○(次の週) 水泳の時間 プールサイド

男子生徒 殆どが、ハーフ丈のサーフパンツを穿いている

(美優)

美優 ワンピースの少しかわいめの水着を着ている

生徒達 ラジオ体操をしている

▽美優 不服そうな顔でラジオ体操

(折角の目の保養が 台無しじゃないか)

Copyright@2026 D's

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第七話

夢雄
美侶

サブタイトル「みんなで試験勉強なのだ」

あらすじ

期末試験を備えて、みんなで勉強することになった

吉賀の家に訪れるが、運悪くエアコンが故障中

小村と吉賀は、上半身裸で試験勉強

お目当ての男子二人の前に、女子二人はどうするのか？

登場人物（本話のみ）

□ 第一幕 小村の憂鬱

○（放課後）体育館の中

▽吉賀 小村 バスケ部部活終了後 片付けをしている

▽小村 元気がない

▽吉賀 どうしたかと思い、小村に声をかける

「小村君、顔が暗いけど、何か、悩み事？」

「う、まあね。夏の合宿が」

「ああ さっき部長が最後に話してたやつだね。
合宿楽しそうだけど、それが何か」

「吉賀はそうなんだ。俺はさあ。」

「何、何、枕が変わると寝れないとか？」

「そんなことぐらいなら、こんなに悩まないよ」

吉賀
小村
吉賀
小村
吉賀

吉賀

「まさか、先輩が肝試しをするって言ってたから」

小村

「まあ、それも少しはあるんだけど」

吉賀

「一体 なんなのさ」

小村

「うゝん、それがさあ。いや、いいや」

吉賀

「なにになに？ そこまで言われると気になるよ」

小村

「うゝん？ でも、やっぱりな」

吉賀

「誰にも話さないからさ」

小村

「まあ、吉賀なら話してもいいか、みんなに言わないでくれよ」

吉賀

「うん、絶対言わない。信じて」

小村

「最近さ、寝ている間に 射精しちゃうことがあるんだよ。
合宿中、寝ている時に射精してしまったら、どうしようかと思って」

吉賀

「へ？」

(吉賀)

(小村君、射精については理解できたようだけど、まだ夢精は知らないんだ)

小村

「今回の合宿は、なんとかごまかせても、来年は修学旅行だもんな。ずっと ビクビクして生活するなんて耐えられないぞ」

(吉賀)

(ごまかすって、どうするんだ？しかも夢精する確率なんて、めっちゃめっちゃ低いだろに)

小村

「どうしたらいいんだろうか」

吉賀

「そう聞かれても。ねえ、小村くん。オナニーしてる？」

小村

「オナニーって、土呂が言ってたやつだろ」

吉賀

「そうそう。みんなの前で、僕が射精した時のやつ」

小村

「あれは、中川にしてもらってたじゃん」

吉賀

「まあ、そうだけど。それを一人でするんだよ」

小村

「ひとりであって そんなの出来るわけがないよ」

吉賀

「大丈夫だよ。男なら誰でもやっているよ」

小村

「いや、あれは、人にしてもらったからであって」

(吉賀)

(小村くんって、どんな高校生活してるんだろう)

吉賀

「じゃ、人にしてもらえたらいいの。じゃ、僕がしてあげよっか」

小村

「別に、そういうわけじゃないけど」

吉賀

「要は、小村君が合宿で、ザーメ・・・いや、夜中に射精しなくなればいいんだよね」

小村

「早い話が そうだけど」

吉賀

「わかった。今回は僕が特別にレクチャーしてあげるよ」

小村

「本当か、吉賀」

吉賀

「うん。いいよ」

(吉賀)

(この際、空っぽにしてあげるよ)

小村

「わかった。頼むよ」

○吉賀の家 吉賀の部屋

▽吉賀、小村 吉賀の部屋のソファに座っている

小村

「じゃ、先生 よろしくお願いします」

吉賀

「とりあえず、勃起させようか」

小村

「勃起って。専門用語 使わないでくれよ」

(吉賀)

(こりや、重症だ)

吉賀

「あそこを大きく固くすることだよ」

小村

「おお、勃起っていうのか。勉強になるな」

(吉賀)

(むしろ、いままで、なんて思ってたのか知りたい)

小村

「で、どうするの」

吉賀

「子の前、授業で見てたでしょ。さすったりして刺激を与えるんだ」

小村

「こうかい」

▽小村 ジーンズの上から股間をさする

吉賀

「そうそう」

▽小村 ジーンズの上から股間をさすりつつける

吉賀

「どう」

小村

「ちよつとは 大きくなったかな」

吉賀

「じゃ、次のステップ」

▽吉賀 スマホをとりだし、エロ動画を映す

吉賀

「はい、これ見えて」

小村

「わ、す「おい」

吉賀

「ほら、じっと 見てて」

小村

▽小村 下半身に違和感を持つ

「めっちゃ固くなったきた」

吉賀

「うんうん。良い感じじゃないかな」

▽吉賀 小村の股間を学生ズボンの上から触る

▽小村 驚いて吉賀の手を退ける

小村

「何、何すんの」

吉賀

「確認してしたの」

小村

「急にさわるからビックリするじゃないか」

吉賀

「「めん、」めん。」

Copyright©2026 D's

でも、ジーンズの上からだ、わかりにくいね」

「まあそうだけど」

「ズボンが邪魔で、わかりにくいね。脱いで」

「え、いいよ」

「でも、ズボン履いたままだと、射精したときに大変だよ」

「そっか。吉賀、さすがだな」

（いや、そんなことで褒められても）

（吉賀）

▽小村 穿いていたジーンズを脱ぐ

ズボンの下は、トランクス

「小村君は、トランクス派だったもんね」

「そうだよ。ボクサーパンツは、もっこりしてて、恥ずかしいんだよな」

「そうかな。でも トランクスの方が 風通しがいいから、いいらしいよ」

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

小村

「そうなんだ」

吉賀

「じゃ、ソファーに寝転んでしてみよっか」

小村

「結構、めんどくさいね」

吉賀

「その方が、集中できるからね」

▽小村 ソファーに横になる

吉賀

「良い感じで起ってるね」

小村

「そうか」

吉賀

「トランクスの中に手を入れて、扱いてみて」

小村

「扱くって」

吉賀

「この前の授業みてたでしょ」

小村

「実は、ちゃんと見てないんだ」

Copyright©2026 D's

吉賀

「じゃ、僕がしてあげるよ」

▽吉賀 小村のトランクスの裾から中に手を入れ小村の陰茎を握る

▽小村 とっさに、トランクスの上から吉賀の手をおさえる

小村

「え」

吉賀

「邪魔しちゃダメだよ」

小村

「いきなり、握るからさ」

吉賀

「いいから、僕に任せてて」

▽吉賀 小村のトランクスの中に手を入れ陰茎を直に掴む

「こうやって、竿の部分を手で握って、上下にこするんだよ」

小村

「うん、わかった」

吉賀

「それにしても、小村君の太くて、固いね」

小村

「そうか。でも大きいと、体育の時 恥ずかしいよな」

吉賀

「何言ってるの。女の子は、大きくて固いのが好きなんだよ」

小村

「そうなの」

吉賀

「どう？気持ちいい」

小村

「別に どうってことないけどな」

吉賀

「じゃ、もう少し、力入れてみるかな」

▽吉賀 小村の陰茎を握る力を強め扱きだす

吉賀

「どう」

小村

「あ、気持ちいいかも」

吉賀

「オッケー」

▽吉賀 小村の陰茎を激しく扱きだす

小村

「あ、あ、ちょっと、ちょっと」

▽小村 悶え声が続く

小村

「あ、や、やばい 射精しそう」

▽小村 膝がピンと伸びたり、お尻をなん度も浮かす

小村

「あ、あ、射精、射精する」

▽吉賀 トランクスから手をだす

▽小村 足を開いたり閉じたり

▽小村 トランクス陰茎の先と思われる部分が濡れている

▽吉賀 小村のトランクスをめくり 除く

吉賀

「いっちゃたね」

吉賀

「どうだった」

Copyright©2026 D's

小村

「うん気持ちよかった」

吉賀

「で、やり方は わかった？」

小村

「うん、なんとなく」

吉賀

「じゃ、次は、自分でやってみようよ」

小村

「ちょっと まって、休憩させて」

吉賀

「賢者タイムだね」

小村

「賢者タイムってなんだ」

吉賀

「射精したあとの、休憩時間のこと」

小村

「そんな言葉があるんだ」

吉賀

「あ、でも、シャワーを浴びてきたほうがいいよ。タオルとかは、いつものところにあるから、勝手に使って」

小村

「いつも 悪いな」

吉賀

「大丈夫。お手伝いさん暇そうだから。パンツも洗濯機に入れておいて」

小村

「じゃ、ちょっとシャワー浴びてくるよ」

▽小村 吉賀の部屋から出て行く

（数分後）

▽小村 吉賀の部屋に戻ってくる

上半身裸で、下は黒のボクサーブリーフ

吉賀

「しかし、たくさん出たね。一週間ぶりくらいかな」

▽吉賀 小村の陰茎、陰毛、辜丸についた 精液を拭き取ってる

小村

「この前 夢精したのは一ヶ月前くらいかな」

吉賀

「え、一ヶ月も抜いてないの。僕なら 死んじやうな」

小村

「そんな大げさだよ」

吉賀

「まじだよ。健全な高校生男子は、毎日一回は出してゐるって」

小村

「信じられないや」

吉賀

「大丈夫、小村君も、自分でできるようになったら、毎日できるから」

小村

「はい、先生 よろしくお願いします」

吉賀

「じゃ、次は 自分でやってみる」

小村

「なんか、まだそんな感じじゃないかな」

吉賀

「長い賢者タイムだね。じゃ、文明の力を使うか」

小村

「文明の力？」

▽吉賀 部屋の角から引き出しを開けて何かをもってくる

▽吉賀 ピンク色の長い棒のようなものを小村に見せる

吉賀

「これさ」

小村

「何？それ。」

吉賀

「バイブレーター」

小村

「バイブレーターって？肩こりに使うやつだろ？」

吉賀

「一般的には、そういう目的で売られているけどね。実際は、こつやつて使うんだよ。」

▽吉賀 スイッチを入れる

”ブ————ン”

▽吉賀 バイブレーターの振動している部分を、小村のボクサーブリーフに当てる

▽小村 反射的にバイブレーターを手で払いのける

「なにすんの」

吉賀

「いいから、いいから」

小村

「気持ち悪いよ」

吉賀

「ちょっとだけ がまん がまん」

吉賀

「最初は痛いと思うかもしれないけど、少し我慢してね。」

▽小村 黙って上を向いている

吉賀

「起ってきてるけど、どう」

小村

「うん。ちょっと気持ちいいかも」

吉賀

「ちょっと強くしてみよう」

▽吉賀 バイブレーターのスイッチを“強”に変える

小村

「あっ」

吉賀

「気持ちいい」

小村

「う、うん」

▽小村 腰が上下に動き出す

小村

「タンマ、タンマ、射精、射精しそう」

▽小村 吉賀の手をどけようとする

▽吉賀 片方の手で小村の腕をつかみ 邪魔を阻止する

小村

「あ、あ、射精する、射精する」

小村

「うっ」

▽小村 足がピンとはり、深呼吸をする

○小村のボクサーブリーフに粘液がしみ出してくる

吉賀

「二回目 いっちゃったね」

▽小村 顔を上げ、自分の下半身を見る

吉賀

「どうだった」

小村

「最高に気持ちよかった」

吉賀

「じゃ、これは、小村君にあげるよ。これで、安心だね
合宿に行く前に、2、3回 出しておけばいいと思うよ」

小村

「いいのか、こんな素敵なものを俺にくれるのか？」

吉賀

「大丈夫、家には 沢山あるから」

小村

「ありがとう。親友よ」

吉賀

「また、シャワー浴びておいでよ」

小村

「了解」

▽小村 シャワーを浴びる為に部屋を出る

あらずじ

□第二幕　　くハッピーな期末試験く

期末試験となり、美優、松子、小村の三人は、吉賀の家で試験勉強をすることにしました。

○吉賀のマンションのエレベーターの中

美優が乗っている

▽美優、松子　エレベーターの表示をじっと見ている

「すごいわね。タワマンなんか初めて」

「私だって、この前が初めてだったのよ」

美優

「智美　来れなくて残念だったな」

松子

「野球部のマネージャーって、今が、一番忙しいって言ってたわね」

○エレベーターが止まる

▽松子　エレベーターのインターフォンのボタンを押す

松子

「中川です。着いたわ」

吉賀

インターフォンの声「今、あけるね」

「

○エレベーターのドアが開く

松子

「さあ行きましよ」

▽美優、松子 エレベーターから出る

目の少し前に、大きな扉がある

○吉賀の家の前

▽吉賀 家の中からドアを開ける

この時、吉賀は上半身裸で体操服のランニングパンツ姿
美優、松子、智美が立っている

吉賀

「いらっしやい」

松子

「おじやまします」

▽美優、松子 吉賀の姿に 啞然

松子

(美優)

「どうしたの？吉賀くん その格好は」

(なんだ、なんでセミヌードなんだ？ でもカワイイから許す)



(#AIによるイメージ画像#)

「ごめん。マンションのエアコンが壊れていて修理中らしいんだ
あまりに暑いから、こんな格好してしまっ、でも、すぐに着替えるよ。」

松子

吉賀

「別にいいわよ、そのままで」

美優

「そうそう、水泳の授業で見慣れてるし」

(美優)

(吉賀は、吉賀でアイドルみたいな体つきでデザートにいいのよ)

吉賀

「じゃ、夕方には直るっていつてるから、それまでね」

松子

「うん」

吉賀

「さあ、入って、入って」

▽吉賀 女子二人を家に招き入れる

▽美優、松子、家にかかる

広すぎる玄関にあっとつされる美優

美優

「松子からは聞いていたけど、すごい家ね 想像以上だわ」

松子

「ほんと、ほんと。リアル ハナワくんね」

吉賀

「そうかな。気にしたことないけど」

(美優)

(いや、気にしろよ。普通じゃないってことを)

▽吉賀、松子、美優 廊下を進む

美優は、辺りを見回している

▽吉賀 止まり、自分の部屋のドアを開ける

○吉賀の部屋

先に来ていた小村が、テーブルの前で上半身裸で座っている

小村は派手な色のボクサーブリーフを穿いているが、小村が座っているので美優たちは気づいていない

「さあ 入って」

「いらっしやい。待ってたよ」

松子 「小村君、昨日ぶり」

▽松子に続いて美優が部屋にはいる

小村 「よ、夢前」

美優

「待たせて ごめんね」

▽美優 上半身裸の小村を見る

(美優)

(わ、やっぱり裸だ。ラッキー 小村君のビーチクが堂々と見える)

小村

「暑くてこんな格好でごめん。エアコン修理中で、暑くてさ」

美優

「大丈夫、さっき、吉賀君から聞いたわ」

小村

「嫌だったら、言ってくれよ」

美優

「嫌だなんて、ねえ 松子」

松子

「美優ったら、私に振らないでよ。大丈夫よ小村君」

吉賀

「さあ 座って」

▽松子 手にもっていた紙袋を吉賀に差し出す

松子

「吉賀君、またクッキー焼いてきたから休憩の時食べましょ」

吉賀

「ありがとう 中川さん」

小村

「サンキュー 中川」

松子

「ふふ、クッキーが一番簡単で得意なのよ」

小村

「さすが、中川 家庭的だな」

美優

「あら、家庭でなくて ゴメンね」

吉賀

「まあまあ、夢前さんは、壊滅的だからいいじゃない」

▽美優 吉賀の背中を叩く

吉賀

「痛い」

美優

「もう、ひどいな」

小村

「ほらほら、吉賀を壊滅させようとしてる」

吉賀

「言った通りじゃん。さあ、座って座って」

▽吉賀 小村の横に座る

▽美優 小村の対面に座る

▽松子 吉賀の対面に座る

「もう、勉強 始めてたの」

「うーうん。そろそろしょっかなって所だったの」

「そうなんだ」

「小村君は、急いで自転車で来たから、めっちゃ汗を掻いてて、さっきまで一緒にシャワー浴びてたんだもんね」

「吉賀が、シャワーを浴びろって うるさいからじゃないか」

「えー 僕、汗臭いのって、嫌だもんね。
中川さんだって、嫌でしょ」

「そうね。男の子だって、清潔が一番ね」

松子

吉賀

小村

吉賀

松子

吉賀

松子

(女優)

吉賀

松子

吉賀

美優

松子

松子

美優

小村

(いや、松子 突っ込む場所は、そこじゃなくて、なんで、男同士でシャワーを浴びてるところだろ)

「ほら、中川さんだって言ってる」

「二人が仲のよいのは知ってるわよ。そんなことより、始めましょ」

「そうだね。何からしようか」

「やっぱり、一番 苦手な英語かな」

「そうね。せっかく吉賀君がいるから英語からしましょか」

▽勉強を始める四人

(一時間くらい経過)

「そろそろ、休憩にしない」

「そうしよ そうしよ」

「一番 疲れてなさそうな夢前が言うなよ」

美優

松子

美優

「私の この小さな脳みそでは、もう、いっぱい、いっぱいなの」
「そうよね。美優、だいぶん進んだんじゃない」
「さすが、松子 分かってる」

▽吉賀 立ち上がる

「じゃ、何か飲み物でも入れるよ」

「手伝うわ」

吉賀

「飲み物 重たいから 小村君に手伝ってもらうよ。女子は 待ってて」

松子

「ありがとう」

小村

「おっけー」

▽小村 立ち上がる

小村 派手なボクサーブリーフを履いている

(美優)

松子

美優

(#A1によるイメージ画像#)

▽美優 松子 小村のボクサーブリーフに注目

(わ! なに、小村君のパンツ!)

▽小村、吉賀 部屋から出る

「ねえ、小村君のパンツみた。あんな趣味だったんだ」

「うん、意外だったわ」



吉賀

松子

美優

松子

美優

吉賀

小村

吉賀

▽吉賀 小村 部屋に戻ってくる

吉賀 松子ももってきたクッキーをお盆の上に乗せて持っている
吉賀 お盆にジュースの入ったグラスを乗せて持ってきている

「お待たせ。何話してたの」

「美優が、小村くんのパンツ 派手だなんて」

▽美優 慌てる

「言っていない、言っていないって」

「冗談よ。美優、慌てて面白い」

「松子ったら」

「そう思う、僕もそう思うよ」

「おい、吉賀、何言ってるんだ。このパンツは、吉賀が貸してくれたやつだろ」

「そっか。僕のやつだった」

(美優)

「何、男にパンツをプレゼントか？ 変態か？

しかも、女心をくすぐるデザインやし」

松子

「なんだ、それじゃ、吉賀くんの趣味じゃない」

(美優)

「いや、松子 そこツッコむところが違う」

吉賀

「ねえ、このパンツ 小村君に似合ってると思わない。

小村君に穿いてもらおうと思って、デパートから取り寄せたんだ」

松子

「そうね。小村君、もともとモデル体系でスタイルいいから、似合ってるわよ」

(美優)

「だから、そこじゃないって。なんで、小村君を想像して買うんだって」

小村

「おいおい、そんなことないよ」

松子

「美優、どう？」

美優

「わ、私も、似合ってるって思うけど」

(美優)

「確かに、もっこり具合は最高なのよね」

小村

「そうかな。ありがとう」

吉賀

「だったら、僕のセンスも褒めてほしいな」

松子

「うんうん。吉賀君のおしゃれセンスは最高よね」

吉賀

「やった 褒められちゃった」

▽小村 お盆をもったまま、立っている

小村

「それより、机の上 どけてくれよ。置けなくて困ってるぞ」

松子

「ごめんなさい。片付けるわ」

(美優)

(ち、座ったら、もっこりが見えなくなるじゃない)

吉賀

「小村くん、ちょっとストップ」

小村

「何？」

▽吉賀 小村のボクサーブリーフの裾に手を指を入れてすぐに離す

小村

「おい、こら、吉賀 何するんだ」

吉賀

「ちょっと、毛がはみ出してたから」

(美優)

(なに、吉賀、げ、こいつ小村君の触ってるよ。

チクシヨ—うらやましいぞ。私も、男に産まれればよかった
いかん、それじゃ変態おやじだ)

小村

「サンキュー」

(美優)

(なにがサンキューだ。言われなきや気がつかないって)

松子

「吉賀君って、すごく気が利くのね」

(美優)

(いや、松子 それも違うって)

吉賀

「僕って、なんかそういうところ気になっちゃうんだよね
やっぱり、レディの前だと身だしなみって大事じゃない」

松子

「さすがだわ」

(美優)

(松子 頼むから吉賀の洗脳から解放されて)

▽小村 お盆を置き、自分の場所に座る

○エアコンが直る

機械の音

”パッチン”

”スウ”

吉賀

「あ、エアコンが動き出した。直ったんだね。

風邪をひくといけないから、小村君 服着ようつか」

(美優)

(ずっと、あのままで よかったのに)

○(夕方) 吉賀のマンションの下で

▽美優、松子、小村、吉賀がいる

美優

「今日は楽しかった」

小村

「夢前は、半分くらい遊んでたもんな」

美優

「いいんじゃないの 試験は明後日なんだし
今日は試験前の息抜きだと思えば」

松子

「智美 来れなくて残念ね」

吉賀

「そうだね。次は、高谷さんも一緒に来てね」

松子

「そうね 次はの時は、絶対 智美を連れてくるわ」

▽小村 自転車にまたがる

▽小村 美優に合図する

小村

「夢前は、送ってやるから乗りなよ」

美優

「いいわ。今日は松子と電車で帰るわ」

小村

「そうか。やっぱ そうだよな」

松子

「あら、私は、一人で帰れるから大丈夫よ」

美優

「いいわよ。一緒に帰りましょうよ」

吉賀

「それなら、中川さんは僕が駅まで送るよ」

小村

「お、吉賀、いいところあるじゃん」

美優

「じゃ、私はお尻が痛くなる　自転車で帰りますか」

小村

「今日は特別に、砂利道　優先で　もつと痛くしてやるからな」

松子

「もう、二人ったら」

小村

「それじゃ、帰るか。夢前　乗れよ」

美優

「乗ってください　でしょ」

小村

「はいはい。乗ってください。女王様」

(美優)

(女王様　なんて　いい響き)

美優

「じゃ、安全運転でね」

美優

小村

松子

吉賀

吉賀

松子

▽美優 小村の自転車の後ろに乗る

「じゃ、松子、吉賀君、またね」

「じゃな。吉賀、中川さんをちゃんと送るんだぞ」

「はい。またね」

「うん。任せておいて。じゃ、月曜日ね」

▽小村 美優、自転車で去っていく

▽松子 吉賀 手を振っている

○小村 美優の乗った自転車が見えなくなる

▽吉賀 松子の方を向く

「じゃ、中川さん 駅まで行こうか」

「ありがとう。でも、一人で帰れるわよ」

吉賀

「小村君に、ちゃんと送るって言ったからダメだよ」

松子

「そうね。じゃ、お願いするわ」

▽松子 吉賀 駅に向かって歩き出す

○駅までの道のり

松子、吉賀が話ながら歩いている

松子

「勉強ってみんなですると、こんなに捗らないものなのね」

吉賀

「中川さんも、そう思ってた？ じつは僕も」

松子

「やっぱり勉強は一人でするものなのかしら」

吉賀

「そうかな。試験で一問間違えるくらいなら、今日みたいな時間は合った方がいいかな」

松子

「そうね。私もそう思うわ。テストで百点取ると、みんなで過ごす時間どっちがいいかって聞かれたら、みんなと一緒に過ごしたいって答えるわ。それに・・・」

吉賀

「それに？」

松子

「吉賀君と 一緒に居れたんですもの」

吉賀

「僕といると いいの」

松子

「どうしてか判らないけど、吉賀君と ずっといたい」

▽吉賀 松子の手を繋ぐ

▽松子 吉賀の手を握り返す

▽吉賀、松子 手を繋いで 駅の道のりを歩く

○駅の改札

▽松子 改札を通る

▽吉賀 改札の反対側にいる

松子

「じゃ、月曜日ね

そうそう、私、吉賀君が小村君のを触った時に嫉妬しちゃったわよ」

美優

○自転車に乗ってる美優と小村

小村

「ねね、ここは彼女の専用席でしょ」

吉賀

「彼女？ いないよ」

小村

「さっきまで居たじゃない。色の白い帰国子女」

美優

「吉賀かよ。まあ、夢前より女らしいけどな」

小村

「その一言、レッドカード」

美優

「こうして、夢前を乗せるのって久しぶりだな」

▽美優 小村の背中に顔をもたれる

美優

「こうしていると、気持ちいいわ」

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第八話

夢雄
美侶

サブタイトル 「待ちに待った夏休みなのだ」

あらすじ

高校生活 はじめての夏休み

松子の提案で、松子のおばあちゃんの家に行くこととなります
そこで、巻き起こるエロティックファンタジー

登場人物（本話のみ）

特になし

第一幕　　夏休み　前編　　

○（休み時間）一年二組教室

▽期末試験も終わり、緊張感がなくなった一年二組の教室

「ああ、相変わらず、松子が一番ね。そして、吉賀君が二番か
まあ、美優よりは上だから　いいけど」

「何それ。私だって順位上がってるんだから」

「夢前さん、試験勉強がんばったもんね」

「ありがとう。吉賀君は、いじわる智美と違って優しいわ」

「高校生活始まって　初めての夏休みか。
みんなと会えなくなるの寂しいわ」

「まあ、私と智美は部活があるから、会えるけど、松子には
なかなか会えないよね」

「ほんと　寂しいわ。」

智美

美優

吉賀

美優

松子

美優

松子

智美

「大丈夫よ、ツナグですぐ会話できるから、会いたくなったら、いつでも連絡してちょうだい」

松子

「ありがとう。そうだ、せっかくの夏休みよ。みんなで海に行かない？」

美優

「海？」

松子

「そう、海に泳ぎに行かない」

智美

「いいわね。でも、どの海？」

松子

「日本海に私のおばあちゃん家があるの。とっても海が近いのよ。どうかしら」

智美

「でも、松子のおばあちゃんに迷惑がかかるわよ」

松子

「そんなことないわ。おばあちゃん、独りで住んでるから、みんなで行けば喜んでくれるわ」

智美

「いいの？」

松子

「いいわよ。古い家だけど、部屋もたくさんあるし、みんなで行こうよ」

美優

「いいわね。海なんて、幼稚園の頃いつたきりだわ」

智美

「私も、日焼ける場所は避けてたもんね」

松子

「智美、日焼けする場所嫌い？」

智美

「大丈夫よ。今のサンスクリーンは、優秀なんだから」

(美優)

(サンスクリーンってなんだよ。日焼け止めって言えばよ)

美優

「よっし決まった。女同士で海だああ」

▽松子 吉賀に近づく

松子

「ねえ、私たち三人、夏休みに海に行くの。吉賀君達も一緒に行かない？」

(美優・智美)

(え？)

吉賀

「いいの」

松子

「ええ。女の子三人じゃ、心細いもの」

吉賀

「じゃ、小村君にも声をかけてみるね」

松子

「もちろん。じゃ、決まりね」

(美優・智美)

(まさか、松子、それが目当てで・・・)

吉賀

「でも、女の子三人で、男二人か」

松子

「そうね。もう一人男の子いないかな」

▽吉賀 女子三人の会話が聞こえている

▽吉賀 前の席の松村の肩を叩く

吉賀

「ねえ松村君、夏休みに みんなで、海に行く計画なんだけど、行かない？」

松村

「僕は、いいよ」

吉賀

「どうして、ねえ。行こうよ」

松村

「いや、いいよ」

(美優)

(よりによって、松村に声かけるなんて)

吉賀

「松村君、水泳得意だからさ、泳ぎ方教えてよ」

松村

「そんなことないよ」

吉賀

「えええ、そんなこと言わないでさ」

松村

「そんなに言うなら、行ってもいいけど」

吉賀

「じゃ、決まりね。絶対だよ」

(美優)

(なに〜クラス一の根暗じゃないかあ・・・
でも、なんか私の勘では、いいことありそうなんだよな。
じっくり品定めしてやるか)

(智美)

(よりによって、あんなオタク小僧を、吉賀め)

吉賀

「いいよね。中川さん」

松子

「もちろんよ」

（松子）

松子

吉賀

美優

母

美優

美優

（まあ吉賀君以外は人数あわせだから、誰でもいいのよ）

「じゃ女子は私が連絡係するから男子は吉賀君お願いね」

「おっけえ」

○（その日の帰宅後）美優の家 玄関

「ただいま」

「お帰り、美優」

▽美優 階段をあがり姉の部屋に

○（同）姉の部屋

「今日の特集はとと・・・なになに」

” 男はパイズリが大好き”

「私もピザパイ好きだもんね」

美優

「ピザに頼ずりするなんて、男ってそんなに好きなんだ」

美優

「ぎょえー」

美優

「おっばいで挟んでるよ」

美優

「おおおお。すげえ」

美優

美優 太めのマジックを 胸に挟みちよつと寄せてみる

「小村君、こんなので 喜ぶのかしら?」

○（夕食）夢前家

ダイニングで食事をしている

美優

「夏休み、みんなで海に行く計画してるんだけど、行つていい」

母

「だれと行くの」

美優

「松子と、智美と、あと、クラスの男の子」

母

「え? 男の子達と海に泊まりに?」

美優

「うん」

母

「大丈夫なの？」

美優

「平気平気。泊まるのは松子のおばあちゃん家だし」

母

「松子ちゃんのおばあちゃん家なの」

美優

「そうよ。だから、男子も変なことできないって」

母

「そうよね、松子ちゃんだったら安心よね」

(美優)

(いや その松子が一番 危険なんだけど)

姉

「でもさ、男の子って、今が一番危ない時期よ」

美優

「大丈夫だよ。変なこと、するような男の子じゃないわよ」

姉

「そうね、美優の場合、男の子の方が、危険ね」

美優

「どういう意味よ」

母

美優

「まあ、いいわ、行ってらっしゃい。お世話になる 松子ちゃんのおばあちゃんに、何かお土産もっていかなくちゃね」

「はあい」

Copyright@2026 D&S

□第二幕 夏だぜ海だぜ！ 膿だぜ！

一学期が、終わり夏休みになった

我らが、エロ乙女3人と、シャイな男3人は

松子のおばあちゃん家に行った。

松子のおばあちゃんの家は、本土から船で10分くらい乗らなくては着けない、小さな島にある。

船着き場から、真っ直ぐに、石畳の階段を上がり、登り切った所を、少し歩くと、大きな屋根の古民家がそうだ。

○快晴の夏休み

○電車の中

美優 松子 智美 四人がけ椅子に座って会話している
反対側の四人席に 小村 吉賀 松村 が座っている

▽美優 車窓から海を見る

「みんな 海よ。綺麗」

智美

「わ。日本海って綺麗って聞いていたけど、想像以上ね」

小村

▽小村 女子の席の方にきて、景色を見る

「ほんとうだ。真っ青だ」

美優

○駅からおばあちゃんの家までの道のり

「もうすぐ」

松子

「もうすぐだから がんばって」

○松子のおばあちゃんの家

▽松子 土間に入る

松子

「おばあちゃん、こんにちは」

▽松子のおばあちゃん 奥から出てくる

おばあちゃん

「はい、こんにちは。松子ちゃん、いらっしやい」

智美

美優

お婆ちゃん

小村

吉賀

松子

智美

松子

お婆あちゃん

▽智美、美優、吉賀 小村 松村 土間に入っていく

「お世話になります」

「よろしく願います」

「松子のお友達だね。いつも松子と仲良くしてくれてありがとうね
さあ、入って入って」

「おじゃまします」

○（同）囲炉裏のある部屋

「すごい、本物の爐だ」

「そうよ。ご飯はここで食べるのよ」

「楽しみだわ」

「お婆あちゃん、いつもの部屋使うわね」

「さっき 掃除しておいたから、自由に使ってね」

松子

松子

智美

「ありがとう。みんな こっちよ」

▽板張りの廊下を歩き、部屋の前につく

「男の子達はこの部屋を使って。

私達は、廊下を挟んで反対側の部屋よ」

「じゃ 早く 着替えて海に行きましょうよ」

★★★参考のページ★★★

ここ出てくる、小村と吉賀男の水着ですが、

DIESELのベリーショートボクサーという商品で、

小村が穿いているのは、青、水色、白の横縞の

吉賀は穿いているのは、と、赤、黒、グレーの横縞のやつです。

ちなみに、松村が穿いているのは、同じ、DIESELの

ショートボックストランクス白で、スクール水着のような生地ので

モ○コリが結構わかってしまいます。

ネットで、"ディーゼル 海パン" で検索してみてね。

★★★参考のページ おわり★★★

○（同）家の前

▽小村 吉賀 松村 待っている

小村 レジャーシート、飲食する物が入った カバンを持っている

吉賀 松村 おばあちゃんの家にあった、ビーチパラソルを持っている

小村 上半身は裸 短めのサーフトランクスに白のパーカーを羽織っている

吉賀 上半身は裸 短めのサーフトランクスに白のパーカーを羽織っている

松村 上半身はＴシャツ 下は白のサーフトランクス

▽美優 智美 松子 古民家から出てきて、男子を見る

美優 緑のワンピースの水着に蛍光色のパーカーを羽織っている

智美 水色のセパレートに、ピンクのパーカーを羽織っている

松子 花柄のワンピースに、白のパーカーを羽織っている

それ以外にも、自分達が持参して荷物が入ったカバンをさげている

松子 智美

「ねえ見て見て、男の子達の水着」
「いつも学校で穿いてるのと違うのね」

(#AIによるイメージ画像#)



智美

(美優)

「小村君と、吉賀君の水着、めっちゃ短いわね。しかもお揃いだし。」

(あいつら、露出狂か？ それとも、私たちより足が細いのを
自慢したいのか)

▽美優、智美、松子 男子の側にいく

「おまたせ」

吉賀

「大丈夫、全然まってないから」

智美

「荷物は持った」

▽小村 カバンをみせる

小村

「大丈夫」

松子

「じゃ、出発よ」

○砂浜までの道のり

一列目…松子と吉賀

二列目…智美と松村

三列目…美優と小村

▽美優 前を歩いている松村のお尻を見る

(しかし松村って、幼い顔してるけど、良い尻をしてるよな。なんとなく肩幅もあるし、胸も厚そうだ)

(美優)

▽松子 横の吉賀に話かける

「ねえ、吉賀君と小村君の水着ってお揃いなだね」

「そうだよ。色違いなの。一緒に買いにいったんだよね」

吉賀

松子

「男の子同士でも服を買いにいくんだ」

小村

「いうか、俺は買う気なかったんだけど、店員がひっこくってさ」

▽吉賀 ニヤニヤする

松子

「吉賀くん、何、その変な顔」

吉賀

「小村君、その店員さんに、エッチなことされたんだよね」

松子
智美

「エッチな事って？」
「何、何、気になる」

Copyright@2026 D³S

□第三幕（回想）海パンを買うぞ

←# 回想 #← 小村と吉賀が海パンを買いにいった

○（1週間前の日曜日）メンズファッションのショップの中

▽吉賀 小村 水着を見ている

▽小村 水着の値札を見て驚く

「おい、吉賀、この店 高そうだなぞ」

「いいの 僕のお気に入りのブランドだから」

「いや、これは高校生の買うものじゃないだろ」

「大げさだな。今の高校生、これくらいお金かけれるよ」

「そうなのか」

▽吉賀 畳まれていた海パンを数枚取り、ショーケースの上に広げる

小村
吉賀
小村
吉賀
小村

吉賀

「どれが いいと思う？」

小村

「俺、こう言うことに 疎いんだよな」

吉賀

「だめだよ。女の子も来るんだから。健ちゃんもおしえれしなきゃ」

小村

「別にいいよ。なんだって」

▽店長 近づいてくる

店長

「いつもありがとうございます。今日は、スイムウェアをお探し？」

▽店長 男だが、華奢な体型で、クネクネし、両手のリアクションが大

吉賀

「そっなの。今年の最新のモデルはある？」

店長

「ええ、ちょっと待ってね」

▽店長 ハンガーにかかった水着を3枚ほど選んで持ってくる

店長

「そっね、今年のモデルは これね。」

吉賀

店長

吉賀ちゃんに 似合うのは こっちね」

▽店長 吉賀に 水着を見せる



(#A Iによるイメージ画像#)

▽吉賀 自分の体にあてみる

「とても可愛いいわよ」

「うん。僕もそう思う。小村君はどう？」

小村

「ちょっと 短すぎないか？」

店長

「見えるか、見えないか っていうのがいいのよ」

吉賀

「ちょっと試着してみるね」

▽吉賀 店員から水着を受け取り試着室に入る

▽店長 小村に話しかける

店長

「さてと、あなたは、どんな水着が似合うかしら？」

小村

「あ、俺は付き添いですから」

店長

「そう？ 可愛いのに残念だわ」

(小村)

(何が残念なんだか・・・)

▽吉賀 試着室のカーテンを開ける

吉賀

「ねえ、小村君、どう？」

小村

吉賀

店長

吉賀

小村

店長

店長

吉賀

店長

▽吉賀 上半身裸で海パンだけの姿

「吉賀、なんで、上まで脱ぐんだよ」

「だって、この方がわかりやすいじゃん」

「すてき！ とっても似合ってるわ」

「小村君は」

「うーん、いいんじゃないかな」

「ちょっと、しゃがんでみて」

▽吉賀 しゃがむ

「素敵 ほら、もっこりがすごいでしょ」

「あ、本当だ」

「吉賀ちゃん、おおきいから とてもいいわ」

吉賀

▽くねくねする 店長

「じゃ、これにしようかな」

▽吉賀 試着室に入り カーテンを閉めた

▽試着室から出てくる吉賀

吉賀

「ねえ、小村君も買えば？」

小村

「いいよ。だって、ここ高いし」

店長

「そんなこと言わないで。

買わなかったっていいから、試着して私を喜ばせてよ」

(小村)

(なぜ、喜ぶ)

吉賀

「そうだよ。高くても気に入ったの着たほうがいいよ」

小村

「そんなに言うなら じゃ、試着だけだよ」

店長

「ちょっと待ってね」

店長

▽店員 1枚の水着を取ってくる

「彼と色違いよ。穿いてみて」

店長

▽小村 水着を渡され、試着室に入る

「どうかしら」

▽小村 カーテンを開ける

吉賀

「小村君、ダメだよ、Ｔシャツも脱いで」

小村

「Ｔシャツは関係ないって」

吉賀

「だめだめ、体の色とかも関係するんだから」

店長

「そうよ、抜いて、抜いて・・・」

あら？ イヤダ、抜いて だなんて」

▽Ｔシャツを脱ぐ 小村

店長

「すごい、この青と白のコントラストが可愛いわ。すごく似合ってる」



(#A Iによるイメージ画像#)

小村

「そうかな？」

吉賀

「うん 似合ってる。買った方がいいよ」

▽小村 水着の値札を見る

小村

「1万2千円・・・こりや高すぎるよ」

吉賀

「ええええ、残念だなあ。絶対、小村君の為の水着なんだけどな。でしょ 店長」

店長

「そうよ、似合ってるわよ」

小村

「でも、そんなお金ないし」

店長

「これだけ似合ってるのに、どうしたものかしら」

▽店長 腕を組んで考える

店長

「いいこと、ちょっと 大人しくしててちょうだい」

▽店長、小村と試着室に入る

小村

「え、なに なに」

店長

「いいから、静かに」

▽店長 小村の乳首を舐め始める

小村

「だめですよ」

▽店長 気にせず 小村の穿いている海パンに手をつっこむ



(#A Iによるイメージ画像#)

小村

「あっ」

▽店長 ゆっくりと 小村の陰茎を揉み出す

小村

「何をするんですか。止めてください」

店長

「いいから、黙って」

店長

「若い子っていいわねえ。もう、こんなになって」

小村

「や、やめてください。そんなことしたら、出ちやいます」

店長

「いいわよ　出しても」

小村

「あ、本当に、出る、出る」

小村

「あっ」

▽店長　海パンから手を出し、手に付いているものを舐める

小村

「うっっ」

▽店長　小村の海パンの中を見る

店長

「あらっ。こんなの商品にならないじゃない。

もうお金は、いらなから、持って帰ってちょうだい」

店長 小村

「え？」

「さ、早く脱いで、袋に入れてあげるから」

Copyright@2026 D's

吉賀

松子

(美優)

小村

美優

小村

小村

智美

→ # 現在に戻る # →

○砂浜までの道のり

「ね、すごいでしょ」

「小村君、貴重な経験したのね」

(松子 そうじゃないって)

「いや、貴重じゃないから」

「でも、1万2千円、儲かったんでしょ」

「まあ そうだけど」

○砂浜

「着いたぞ」

「きれい」

Copyright©2026 D's

美優

松子

智美

智美

美優

小村

吉賀

「いいなあ、海がこんなに近いのって」

「そう？ 洗濯物が磯臭くなるってお婆ちゃん愚痴ってるわ」

「そんな現実的な話は、しないの」

▽小村 レジャーシートを広げる

▽吉賀 松村 ビーチパラソルを設置

「めっちゃ雰囲気でるう」

「うん、海にきたって感じだよね」

▽小村 フロートに空気を入れはじめ

「吉賀、空気入れるの手伝ってくれよ」

「おっけー」

（数分後）

▽吉賀 レジャーシートに座りカバンから日焼け止めを取り出す

▽吉賀 上に羽織っていたパーカーを脱ぎ 胸に日焼け止めを塗り出す

▽智美 吉賀の塗っている日焼け止めを見る

智美 「ねえ 吉賀君、その日焼け止めって、二万円もするやつじゃない？」

吉賀 「多分それくらいだったと思うよ。僕これじゃないと ヒリヒリするんだ」

智美 「吉賀君の色白って、やっぱり、高いだけのことあるのね」

(美優) 「ケケケ漂白剤の風呂にでも浸かっているのかと思ってたよ」

智美 「ねえ、ちょっと使ってみていい？」

吉賀 「どうぞ。どうせ、ワンシーズンしか使えないものだから、余るともったいないもんね。」

智美 「わ、やった、やった」

▽吉賀 智美に日焼け止めクリームを渡す

小村

▽小村 立ち上がり、パーカーを脱ぎレジャーシートの上に置く
「吉賀、松村、行こうぜ」

▽小村 海の方に向かう

吉賀

「僕たちも 行こうか」

松村

「うん。先に行ってて」

▽吉賀 立ち上がり 小村を追いかける

▽吉賀 小村 海の中に入っていく

▽小村 吉賀に水をかける

吉賀

「冷たいよ」

▽美優 二人を見ている

美優

「子供だよね」

Copyright©2026 D'S

「何言ってるの。私たちも まだ 子供よ」

▽松村 立ち上がり、下に穿いている白のサーフトランクスを脱ぐ

脱ぐと、下には横に赤のラインの入った真っ白の競泳パンツを穿いてる
さらに、上に着ているＴシャツを脱いだ

幼い顔からは想像できない、無駄な脂肪がまったくない、筋肉質の
肉体が現れる

▽松村 振り返り、カバンからゴーグルを出そうとする

振り返った瞬間 女子の目に松村の体に目が止まる

▽美優 智美 松子 絶句

▽松村 メガネを外し、ゴーグルを首にかける

▽美優 智美 松子 メガネを外した松村の素顔にさらに驚く

(なに、なに、反則級のラスボスが出てきた感じじゃん)

▽松村 女子に見られていることに気づく

松村

「

「高谷さん、どうかした」

智美

「松村君のメガネしてない顔初めて見たから、ちょっと驚いて」

松村

「ムチャクチャ視力が悪い訳じゃないんだけど、水泳にはメガネ使えないから度付きのゴーグルに変えるんだ」

智美

「そんなんだ。でも松村君で、メガネの時と、無いときで、顔がぜんぜん違うね」

松村

「そうかな」

智美

「うん。メガネ外した方が断然いいよ。コンタクトにするとか」

松村

「ありがとう。でもコンタクトは怖いな」

智美

「えゝ残念だ」

▽吉賀 海から手をふり松村を呼ぶ

吉賀

「おーい、松村君」

松村

「すぐ行くよ」

松村

「吉賀君たちが呼んでるから」

智美

「いってらっしゃい」

▽松村 海に向かっていく

松子

「松村君の体 すごいわね」

美優

「まさに、頭隠して尻隠さずってことだわ」

松子

「いや、合ってないと思うし」

▽智美 海にいる松村を見ている

松子

「智美、どうしたの」

智美

「え、なんでもないわ」

美優

「私たちも 海に入ってみようよ」

Copyright©2026 D's

智美

「う、
うん
そうね
」

Copyright@2026 D³S

□第四幕 その夜の出来事

○（夜）古民家 小村、吉賀、松村の部屋

部屋にエアコンは無く、扇風機が回っている

暑いので、小村、吉賀、松村は、上半身裸で過ごしている

吉賀 ランニングパンツ

小村 バスパン

松村 ハーフパンツ

▽三人 布団の上で、スマートフォンをいじっている

「今日は楽しかったな」

「そうだね」

「連れてきてもらって、よかったよ」

「松村君にそう言ってもらえて 誘ったかいがあったよ」

「ありがとう」

「しかし、松村って、良い身体してるよな」

小村

吉賀

松村

吉賀

松村

小村

吉賀

「うんうん、すごい筋肉だね。カッコイイよね」

松村

「そうかな。僕は小村くんの様に、身長がある方が、うらやましいよ」

小村

「え、そうか。俺は、松村の体がいいな」

吉賀

「小村君、その発言、誤解を招くよ」

小村

「どうして」

吉賀

「いや、なんでもない」

吉賀

「ねね、松村君 ちょっと 触ってもいい？」

松村

「いいよ。でも それも 誤解を招く発言だね」

吉賀

「松村君になら、誤解されてもいいけど」

▽吉賀 松村の胸に、手のひらをあてる

吉賀

「スゴイ！ 心臓が、ドクドク鳴ってる」

吉賀

▽吉賀 松村の割れた腹筋を撫でる

「これこれ、憧れちゃうよ」

小村

「なに、吉賀、そんなのに憧れちゃうの。なら、俺のも触ってもいいぞ」

▽小村 吉賀に腹筋を見せつける

吉賀

「さ、そろそろ寝よっか？」

小村

「おいおい、無視するなって」

吉賀

「冗談、冗談。小村君のも羨ましいよ」

小村

「よしよし。許してやる。明日も早いし、寝ようぜ」

吉賀

「うん」

▽小村 部屋の明かりを消す

▽三人 布団に入って寝る

(一時間経過)



(#AIによるイメージ画像#)

(小村)

(あ、あつ)

(吉賀)

(小村くん カワイイ)

(吉賀)

(こんなに なっちゃって)

▽松村 声が聞こえたので、目が覚める

薄めで、横に寝ている小村の方を見る

▽小村 暗闇の中で腰が上下に動いている

小村の横で、黒い人影(吉賀が、小村の陰茎を握り、扱っている)

(小村)

(あつ うぐつ)

(吉賀)

(ああ、もう、いっちゃた。早いんだから)

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

第九話

夢雄
美侶

サブタイトル「ああ夏休みが終わっちゃうのだ」

本話について

あらずじ

夏休みに松子のおばあちゃんの家みんなで泊まりにきました
翌日は、さらに エロエロ土がパワーアップ
最後では、吉賀の秘密が少しだけ判明し、
本シーズンは終了となります。

登場人物（本話のみ）

松子のおばあちゃん

□ 第一幕 夏休み 後編

○（朝）松子の祖母の家

○ 小村達が寝ている部屋

▽ 小村 バスパンの中がヒンヤリしていることに気づき、上半身を起こす

「やってしまった」

▽ 吉賀 体を起こす

▽ 松村 釣られて起きる

▽ 小村 自分の穿いているバスパンを見つめている

「どうしたの小村君」

「夢精してしまったよ」

「エッチな夢を見たんでしょ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

「なんでわかるんだ」

松村

「男が夢精する時って そんなもんだよ」

小村

「松村も夢精したことあるの」

松村

「いや、僕はないけど」

吉賀

「僕だって ないよ。それより、パンツ履き替えた方がよいよ」

小村

「そうだな。先に海パンに履き替えておくよ」

吉賀

「ガビガビになるから、パンツは洗っておいたほうがよいよ」

小村

「サンキュー。こんなことならオナニーしとけばよかった」

吉賀

「まあ、出しっちゃったものは、しょうがないね」

○洗った小村のバスパンを 部屋に干しているシーン

（一時間後）

○海に続く道

▽一同 歩いている

美優 「今日も 良い天気」

松子 「男の子達は、よく寝れた？」

小村 「めっちゃ よく寝れたよ。夢前らは」

美優 「もちろん。寝れたわよ」

智美 「ウソウソ。松子の恋ばなで盛り上げて、遅くなったくせに」

吉賀 「中川さんの恋ばなって興味あるな」

松子 「ないない、なんでもないって」

智美 「こらこら、確信犯みたいな事いうじゃない」

○海の上

▽松村と吉賀 フロートに乗っている

吉賀 海に入り、松村の乗ったフロートを押している

松村 フロートの上でサングラスをかけ、仰向けで寝ている

○砂浜

▽美優 小村 レジャーシートの上で並んで座り話をしている

▽智美 松子 レジャーシートで日光浴しながら話をしている

「昨日の日焼けでヒリヒリするよ」

「ちゃんと日焼け止め塗らないからよ」

「ええ持つてるんだったら貸してくれよ」

「しょうがないわね、私の持つてるの貸してあげる」

「え、貸すだけじゃなく、塗ってくれないの」

小村

美優

小村

美優

小村

美優

「嫌よ」

(美優)

(え、小村君の素肌に触れていいの)

小村

「そんなこと言わずに、おれ、四十肩だから手が届かないんだよ」

美優

「はいはい わかりましたよ、おじさん。
塗ってあげるから、横になって」

▽小村 レジャーシート俯せで海を見る方向に寝る

(美優)

(小村君の背中 綺麗だわ)

美優

「じゃ、はじめるわね」

小村

「よろしく お願いします」

▽美優 日焼け止めを手の平にとり、小村の背中に塗り始める

▽智美 サンングラスをずらし、美優 小村を見る

智美

「お熱いお二人さん。私たちに見せつけないでくれる」

美優

「ボランティア、ボランティアよ」

小村

「そうそう、俺も、ボランティアだと思ってる」

松子

「似たもの同士で言ってなさい」

▽美優 沖でフロートで浮いている吉賀と松村を見る

美優

「あの二人、仲がいいわね」

小村

「そうだよな。海に誘ったのも吉賀だし」

智美

「そうね。案外、あの二人も似たもの同士かも」

(美優)

(うんうん。シヨタ同士だからね。なんて卑猥なんだ)

○沖

▽松村 フロートにのり、仰向けで寝ている

吉賀

(#A Iによるイメージ画像#)



▽吉賀 海に入り、松村の乗っているフロートを押している

「松村君、話があるって何」

▽松村 顔を横に向け、吉賀の方を見る

Copyright@2026 D's

松村

「今朝、小村君 夢精してたよね」

吉賀

「うんうん、僕もビックリだよ」

松村

「僕、見てたんだ。君が 小村君にしていると」

（少し間があく）

吉賀

「そっか、見られてたのか」

松村

「なんで、あんなことしたの？」

吉賀

「なんでだろうね」

松村

「君も、小島君のように、男の子が好きなの」

吉賀

「男の子が好き？僕が、好きなのは、小村君だけだよ。そこを勘違いしたら困るな」

あ、このことは、絶対秘密だよ」

松村

「そうなんだ。誰にも話さないよ」

吉賀

「驚かないのかい」

松村

「君が小島君みたいに、手当たり次第、自分より弱そうな男の子に
してるんだったら、ぶん殴ってやろうかと思ってたよ。
ちゃんと 君の考え方があるんだね。秘密は絶対守るよ」

吉賀

「案外、理解あるんだね」

松村

「そんなことないけどね。でも、小村君はなんて思ってるのかな」

吉賀

「小村君は、何も思っていないんじゃないかな」

松村

「小村君、男女の関係には 無神経なところあるからね」

吉賀

「松村君も、そう思うかい。あまりにも、知らなすぎて 僕も驚くことが多いよ
でも、それが ますます 僕が小村君を好きになってる原因かもしれないな」

松村

「吉賀君って、面白いね。こんな つまらない僕の相手もしてくれるし」

吉賀

「松村君も、十分 魅力的なんだけどな」

松村

「僕がかい」

吉賀

「だって、小島君に、狙われてるし。あれは、きっと 松村君を意識してるからだよ」

松村

「それは、言わないでほしいな。僕だって、気持ち悪いものは気持ち悪いんだから」

吉賀

「じゃ、そう言えばいいんじゃない」

松村

「別にいいよ。ライオンが餌の周りを飛んでるハエを気にしないのと同じさ」

吉賀

「なるほどね」

吉賀

「そういえば、昔 小島君に僕のいくところで興奮してたって言われてたよね
実際は、どうなの」

松村

「そんなこともあったね」

吉賀

「で、本当は」

松村

「そんなことあるわけじゃないか。それに、揉まれると起つのは
しょうがないじゃない」

吉賀

「そっか。残念だな」

松村

「何が」

吉賀

「松村君が話があるっているから、てつきりしてほしいのかと思ったよ」

松村

「まさか」

吉賀

「じゃ、僕が 松村君をすると、気持ち悪いのかな」

松村

「君なら、気持ち悪い気はしないかもね。少なくとも あいつよりは」

吉賀

「じゃ、試してみようか」

松村

「冗談はやめてよ」

吉賀

「僕は、冗談じゃないよ、本気だよ」

松村君にその気がなくても、僕は、ちょっと興味あるかな」

松村

「だって、さっき君は小村君が好きって言ったばかりだよ」

吉賀

「そうだね。でも、ライオンだって、違う肉を食べたりするでしょ」

松村

「前言撤回するよ 君は変わってる」

吉賀

「そうだよ。僕も自分か変なのは認識してるから」

松村

「嫌だっけ言ったら」

吉賀

「大丈夫。嫌って言わないはずだから。だって、ほら」

▽吉賀 フロートを掴んでいる片手を話し、松村の競泳パンツの上から

松村の陰茎を揉む

吉賀

「僕が こうしても 避けようとしなから」

松村

「いつ、殴ろうかと考えているだけだとしたら」

吉賀

「嘘を言ったらダメだよ。ほら、ここは、もう反応してる。
小島君の言ったことは正しいかったんじゃないかな」

▽松村 目を瞋り上を見ている

吉賀

「人気のいない場所に行こうか」

▽松村 うなずく

▽吉賀 泳ぎながらフロートを押し、みんなから見えない場所に移動

▽吉賀 フロートを押して砂浜につける

▽吉賀 フロートに乗り込む

▽吉賀 松村の前に

▽吉賀 松村の肩を抱き手を松村の頭に

▽吉賀 松村を優しくフロートの上に寝かせる

♥ ← ♥ E R O M O D E ♥ ← ♥

○砂浜に置いたフロートの上

▽吉賀 松村の顔をじっとみる

「ぶっしたの」

▽吉賀 松村の顔に近づけていく

▽松村 目をつぶる

▽吉賀 松村にキスをする

(#A Iによるイメージ画像#)



(数秒後)

吉賀

▽吉賀 キスをやめ

▽吉賀 競パンの上から松村の股間をやさしくまさぐる

「君も触っていいよ」

▽吉賀 松村の手を、自分の股間にあてる

▽松村 トランクスの上から吉賀の陰茎をまさぐる

「うん、気持ちいいよ。松村君は」

「僕も気持ちいい」

「ねえ、見ていい」

吉賀

松村

▽松村 うなずく

▽吉賀 松村の海パンをずらし、陰茎を取り出し、陰茎の方を見る

「ビンビンだね」

吉賀

松村

▽吉賀 松村の腹筋を執拗に舐め廻し、陰茎の根元へ

▽吉賀 松村の大きくなった陰茎を口で咥える

「そんなことまで、するの」

▽吉賀 頭を動かし、松村の陰茎を口で扱く

松村

「あ、や、やばいかも」

▽吉賀 口から出し、手で、松村の陰茎を 激しく扱きだす

松村

「あッ あ い」

▽吉賀 松村にキスをし、舌を入れる

▽吉賀 松村の乳首を舐め、激しく扱きだす

▽松村 体が大きく仰け反る

陰茎の先から、精液が飛び出し、松村の腹筋の上に落ちる

▽吉賀 松村のキスを止め、陰茎を握っている手をゆっくりを動かし

吉賀

中に残っているものを握り絞り出す。

「いっば出でたね」

♥ → ♥ E R O M O D E ♥ → ♥

(#AIによるイメージ画像#)



吉賀

小村

美優

吉賀

松村

松子

吉賀

○美優、智美、松子 小村のいる 砂浜

美優 小村 レジャーシートで寝そべっている
松子 智美 レジャーシートで寝そべっている

▽吉賀 松村 海から戻ってくる

「沢山泳いで疲れちゃった」

「よ。おかえり」

「途中で見えなくなったから心配しちゃった。

もう少しまって戻ってこなかったら、探しに行こうかって言ってたのよ」

「松村くん、そんなに長かったけ」

「そうなんだ。時間、そんなに経ってないつもりだったんだけど」

「だめよ。みんな 心配してたんだから」

「中川さんまで」

小村

「無事に戻って来たんだから、いいさ いいさ」

吉賀

「でも、背中が日焼けでヒリヒリするから、やっぱり 大分時間たったのかな」

▽吉賀 顔を背中に向け その後、みんなに背中を見せる

▽松子 体を起こし 吉賀の背中を見る

松子

「本当。背中が赤いわよ」

吉賀

「そうだ。日焼けに効くローションもってきてるんだ。小村君、塗ってくれる」

小村

「おいおい、何が悲しくて、俺が吉賀の背中に塗るんだよ」

吉賀

「いいじゃん」

松子

「私が塗ってあげるわよ」

吉賀

「いいの」

松子

「うん ここに寝転んでくれる」

吉賀

▽松子 自分の寝ているレジャーシート横を手でたたく

「小村君、悪いけど、中川さんをお願いするね」

小村

「ぜんぜん、悪くないっす」

吉賀

「そういえば、松村君は大丈夫」

松村

「僕は、大丈夫」

吉賀

「背中見せて」

▽松村 背中を見せる

吉賀

「背中は大丈夫そうだね。でも前がやばいよ」

▽松村 自分の腹を見る

松子

「ほんとう、松村くんのお腹が、真っ赤じゃない」

吉賀

「松村君も塗った方がいいよ」

松村

「いいよ」

吉賀

「せっかく綺麗な肌をしてるのに、シミになるよ」

松村

「いつも、日焼けしてるから気にしてないよ」

吉賀

「誰か塗ってあげれる人いないかな」

▽吉賀 智美の方をみる

智美

「なに。私が塗ってあげればいいの」

吉賀

「え、そんなの言ってないよ」

智美

「いや、目が 言ってるって」

吉賀

「そうかな」

智美

「いいわよ。松村君は、こっちにきてくれる」

▽吉賀 自分のカバンからローションの瓶を取りだし、
松子の方に行く

▽吉賀 ローションの入った瓶を松子に渡す

吉賀

「じゃ、中川さん お願い」

松子

「すごい、舶来ものじゃない」

吉賀

「日本のは、成分が薄くて効かないんだよね」

松子

「じゃ、背中を上にして寝てくれる」

▽吉賀 レジャーシートに背中を向けて寝転ぶ

松子

「じゃ、始めるわね」

吉賀

「お願いします」

▽松子 瓶の蓋を開け、手のひらにローションを垂らす

松子

「すごい、さらさらして、気持ちいい」

吉賀

「でしょ」

▽松子 手のひらを使い、吉賀の背中にローションを塗っていく

▽智美 立っている松村に声をかける

智美

「ほら、松村君も、ここに来て寝て」

松村

「やっぱり 僕はいいよ」

智美

「女の子から誘ってるの。恥をかかさないでくれる」

▽松村 智美のレジャーシートに寝転ぶ

(智美)

(背筋の筋肉がすごいわ)

智美

「じゃ、はじめるわね」

松村

「お願いします」

▽智美 ローションの瓶を取り、手のひらに垂らす

智美

「わ、なに、この感触。水のようにだけど、すごく軽いわ」

松子

「でしょ、でしょ」

智美

「吉賀君、後で私にも使わせて」

吉賀

「どうぞ。ワンケースで買ってるから、いくらでも使って」

智美

「松子 後で私の背中にも塗ってくれる」

松子

「いいわよ」

▽智美 松村の背中にローションを塗り始める

○美優と小村がいるレジャーシート

▽美優 後ろを見る

智美、松子が 寝ている男子にを塗っている

(美優)

(なんか、風俗みたいじゃん)

美優

「はい、背中終わったよ」

小村

「サンキュー」

(美優)

(次は、前だ前だ、乳首 もっこり 丸見えだ)

小村

「あ、前は 無理だよな」

美優

「え、別に構わないわよ」

小村

「そうか悪いな」

美優

「サンマだって、表と裏を 焼くでしょ」

小村

「あいかわらず、例えの意味わかんないけど」

(美優)

(せっかく 合法で乳首触れるチャンス逃すなんての)

▽小村 体をひねって表を向く

▽美優 小村の乳首 トランクスの膨らみを見る

(美優)

(わーい 小村君のビーチク 小さくてカワイイ)

美優

「じゃ、足からしてあげるわ」

▽美優 足先から塗る

▽美優 ちらっと小村の股間の膨らみを見る

(美優)

(メインディッシュは最後よ)

美優

「小村君の足って大きいのね」

小村

「バスケやってると大きくなるみたいだよ」

美優

「そうなの。トランペットしてると唇が腫れるのと一緒にみたいね」

小村

「美優の説明は、確かに合ってるけど
なんとなく、たとえば悪いような気が・・・」

▽美優 小村のふとももを塗る

▽美優 ちらっと小村の股間の膨らみを見る

(美優)

(あの中に手を入れて、クチャクチャにこねてみたい！)

イヤだ、私、痴女じゃん)

美優

「じゃ、次は、お腹」

▽美優 小村のお腹に塗り出す

美優

「小村君の腹筋ちゃんと6コに割れてるのね。カッコイイよ」

小村

「いやいや腹筋なら、松村でしょ」

美優

「そうね。私もはじめてみたけど驚いたわ」

小村

「ああ、俺も。あいつ、水泳の授業は ずっと休んでたもんな」

美優

「私だったら、見せびらかすのにね」

小村

「夢前らしいや」

▽美優 小村の胸の辺りを塗りながら、さりげなく乳首あたりも指で触っている

(美優)

(この ぶるんってするところ。いいなあ。)

(美優)

▽美優 目線を小村の股間にむける

(あ、少し、大きくなってる。イヤダ小村君 気持ちいいのね)

○松子と吉賀のレジャーシート

その横は、智美と松村のレジャーシート

▽松子 吉賀の背中にローションを塗っている

▽智美 松村の背中にローションを塗っている

「背中終わったわ。反対向いてくれる」

「了解」

吉賀

松子

▽吉賀 体を回転させて、仰向けになる

▽松子 吉賀の体をじっとみる

(トランクスを穿いてても、吉賀君の大きさがわかるわ)

(松子)

吉賀

「中川さん どうしたの」

松子

「つい、吉賀君の肌が綺麗だから、見とれてしまったの」

吉賀

「やっぱり、男が肌が綺麗ってのは、どうかな
僕は、小村君ぐらいが丁度いいと思うけど」

松子

「小村君だって、十分綺麗な肌してるわよね」

小村

▽小村 吉賀の方から名前が聞こえたので返事

「吉賀 なんかつた」

吉賀

「中川さんが、小村君 カッコイイねって」

小村

「中川 ありがとな」

松子

「いいのよ」

松子

▽松子 吉賀を軽くたたく

「もう、吉賀君たら」

吉賀

「ごめんごめん」

▽智美 松村の腰の辺りにローションを塗っている

▽智美 松村の白い競パンのお尻を見る

(智美)

(すごい、引き締まって、なんて、小さなお尻なのかしら)

▽智美 松村の太股にローションを塗る

(智美)

(ぱっと見はわからなかったけど、結構 筋肉着いているのね)

智美

「こっちも、背中終わったわよ」

松村

「ありがとう」

智美

「じゃ、反対向いてくれるかしら」

松村

「いいのかな」

智美

「いいわよ。吉賀君だっしててるでしょ」

吉賀

「松村君、僕のローションに遠慮はいらないよ」

松子

「吉賀君、遠慮するのは、そこじゃないわよ」

吉賀

「テヘ」

▽松村 レジャーシートに仰向けになって寝転ぶ

▽智美 松村の見事に割れた腹筋を見る

(智美)

(近くでみると、すごいわ。K1の選手みたい。)

智美

「顔みられると恥ずかしから、タオルを顔にかけるわね」

▽智美 バスタオルを小さくたたみ 松村の顔にかける

▽智美 ローションを手の平に出し、松村の胸のあたりから塗り始める

(智美)

(すごい 筋肉って固いだけって思ってたけど、弾力もあるのね)

▽智美 松村の体に見とれながら、腹筋、胸のあたりからローションを塗っている

(松子)

▽松子 吉賀の胸のあたりにローションを塗る

(吉賀君の乳首って、透けたピンクね なんて綺麗なんだろう)

松子

「吉賀君 なんで、こんなに肌がきれいな。嫉妬しちゃうわよ」

吉賀

「じゃんじゃん、嫉妬してよ」

松子

「女子って、清潔な男子がいいのよ。ね、智美」

智美

▽智美 松村の体に見とれていたの、松子から急に振られて慌てる

「え、松子 なんか言った」

松子

「男の子だって、肌が綺麗なほうがいいよって」

吉賀

「高谷さんは、色白の男の子ってどう思う」

智美

「そうね。私は、色白よりも 松村君のような、綺麗に日焼けしている方が健康そうでいいなと思うわ」

吉賀

「だって、松村君」

松村

「からかわないでよ」

智美

「あら、私はウソは言っていないわよ」

松子

「そうよね。人それぞれだもんね」。

▽松子

吉賀の足の方に移動し、足の方にローションを塗っている

松子

▽松子 吉賀の股間を見て 膨らんでいることに気づく

吉賀

「ちょっと 吉賀君、興奮しないでよ」

「なに、突然」

▽松子 吉賀の股間の方を指差す

吉賀のトランクスがテントを張っている

智美

「もう、吉賀君たら レディの前よ」

吉賀

「ばれちゃった。だって、中川さんの塗り方が気持ちいいんだもん」

松子

「それでも、だめよ」

智美

「しょうがないよ、男の子だもん」

吉賀

「そうそう、しょうがないんだもん。男の子だもん」

松子

「なに、その言い方 こうしちゃうぞ」

▽松子 手のひらにローションを出し、吉賀のトランクスの裾から手を入れ

陰茎を握り、ローションを擦りつける

吉賀

「ちょっと、やめて、やめて、そこは、いけないよ」

松子

「どう」

▽松子 扱きつづけている

吉賀

「まじで、やばいって、出ちゃうよ」

智美

「松子ったら ダメよ」

松子

▽松子 吉賀のトランクスから手を出す
「どう、わかった」

吉賀

「え、止めちゃうの。出して欲しかったんだけどな」

松子

「こりてないのね。ようし 出してあげる」

吉賀

▽松子 再び、吉賀のトランクスの裾から手をいれ、陰茎を握り扱きだす

「わ、わ、わ、ごめん。 僕が悪かったから、やめて」

智美

▽松子 トランクスから手を出し、吉賀の足に、クリームを塗り出す

「ああ、何やってんだか」

松村

「吉賀君てさ、海外育ちだから、そんなことされても平気なの」

吉賀

「そうかも。でも 日本だから、海外だからって、関係ないと思うけど」

▽智美 ふと 松村の下半身を見る

(智美)

「え、松村君も興奮してるの」

※は、吉賀が扱かれて悶えている声を聞き、少し興奮してた

(智美)

(競泳の水着って、もっこりするとはち切れそうになるのね)

智美

「もしかして 松村君も、大きくなってるじゃない」

松村

「そんなことないよ」

吉賀

▽吉賀 上半身を起こし、松村の股間を見る

「松村君、ウソはだめだよ、めっちゃ起ってるじゃん」

松村

「ごめん。じゃ、もういいかな」

▷松村 上半身を起こそうとする

▷智美 松村が上半身を起こそうとするのを止める

智美

「大丈夫。私の塗り方が上手だってことだもん」

松村

「ごめんね」

▽智美 松村の競泳水着の膨らみをじっと見る

(智美)

(なんて、大きいのかしら

実は、私 男の人のって触ったこともないのよね。

松子は、もう 触ってるというのに

私も、触ってみたい)

▽智美 レジャーシートの上に置いてあるローションの瓶を取る

手のひらのローションを出そうとするが、わざと

松村の競パンの上で手を離し、瓶は松村の競パンの上に落ち

ローションが、松村の競パンに零れてしまう

智美

「あ、ごめんなさい」

▽智美 手で松村の競パンの上のローションを拭おうとするが、

白い競パンに直ぐに染みこまれてしまう

(智美)

(あ、これが、男の人の感触なのね。確かに固いわ)

▽松村 顔の上のタオルをどけ、上半身を起こす

松村

智美

松村

智美

▽智美 何度も 競パンの固くなった部分を擦る

「高谷さん、もう、大丈夫だよ」

「ごめんなさい。汚しちゃって」

▽智美 松村の競パンから手をどける

「海に入ればいいから 問題ないから」

「ごめんなさい」

□第二幕 最後の夜

○（夜） 松子の祖母の家の庭
庭はかなり広い

▽六人は花火をしている

「花火って久しぶりだわ」

「そうよね。花火をする場所がないもの」

「自分でする花火って初めてだよ」

（はいはい。お前ごと筒に入れて、打ち上げてやるよ）

▽松子の祖母 縁側に座り花火をみている

▽松子 新しい火の付いてない花火を持つ

▽松子 花火を持っている吉賀に近づく

「吉賀君、火をくれる」

智美

美優

吉賀

（美優）

松子

松子

▽松子 吉賀の花火に自分の花火をくつつけて、吉賀の花火から火をもらう
松子の花火に火が付いた

▽松子 吉賀が並んで、花火をしている

「おばあちゃん、花火きれいね」

▽松子 縁側で座っている祖母に声をかける

祖母

「うん、うん、きれいだね」

▽松子 吉賀と笑顔になって、花火をしている

○（次の日の朝）松子の祖母の家 次の日の朝

▽松子の祖母の家の玄関

祖母

「たくさん作ったから、お昼に食べなさいね」

▽祖母 ラップで包んだおにぎりが入った、スーパーの手提げ袋を
松子に渡す。

松子

▽松子 袋の中を見る

ラップで包まれた おにぎり
が沢山はいっている

「わぁ、おにぎりだわ。ありがとう」

▽智美 袋を覗く

「素敵なお昼ご飯ね」

「わ、美味しそう」

「ありがとうございます」

「また、来年もいらっしゃい」

「はい。また来ます」

「吉賀くんには聞いてないと思うけど」

「うんうん。おいで、おいで」

祖母

松村

吉賀

祖母

小村

美優

智美

松子

祖母

美優

祖母

智美

祖母

松子

祖母

松子

「うん、絶対くるね。だから、待っててよ」

「はいはい、待ってるよ」

「おばあちゃん、私も 来てもいい？」

「おいで おいで みんなで おいで」

「もう、美優ったら、遠慮しないんだから」

▽祖母 吉賀に近づく

▽祖母 吉賀の手を握る

「松子ちゃんのこと、頼むわね」

「おばあちゃん、何言ってるの。吉賀君は、ただのクラスメイトよ」

「そうかい、そうかい。おばあちゃんは、松子ちゃんのこと、なんでも知ってるよ」

「もう、おばあちゃんたら」

小村

松子

(一同)

○迎えのタクシーが来る

「タクシーが来たら、行こうか」

「じゃ、帰るね。絶対、来年 みんなでくるからね」

「ありがとうございます」

▽6人 タクシーに乗り込む

▽松子 振り返り、ずっと祖母に向かって手を振る

▽祖母 タクシーが見えなくなるまで見送っている

○ 帰りの電車の中

▽ 六人は、おばあちゃんの作ってくれた おにぎりを食べていた

「おいしいわ」

「この素朴さがいいよね」

○ 智美、美優、松子が座っている

「とてもいい 夏休みだったわね」

「本当、最高の夏休みだったわ」

「どうしたの？ 松子 元気ないけど」

▽ 松子 悲しげな表情

「実は、おばあちゃん、体調悪くて、あと半年位しか生きられないんだって」

「え？」

美優

松子

智美

美優

智美

吉賀

美優

松子

「夏休み前に、父と母が話しているの聞いたのよ」

智美

「それで、急に行きたいって言ったのね」

松子

「ごめんね。みんなを巻き込んで」

美優

「何いつてるの。私たちだって、こんな素敵な夏休みを経験できたのよ」

松子

「ありがとう。昔から、おばあちゃん、私の将来のお嬢さんを見たい見たいって口癖のように言ってたの」

智美

「だから、吉賀君をさそったのね」

美優

「松子。大丈夫。来年もみんなで、会いに行けるって」

松子

「ありがとう美優」

智美

「でも、私のパートナーは違うかも知れないけどね」

松子

「もう、智美ったら」

□ 第三幕 夏休みの部活の帰り道

○（夏休み部活の帰り）道

夕方だが まだ明るい

美優は、夏用制服と、リュックを背負っている

▽美優 家に向かって歩いてる

▽小村 自転車で追いかけてくる

「おい。夢前！」

▽美優 小村の声に気づき 止まって振り向く

▽小村 美優に追いつき、自転車を止める

「小村君も 今、帰り？」

「おう、一緒に帰ろうぜ」

「ええ」

小村

美優

小村

美優

▽小村 自転車を降りる

▽小村と美優 並んで歩き出す

○（同）通学路

美優、小村 並んで歩いている

「それにしても 暑いよな」

「ほんと、暑いわよね。なんとかならないかしら？」

「まだ、明るいし、かき氷でも食べて帰らないか？」

「太るわよ」

「美優は、スタイルいいんだから、ちよつとぐらい大丈夫だって」

「お世辞を言っても、割り勘よ」

「ばれたか。よし、決まり」

小村

美優

小村

美優

小村

美優

小村

○キッチンカーの前

キッチンカーの中では店主が注文を待っている

▽美優、小村 キッチンカーの店主に注文する

「イチゴのかき氷2つ」

「はい。かき氷、二人前ですね」

▽小村 お金を払う

▽美優 小村 キッチンカーの横のベンチに座る

「ここ、夏になると、かき氷もやってるんだな」

「ほんと、クレープより、かき氷の気分なもの」

▽店員 大盛りかき氷を一つを持ってくる

持ってきた かき氷 スプーンが2つ刺してある

「はい、かき氷 おまちどおさま」

小村

店主

小村

美優

店主

▽小村 かき氷を受けとる

▽店主 キッチンカーの中に戻って行く

美優

「あれ？ これ」

小村

「どうりで二人前って言ったわけだ。どうする。別々に作り直してもらうかい」

美優

「わたしは、これでもいいわよ」

小村

「俺も これでいいよ」

▽小村 かき氷をもったまま 食べはじめる

▽美優 小村の持っているかき氷を食べる

美優

「やっぱり夏は、かき氷ね」

小村

「なあ夢前 覚えてるか」

美優

「何を」

小村

「一年前ここで、クレープ食べたの」

美優

「もちろんよ」

(美優)

(この後、あなたの大事なところ、握ってしまうんだもの)

小村

「まさか、一年後も　こうして夢前というなんて、思ってもなかったよ」

美優

「私、正直いうと成績は下の方だったの

でも、ここで小村君とクレープを食べて、小村君と同じ学校に進学したいと思ったの。そして、必死で勉強して、

小村君と同じ学校に入れて、とてもよかった。

智美や松子に出会えてとてもよかった。

そういう意味では小村君に感謝しなきゃね」

小村

「美優の成績が下の下って知ってたよ。よく受かったよな」

美優

「レッドカード」

小村

「いや、夢前の頑張りにすごく驚いているんだよ。すごいよ」

美優

「そうよね。私、勉強できなかったから、小村君と同じ学校に行けるなんて

夢また夢だったわ。我ながら頑張ったわ」

小村

「そうだよな。えらいよ」

美優

「ちよっと、上から目線はやめてよ」

小村

「悪い、悪い。なんか、夢前と同じ学校に行けたことがうれしくてさ」

美優

「私もよ」

小村

「海も楽しかったよな」

美優

「ええ、とっても楽しかったわ」

小村

「この学校を選んでよかったよ」

美優

「私も。智美、松子と出会えて最高よ。他の学校に行ってたら、智美や松子に会えなかったと思うと悲しくなっちゃう」

小村

「うんうん。俺、吉賀みたいなのはじめてだけど、本当にすごく良い奴だと思っ」

美優

「わかる。吉賀君って、世界で唯一の人じゃないかって思うもの」

小村

「夢前もそうおもうか」

美優

「思うわよ。あんな子 他にいないって」

小村

「それだと松村だって、他にいなさそうだな」

美優

「うんうん」

(美優)

(あの顔で、あの体格って、ギャップ萌え萌えよ)

美優

「あら、そういえば、最近 部活で吉賀君を見てないけど」

小村

「吉賀は、今 海外の両親の所に行ってるよ」

美優

「海外かくこの年齢で気軽に海外行くのってすごいわ」

小村

「そうだよな。俺なんか、いつ海外旅行なんていけるのか わかんないしな」

美優

「あく私の初海外は新婚旅行までないわね」

小村

「それは、結婚できればね？　ってことじゃない？」

美優

「言ったわね」

小村

「まあ、貰いて無かった時は俺が引き取ってやるよ」

美優

「小村君、今なんて？」

小村

「なんでもない・・・」

▽小村　美優　かき氷を食べ終わる

小村

「じゃ、帰ろうか」

▽美優　かき氷の器とスプーンをキッチンカーにかえしに行く

美優

「ごちそうさま。冷たくておいしかったわ」

店員

「ありがとうございます。彼氏かっこいいね」

美優

「まあね」

美優

(美優)

小村

美優

小村

美優

▽小村 自転車のところで待っている

▽美優 小村のところに走っていく

▽小村 美優 歩き出す

「あの日の小村君のとの出会いは偶然じゃなかったのかもしれないわ」

(我ながら、ロマンチックな言い訳だなあ。

まさか、あんたのイク顔が見たくてとは言えないよな)

(しばらく歩いている)

○信号機のところ

「そついえば、この信号機のところだったよな」

「何が」

「覚えてない？夢前が俺の大事な所を掴んで、驚いたよ」

「そんなこと合ったかしら。私 全然 記憶にないんですけど」

(美優)

小村

美優

(美優)

「うそうそ、あのときの手の感触、未だに忘れられないんだよね」

「俺、慌てて、むちゃくちゃな言い訳してたけど、初めて、親以外に触られて、ほんとに驚いたよでも、最初に触られたのが夢前でよかったかな」

「もう、小村君たら、私 変態みたいじゃない」

(絶対、この手でいかせてあげるからね)

□ 第四幕 吉賀の帰省

○ 吉賀の実家

カリブ海に浮かぶ小国にある、邸宅

▽ 吉賀 広い廊下を歩いている

吉賀は両親に会うため、カリブ海に浮かぶ小さな島国に帰っていた。小国ながら、金とダイヤを産出し、国民は、豊かな生活をしていた。吉賀家は代々、この小さな島国の外交官として勤めている。

▽ 吉賀 大きな扉を開けて、リビングに入る

▽ 初老（吉賀の祖父）が、ソファ―に座ってくつろいでいる

「ただいま、御爺様」

「おお、達郎か 帰ってきたのか」

「はい、たった今、日本から」

「そっか。今回は、いつまで居れるのじゃ？」

祖父

吉賀

祖父

吉賀

吉賀

「一週間ほど こちらに」

祖父

「そうか、ゆっくりしていけよ」
ところで、小村の孫には会えたのか？
どんな、オナゴじやった」

吉賀

「それが、素敵な 殿方様でした」

祖父

「なんと、男であつたか」

吉賀

「はい。それはそれは素敵な殿方様で、お爺さまの
お願いでなくても、惚れしました」

祖父

「そうか そうか それは よいことだ。
ならば達郎、女になるか？」

それとも 2人とも、この国に来て契りをかわすか？
この国なら、同性婚も認めておるからな」

吉賀

「しかし、お爺様、小村様に惚れているのは、私の方だけかもしれません。
もうしばらく時間をいただけますか？」

祖父

「なぜじゃ？」

吉賀

「やはり、共に思いやるようにならなければ、真の夫婦にはなれません」

祖父

「そうか、達郎は文武両道、茶道も心得ておる。

男としても女としても器量をもっておる。

必ず、小村の孫も、お前を惚れるに間違いない」

吉賀

「はい」

▽吉賀母 部屋に入ってくる

母

「ちょっと、お義父さん止めてください」

吉賀

「ただいま お母様」

母

「達郎 おかえり」

祖父

「遙（はるか）、何を言う」

母

「お義父さん、達郎は男ですよ。なんで、男と結婚するのですか？
美しい達郎は、美しい女性と結婚して、さらに美しい子供を

祖父

母

吉賀

母

つくるのです。」

「いかん、いかん。お互いの孫を結婚させようと、小村とワシの約束じゃ。この約束は絶対じゃ」

「そんな戦争中の約束なんか、無効よ。もう、いいから、達郎は久々なんだし友達と遊んできなさい」

「はい」

「いい、お義父さん」

▽吉賀 部屋を出て 長い廊下を歩いていく
祖父と母の言い合いが聞こえている

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

おわり

Copyright©2026 D³S